

911.12-To83ウ



1200500755149

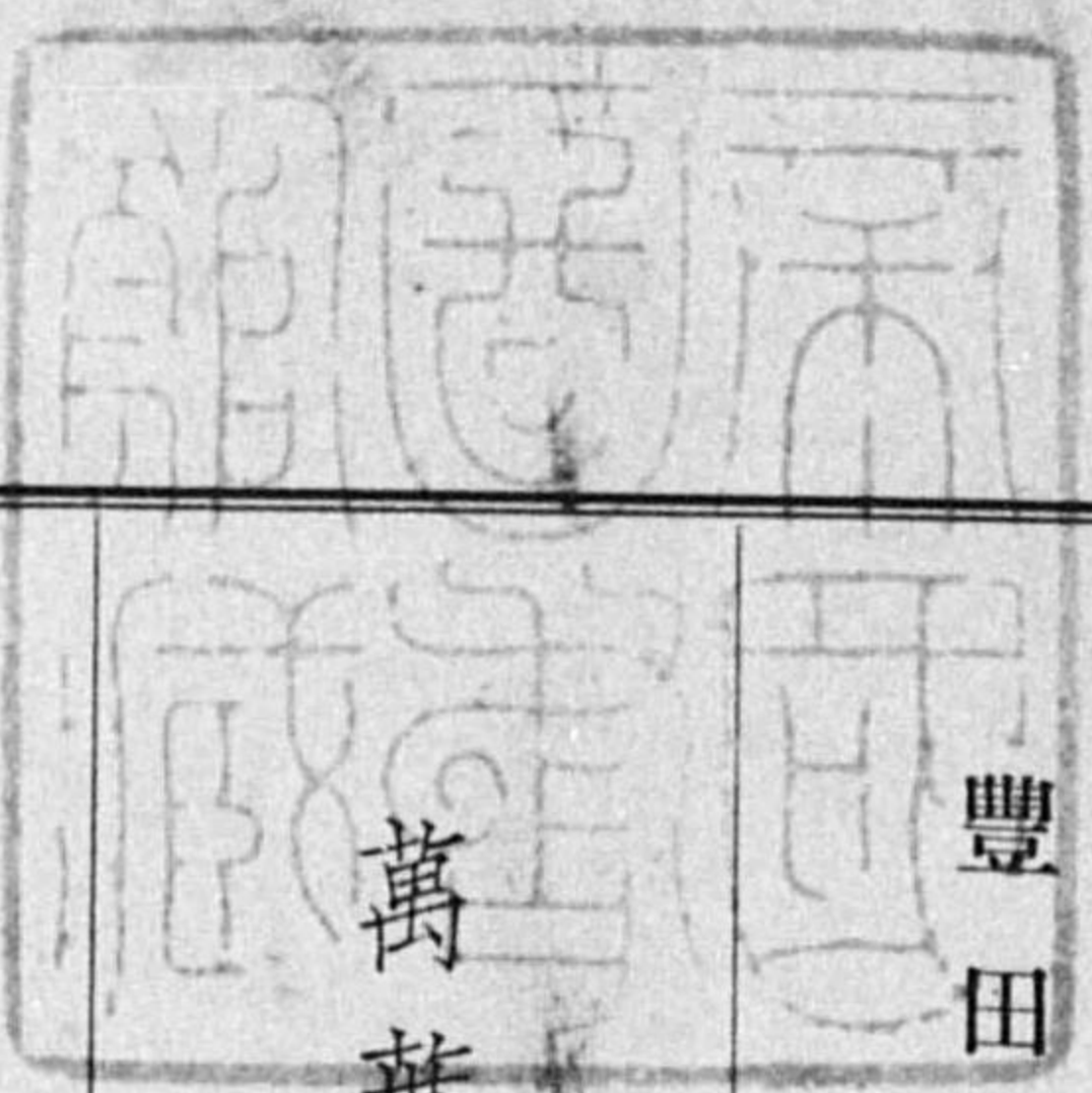


始





911.12  
To 83



豊田 八十代 著

萬葉集東歌の研究

東京 育英書院 發行





~~724~~  
~~42~~

はしがき

萬葉集は眞實味の多い歌集であるが、その中に於て、殊に眞實味に富み、情趣の深いのは十四の卷の東歌である。然るに、この卷には方言訛語を含むことが多く、古來難解とされてゐた點が少くなかつたのである。著者は夙にこれが研究に志し、廣く實地を踏査して、地理を明にし、旁ら専門の諸大家について、動植物名を究め、更に土人について、方言を調査するとともに、東歌に關する文獻を涉獵して、ひたすらこれが検討につとめた結果聊か得るところがあるやうに覺えるので、これを世に公にし、大方各位の御批判を仰ぐことゝしたのである。若し萬葉集闡明の一助ともならば、著者の本懐である。發行に際し、保科孝一内田清之助中西悟堂牧野富太郎の諸氏の御援助を得たことが多いので、こゝに深甚の謝意を表す。

昭和十一年十月

東京青山の草廬に於て

著者しるす



目次

概説・・・・・・・・・・・・・・・・一  
東歌

上總國の雜歌一首	一
下總國の雜歌一首	二
常陸國の雜歌二首	三
○信濃國の雜歌一首	○五
遠江國の相聞往來の歌二首	六
駿河國の相聞往來の歌五首	八
伊豆國の相聞往來の歌一首	一四
相模國の相聞往來の歌十二首	一五



武藏國の相聞往來の歌九首	元
上總國の相聞往來の歌二首	六
下總國の相聞往來の歌四首	四〇
常陸國の相聞往來の歌十首	四
信濃國の相聞往來の歌四首	三
上野國の相聞往來の歌二十二首	六
下野國の相聞往來の歌二首	六
陸奥國の相聞往來の歌三首	九
遠江國の譬喩歌一首	八
駿河國の譬喩歌一首	三
相模國の譬喩歌三首	三
上野國の譬喩歌三首	七
陸奥國の譬喩歌一首	九

未勘國の雜歌十七首	九
未勘國の相聞往來の歌百十二首	一〇五
未勘國の防人の歌五首	一九二
未勘國の譬喩歌五首	一九五
未勘國の挽歌一首	一九九

附 錄

古今集に見えたる東歌	一〇一
------------	-----



圖版目次

三五一	筑波山の全景	五
三六一	足柄山の地図	六
三六二	足柄山	九
三七〇	にこぐさ	二六
三七六	うけら	三
三七八	いはゐづら	三
三八四	真間の井	四
三〇八	上野の地図	六
三〇九	榛名湖	查
三四五	こなぎ	六

三四七	莞	七
三四四	佐野の船橋	七
三四四	こなら	七
三四三	かつの木	五
三四六	山鳥	二六
三五〇	紫草	二四
三五二	ひるむしろ	二四
三五〇八	おきながさ	一四
三五七	味 <small>アチ</small> 龜 <small>カメ</small>	一七
三五三	ゆづるは	一六
三五七	山すげ	一〇〇



## 概 説

萬葉集卷十四には、東歌と題して二百三十首の短歌が載せられてをる。多くは東國庶民の手に成つたものと考へられる。

東歌には、國名の知られてゐるものと、知られてゐないものがある。前者は雑歌が五首、相聞歌が七十六首、譬喩歌が九首で、國別に排列せられ、後者は雑歌が十七首、相聞歌が百十二首、防人歌が五首、譬喩歌が五首、挽歌が一首である。

前者は更に之を國別にすれば、遠江三、駿河六、伊豆一、相模一五、武藏九、上總三、下總五、常陸一二、信濃五、上野二五、下野二、陸奥四で、排列の順序は、東海道は遠江より、東山道は信濃より東へ國順になつてゐる。

これを綜合すると、東歌二百三十首の中、雑歌が二十二首、相聞歌が百八十八首、譬喩歌が十四首、防人歌が五首、挽歌が一首となる。



更にこれを内容から考へると、東歌の大多数は戀愛歌で、その中男女の間によみかはされたものを相聞歌とし、物に寄せて心緒を述べたものを譬喩歌とし、その他を雜歌とし、更に防人歌と挽歌といふ部を立てたやうに思はれるが、この分類は正確ではない。防人歌は西海道の邊要の地を守る兵士の歌で、挽歌は哀傷の歌である。

此等の東歌の多くは、東國の民謡と見るべきもので、方言訛言を交へることが多く、野趣に富み、何等の技巧もなく、眞摯にして、素朴なる情緒の率直に表現せられて、東國人の生活を反映したものが多い。

東歌について特に注意すべきは、

- 一、序詞の多いこと
  - 二、地名の多くよみこまれてゐること
  - 三、類歌の多いこと
  - 四、勞働歌の多いこと
- である。

#### 其の一 序詞の多いこと

東歌二百三十首中、序詞を含むものが八十八首の多きに及んでゐる。これは民謡には眼前の景物に感興を發した現實的の歌の多いためである。例へば

駿河の海磯部に生ふる濱つぐら

汝をたのみ母にたがひぬ

相模路の淘綾の濱の眞砂なす

兒等は愛しく思はるゝかも

上毛野佐野の船橋とり放し

親はさくれど吾は放るがへ

春の野に草食む駒の口やます

吾を偲ぶらむ家の兒らはも

比多瀉の磯の若布の立ち亂え

吾をか待つなも昨夜も今夜も



愛し妹をいづち行かめと山菅の

背向に宿しく今し悔しも

の如き、いづれも眼前の景物を捕へ來つて、序詞としたものである。

この點は古代の支那の詩に比興の體の多いのに似てをる。詩經は賦比興の三つに分たれることは、人のよく知るところであるが興に屬するものは、いづれも眼前の景物を捉へたもので、

次の諸篇の如きがそれである。

關々タム 雉鳩ヘ。在リ河之洲ニ。窈窕タム淑女ヘ。君子好逑ナリ。

葛之覃兮ウチ。施ル于中谷ニ。維葉萋萋タリ。黃鳥于飛ニ。集ル于灌木ニ。其鳴喈々ト。

桃之夭々タム。灼々タム其華ノ。之子于歸ニ。宜シ其室家ニ。

瞻ル彼淇奥ニ。綠竹猗猗タリ。有ル匪君子ニ。如ク切ル如ク磋ル。如ク琢ル如ク磨ル。

瑟兮僖兮タリ。赫兮咺兮タリ。有ル匪君子ニ。終不レ可レ諼兮ニ。

其の二 地名の多くよみ込まれてゐること

東歌には、地名のよみ込まれてゐるのが非常に多い。これは、地方色を濃厚に發揮せんがためであつて、木曾節に、「木曾の中よりさん」といふ語があり、おけさ節に、「佐渡の相川」と歌つてゐると同じである。これを他の地方人の手に成るものゝやうに説いてをる人があるのは大なる誤であらう。即ち

なつそひく海上潟のおきつ洲に

船はとゞめむ小夜ふけにけり

は上總の民謡であり、

信濃なる千曲の川のさゞれいしも

君しふみてば玉とひろはむ

は信濃の民謡であり、

常陸なる浪逆ナサカの海の玉藻こそ

引けば絶えずれ何どか絶えせむ

は常陸の民謡である。



東歌には又東國にない地名のよみこまれてゐるものがある。次の三首の如きはそれである。

對馬の嶺は下雲シタクモあらなふ上の嶺に

たなびく雲を見つゝ偲ばも

飛鳥川シタ下濁れるを知らずして

背セなと二人さ宿ネて悔しも

飛鳥川塞セくと知りせば數多夜も

率ホ寝ネて來ましを塞くと知りせば

即ち前の一首は防人の歌であり、後の二首は大和地方の民謡が東國に傳誦せられたものと思はれる。

### 其の三 類歌の多いこと

東歌には非常に類歌が多い。それは民謡の性質として傳誦せられる間に、さまざまに歌ひかへられたものと見える。

例へば、武藏歌で、

3378 入間路イルマヂの大家オホヤが原のいはむづら

引かばぬるゝ吾アにな絶えそね

とあるのが、上野歌では

3416 上毛野のかほやが沼のいはむづら

引かばぬれつゝ吾アをな絶えそね

となり、安房歌では

安房をろのをろ田タに生ナはるたはみづら

引かばぬるゝ吾アに言な絶え

3357 となつてをる類であるが、次に擧げる二組の歌どもも皆それである。

霞カゐる富士の山ヤマびにわが來なば

何ナニ方向コウ向マきてか妹イモが嘆ナかむ

うゑ竹ウエのもととさへとよみ出デでていなば



いづち向きてか妹が歎かむ

足柄の土肥トビの河内に出づる湯の

世にもたよらにころが言はなくに

筑波嶺のいはもとどろにおつる水

世にもたゆらにわが思はなくに

それは、現代の民謡の

岐阜はよいとこ金華山の麓

小田の蛙を寝ちよつて聞いちよつた

といふ岐阜の民謡が土佐では

土佐はよいとこ、南をうけて薩摩嵐がそよくと

と歌ひかへられ、

わたしや太島御神火育ち胸に煙の

絶えやせぬ

といふ大島節が、上總では

わたしや九十九里荒磯育ち波も荒いが氣も荒い

と歌ひかへられ、

磯で名所は大洗様よ

松が見えますほのくと

といふ磯節が、新潟では

新潟戀しや白山様の

松が見えますほのくと

と歌ひかへられてゐるのと一般である。

#### 其の四 労働歌の多いこと

東歌は又東國庶民の實生活を反映するところから、労働歌と見るべきものが多い。次の歌どもはいづれもそれである。



稻春<sup>イネツ</sup>けば戦<sup>カ</sup>る我が手を今宵<sup>コノヨ</sup>もか

殿<sup>ノ</sup>稚子<sup>ワカゴ</sup>が取りて嘆<sup>ナゲ</sup>かむ

麻苧<sup>アサヲ</sup>らを麻筒<sup>アサケ</sup>に多<sup>オホク</sup>に積<sup>ツ</sup>ますとも

明日<sup>アス</sup>來<sup>キ</sup>せさめやいさせ小床<sup>コトコ</sup>に

金門<sup>カント</sup>田<sup>ダ</sup>を新搔<sup>アラガ</sup>きまゆみ日が照<sup>ト</sup>れば

雨<sup>アメ</sup>を待<sup>マ</sup>とのす君<sup>キミ</sup>をと待<sup>マ</sup>とも

岡<sup>オカ</sup>によせ我が刈<sup>カ</sup>る草<sup>カサ</sup>の狭萎<sup>サネガヤ</sup>草<sup>カサ</sup>の

まこと柔<sup>オウヤ</sup>は寝<sup>ネ</sup>ろとへなかも

左奈都<sup>サナツラ</sup>良<sup>ラ</sup>の岡<sup>オカ</sup>に粟<sup>アヲ</sup>蒔<sup>マ</sup>きかなしきが

駒<sup>ウマ</sup>はたぐとも吾<sup>ワガ</sup>はそともはじ

上毛<sup>ウモ</sup>野<sup>ノ</sup>安蘇<sup>アソ</sup>の眞麻<sup>マソ</sup>屯搔<sup>ムラ</sup>き抱<sup>ア</sup>き

寝<sup>ネ</sup>れど飽<sup>アツ</sup>かぬを何<sup>ナニ</sup>どか吾<sup>ワガ</sup>がせむ

○

▽奈良朝は佛教の隆盛な時代で、人麿憶良旅人家持等の歌にはいづれも佛教思想の影響が多いのにもかゝらず、東歌には全くその影響を見ないのは注意すべきことである。思ふに當時の佛教は教養ある人士の間に限られ、廣く民衆の間には行はれず、従つて、生々を尊び、光明を愛する國民性の根柢を憾<sup>ウレ</sup>すに至らなかつたのであらう。

これに反し、東歌に多いのは、種々の俗信であつて、多くの占法が行はれてゐる。これは宇宙には偉大なる靈力のあるものとの信仰から來たものであらう。

### ○東歌に見えたる特殊なる語法

萬葉集卷十四に見える東歌は二百三十首であるが、外に卷二十に見える防人の歌に、長歌が一首、短歌が九十二首あり、いづれも關東語をもつて歌はれてゐるので、この防人歌をも、東歌の中に入れて考へることが出来る。

これ等の東歌には、特殊なる語法が見えるのであるが、殊に注意すべきは、「ず」といふ打消の助動詞である。



「ず」といふ打消の助動詞は、東歌では、「なふ」となつてゐるのが多く、この「なふ」は、次のやうに活用したやうに思はれる。

未	然	連	用	終	止	連	體	已	然
な	は	なに	又は	な	ふ	な	へ	な	へ

○連用形は、もと「なひ」であつたのが、「なに」に轉じ、更に「なな」に轉じたのではあるまいか

### イ、未然形の例

さ衣イロモの小筑波嶺コツクハの山の岬

忘ら來ワシばこそ汝ニを懸ケけなはめ

三三九

會津嶺エチヌの國クニをさ遠トホみ逢アはなはゞ

偲オモひにせもと紐ヒモ結ムスばさね

二四六

他妻ヒトツメと何ナニかそを云イはむ然シらばか

隣ナリの衣キヌを借カりて着キなはも

三四七

### ロ、連用形の例

何ナニぜといへか眞マコトに逢アはなくに眞日マコトヒ暮クれて

夜ヨなは來キなニに明アキラけぬ時トキ來キる

三四六

新田山嶺ニヒタには着キかなニ吾ワによそり

間マなる兒コらしあやに愛カミしも

三四八

白砌シラト掘ホふ小新田山コニヒタの守モる山の

末スエ枯カせなニ常葉トコハにもがも

三四三

惱オモしけ他妻ヒトツメかもよ漕ウぐ舟フネの

忘れは爲ナなニないや思オモひますに

三五七

わが門カドのかた山ヤマつばきまことなれ



わが手ふれななつちにおちもかも

四二八

わがせなを筑紫へやりてうつくしみ

おびは解かなあやにかもねも

四四三

○これ等の「なに」「なな」は、いづれも「ずして」の意であるから、連用形であることが、明であつて、「高き嶺に雲のつくのすわれさへに君につきなな高嶺と思ひて」<sup>三五四</sup>の「なな」とは、全く別である。

### ハ、終止形の例

伎波都久の岡の莖我摘めど

籠にも満たなふ夫と摘まさね

三四四

伊香保風夜中吹き下し思ひどろ

くまこそしつと忘れ爲なふも

三四九

對馬の嶺は下雲あらなふ上の嶺に

たなびく雲を見つゝ偲ばも

三五六

水久君野に鴨の匂ほ如す兒ろが上に

言おろはへて未だ宿なふも

三五五

武藏野の小岫が雉立ち別れ

往にし宵より夫ろに逢はなふよ

三七五

月日はやすぐはゆけどもあもししが

たまの姿は忘れせなふも

四三七

### ニ、連體形の例

晝解けば解けなへ紐の我が夫に

相依るとかも夜解けやすけ

三四八

等夜の野に兎ねらはりをさくも

寝なへ兒ゆるゑに母に嘖ばえ

三五九



眞久良我の計我の渡のから楫の

音高しもよ寝なへ見ゆゑに

三五五

遠しとふ故奈の白峰に逢ほ時

逢はのへ時も汝にこそよされ

三四七

の「解けなへ紐」は、「解けない紐」、「寝なへ見」は、「寝ない見」、「逢はなへ時」は、「逢はなへ時」である。

これ等の對照により、私は今の「ない」といふ關東の打消の助動詞は、東歌に見える打消の連體形なる「なへ」が轉じたものと考へる。それは丁度關西語の「ん」が、「ぬ」から來たと同じ關係であらう。

### ホ、已然形の例

まがなしみ寝れば言に出さねなへば

三四六

心の緒ろに乗りてかなしも

栲衾白山風の宿なへども子るが

三五〇

襲着のあるこそ善しも

眞小薦の節の間近くて逢はなへば

三五四

沖つ眞鴨の歎ぞわがする

韓衣欄のうち交ひあはなへば

三四八

ねなへの故に言痛かりつも

これ等の活用を明にしておくことは、東歌を解する上に大切なことである。

### ○東歌の蒐録者

東歌の蒐録者については、種々の説があるが、東歌の範圍が東海道八ヶ國東山道三ヶ國陸奥一ヶ國の廣きに及んでをるところから考へると、ある一地方の人の手によつて蒐録されたものとは思はれないのである。それでは、東歌の蒐録者は何人かといふに、

ヤミヅ



- 一、東歌によまれた地域が略、防人歌に一致してゐること、
- 二、東歌中には防人の歌と思はれものが、二十五六首の多きに及ぶこと（三四三、三四八〇、三五六等）

三、東歌中に防人歌の部類のあること

四、東歌には上野相模武蔵附近の歌の多いこと等

から考へると、和歌の蒐集に熱心なる大伴家持が天平勝寶七歳に防人歌を集録して、東國の民衆歌に非常なる興味を覚え、十九年の後相模守となつて、自ら東國に下るに及び、防人に關係のある人々に囑して、蒐集したと見るのが、合理的ではあるまいか。

この推定に確實性を加へるものは用字法である。即ち十四の巻の歌の、一字一音式であることが、家持の集録と推定される十七、十八、十九、二十の巻々と一致してゐるのは、同一人の蒐録に成るがためではあるまいか。

### ○東歌の註釋書

東歌は古來難解と稱せられてをる。従つてこれが註釋書も多い。今その重なるものを次に列挙する。

萬葉集註釋	十冊	僧仙覺
萬葉拾穗抄	三十冊	北村季吟
萬葉代匠記	五十四冊	僧契沖
萬葉考	二十七冊	賀茂真淵
萬葉集略解	三十冊	橋千蔭
萬葉集古義	九十五冊	鹿持雅澄
萬葉集新考	八冊	井上通泰
萬葉集全釋	六冊	鴻巢盛鴻

以上は萬葉集全部を註釋せるもの

○ 萬葉集東語栞	一冊	田中道麿
○ 萬葉集遠江歌考	一冊	賀茂真淵



上野歌解	二冊	橋本直香
東歌と防人歌	一冊	松岡靜雄
萬葉集東歌評釋	一冊	中村烏堂
東歌防人歌への一考察	一冊	藤森朋夫

以上は主として東歌を註釋せるもの

# 東歌



この二字は、舊本にはないが、古義の説に従つて補ふことにした。

奈都素妣久 宇奈加美我多能 於伎都渚爾 布禰波等杼米牟  
 佐欲布氣爾家里

【語釋】○奈都素妣久 海上ウチカミの枕詞。夏日麻ツ即ちあさを根から引き抜いて收穫する海上とかけたものと見える。昔はこの附近に多く麻を栽培したのであらう○海上ウチカミ瀉は上總國市原郡菟上ウチカミの海灣を指す。こゝは一帯の遠淺である。



【口譯】自分は遠く海の上に出て 今やうやくこゝに歸つて來たのである。家に残しておいた妻や子はさぞ自分の歸りを待ちわびてをるであらうが、生憎汐がひいてゐる上に、夜がふけてしまつたから、今夜はこの海上瀉の沖合の渚に舟をとめて寝ることにしよう。

【後記】調の高いよい歌で、夜泊の光景が目前に浮ぶ。遠くから歸つて來た漁夫の作であらう。卷七に「なつそひく海上瀉のおきつ洲に鳥はすだけど、君は音もせず」といふのがあつたが、それは反對に夫の歸りを待ちわびる漁夫の妻の歌である。

右の一首は上總國の歌

三四九

可豆思加乃 麻萬能宇良末乎 許具布禰能 布奈妣等佐和久  
奈美多都良思母

【語釋】○加豆思加は今の下總國東葛郡、眞間は眞間川の岸で、國府臺高地の岬崖に當つてをる。眞間は岬崖を意味する語である○宇良末は浦の彎曲したところ。宇良末は宇良末の誤であらう。

【口譯】今日は遠くから舟人等のかけ聲がにぎやかに聞えて來る。あれは葛飾の眞間の入江をさして歸る人々の聲にちがひない。急に風が出て、浪がたつので、それを押し切らうとしてをるのであらう。どうぞ夫がはやく無事に歸つて見えればよいが。

【後記】夫の歸りを待つ漁夫の妻の歌であらう。海上から聞えて來るかけ聲に耳をそばだてゝゐる女の心もちが知られる。この歌は卷七に「風早の三穗の浦みをこぐ舟のふな人さわぐ浪たつらしも」とあるのに似てをる。どちらかゞ傳誦の際に改作されたものであらう。

右の一首は下總國の歌

三五〇

筑波禰乃 爾比具波麻欲能 伎奴波安禮杼 伎美我美家思志  
安夜爾伎保思母

或本歌曰 多良知禰能 又曰 安麻多伎保思母



【語釋】筑波は誰も知る關東の名山であるが、この山の附近では昔から養蠶が盛に行はれたものと見えて、今も多く桑を栽培してをる。

【口譯】わたしもあの筑波山の麓に出来た新しい桑で飼つた繭から取つた美しい着物はもつてをりますが、それよりもあなたの御めしものゝやうなのが、むしやうに着て見たく思はれます。

【後記】これは京から下つて来てをる官人などの衣服の美しいのを見て、土人のよんだのであらうと、本居翁はいつてをる。この歌を戀心をよせたやうに説く人もあるが、舊説の方が穩である。

或本の歌に、たらちねのとあるのは、母からいたゞいたといふ意であらう。

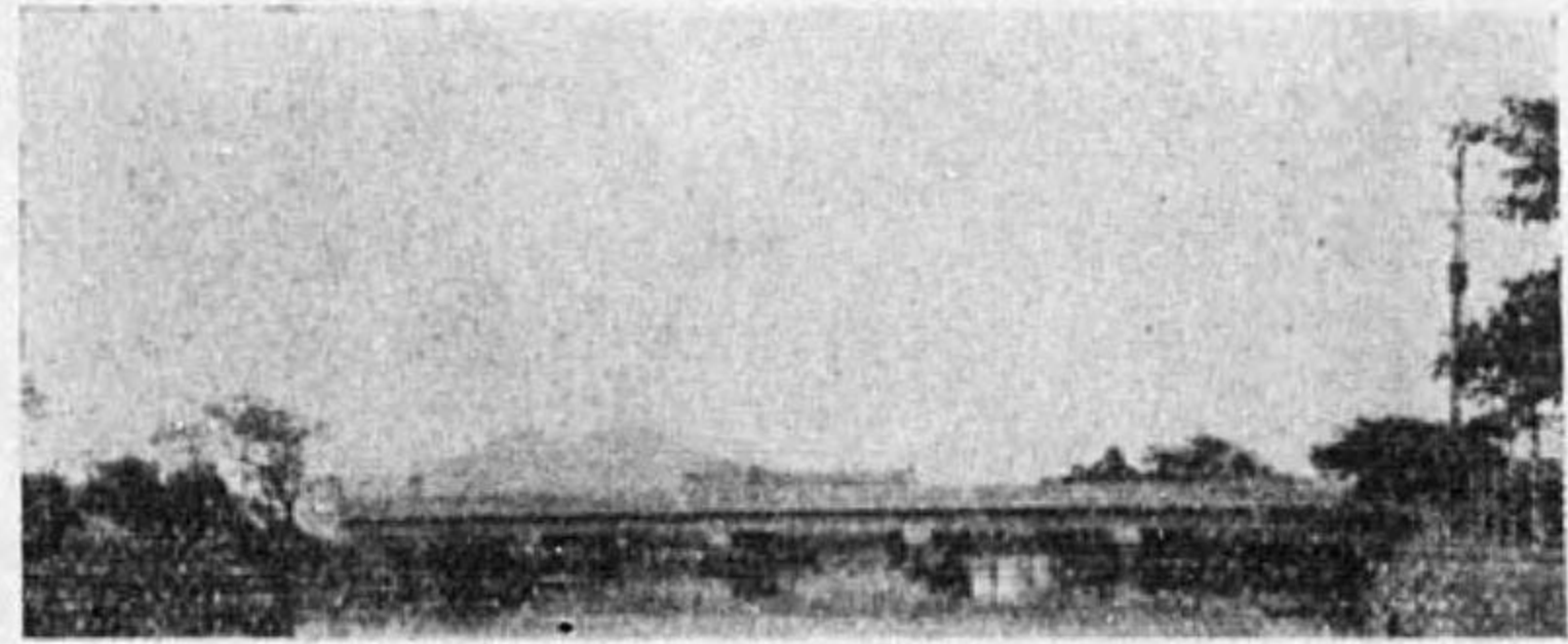
三五  
筑波彌爾 由伎可母布良留 伊奈乎可母 加奈思吉兒呂我  
爾努保佐流可母

【語釋】布良留はふれるの訛○爾努はぬのの訛○乎可母は然らむやの意。

【口譯】あの白く見えるのは、筑波山に雪が降つてゐるのであらうか。いやさうでないかも知れぬ。自分のいとしく思ふ娘が布を乾してゐるのであらうか。さても美しい景色であることよ。

【後記】筑波山に雪のふつてゐるのを遠望してよんだもので、かもといふ語を三つ重ねて、調子をはずませたところがおもしろい。卷十に「わがそのゝすもゝの花か庭にちる。はだれのいまだ残りたるかも」とあるのに似てをる。

右の二首は常陸國の歌



筑波山

三五  
信濃奈流 須我能安良能爾 保登等藝須 奈久許惠伎氣婆  
登伎須疑爾家里



【語釋】須賀は信濃國東筑摩郡に在り、梓川と檜井川との間に在る曠野で、上高地の東南方に當つてをる。昔は人家も少い寂しい野原であつたのであらう。

【口譯】この寂しい須賀の野にも夏がおとづれて来て、あのやうに時鳥が鳴く。それにわが夫は未だ歸つて來られない。約束の時は過ぎてしまつてをるのに待遠なことである。

【後記】任務を了へて歸る夫を、今日か明日かと待ちこがれてゐる折しも、杜鵑の聲を聞いて悒々たる女の心の中が察せられる。民謡として多くの人々の共鳴を得たものであらう。この信濃なるを他郷人の語とする人があるが、それは當らない。

右の一首は信濃國の歌

### 相聞

三五三 阿良多麻能 伎倍乃波也之爾 奈乎多氏天 由吉可都麻思自  
移乎佐伎太多尼

【語釋】阿良多麻は遠江の郡名、今の鹿玉の地であるが、この郡は今は廢せられ、その舊地域は引佐濱名磐田の三郡に分屬してゐる○伎倍は地名、柵戸、即ち城塞を守る民家の意で、今の貴平の地であらう○由吉可都麻思自は橋本進吉博士の説に従ひて、行きがましじと訓みえ行きやらじの意とする○いをは、新考の説に従つて、いざの誤と見たい。

【口譯】おまへはこの伎倍の林まで、わたしを送つて来て、まだ名殘惜しげにたゞずんでゐるが、おまへをこゝにたゞせておいては、後髪をひかれるやうな心ちがして、たつて行く氣になれないから、わたしより先に歸つてくれ、さあはやく。

【後記】本居翁は、これは男の旅立つ時妻の伎倍の林まで送り來ぬるに別るとて、男のよめるなりといつてをる。如何にもその通りであらう。伎倍は十一の卷璞のきべの竹垣云々とあるきべと同地である。

三五四 伎倍比等乃 萬太良夫須麻爾 和多佐波太 伊利奈麻之母乃  
伊毛我乎杼許爾



【語釋】萬太良夫須麻は斑衾即ちまだらの布でつくつた夜具○佐波太は多くの意。入りなましものは入りなましものをといふに同じ。上の三句は城柵人の斑布でつくつた夜具には綿がたくさんはいつてゐるといふので、入りといふ語にかゝる序である。特に城柵人といつたのは、この地方では綿のたくさんはいつた斑の衾が愛用されたものと思はれる。

【口譯】わたしは、あのふつくらと綿のはいつた夜具をのべた妻の床にはいつて、こゝろよく寝たいと思ふのに、これはまあ、どうしたことであらう。

【後記】これは何かさはることがあつて、妻と寝ることの出来ないのを歎いたのであらう。官能的の歌である。

右の二首は遠江國の歌

三五  
安麻乃波良 不自能之婆夜麻 己能久禮能 等伎由都利奈波  
阿波受可母安良牟

【語釋】天の原富士の柴山は大空にそびゆる富士の柴山の意、柴山は小さい木のしげつた山のこと○己能久禮は木のまの小暗いこと○由都利はうつりの轉である。

【口譯】今は富士の麓の木々の茂り合ふ季節で、人目をしので女と會ふに都合のよい時である。それで久しくこゝに待つてをるのに、まだ戀人は來ない。どうしたのであらうか。こんな時刻がうつては今日は會はれないかも知れん。

【後記】これは約束をした戀人を木の下で待ちわびてよんだ男の作であらう。天の原富士の柴山と大きく歌ひ出したところもおもしろく、逢はずかもあらむと八字句を用ひて、どつしりと言ひすゑたところもよい。時うつるは、この季節をはずしてはといふのではあるまい。

三五  
不盡能禰乃 伊夜等保奈我伎 夜麻治乎毛 伊母我理登倍婆  
氣爾餘婆受吉奴

【語釋】伊夜等保我奈伎山路とは、富士の裾野の非常に遠いのをいふ○によぶは呻くこと○け



は接頭語である。

【口譯】富士の裾野は行けども／＼行きつくし難く、いつも苦しさにうめくのであるが、今日  
はわが妻の處へ行くのだと思ふと、心もかろく全く苦しさを忘れて來てしまった。

【後記】かういふ想は後の民謡にも見え、「思うて通へば千里が一里、逢はず歸ればまた千里」  
などといふ類であるが、げによばずの一語が如何にも實感的である。

三五七

可須美爲流 布時能夜麻備爾 和我伎奈婆 伊豆知武吉氏加  
伊毛我奈氣可牟

【語釋】可須美爲流は霞のたちこめること○山傍は山邊に同じ。

【口譯】自分の後を見送つて、妻が門べに立つてゐるが、わが家は次第／＼に遠ざかつてゆく。  
もし自分があの霞の立ちこめてゐる富士の山べに來て見えないやうになり、方角がわからな  
いやうになつたら、妻はどちらを向いて歎くであらうか。

【後記】遠く旅立ちゆく男の歌で、ふりかへり／＼家の方をながめつゝ行く男の心もちが、如  
實に表現せられてゐる。この巻に「うゑ竹のもどさへとよみいでていなば、いづち向きてか  
妹が歎かむ」といふ歌があるが、上の句は全くこの歌と同じである。

三五八

佐奴良久波 多麻乃緒婆可里 古布良久波 布自能多可禰乃  
奈流佐波能其登

【語釋】さ寝のさは接頭語○多麻乃緒即ち玉の緒といふ語は長い譬にも用ひ、短い譬にも用ひ  
るが、こゝは短い方である○奈流佐波は甲斐國都留郡に在る。富士山西北の大壑の名で、劍  
が峯の西に當り、今大澤と呼んでゐる。常に沙石の轉び下る聲が雷のやうであるといふの  
で、この名がある。佐波とは、沼澤などの澤の意ではなく、壑のことである。

【口譯】あの鳴澤は絶えず鳴りひびいてゐるが、あの人と會ふのはほんの僅のまでである。にも  
かゝはらず、あの人に想を懸け、明けても暮れても、戀ひこがれて、ことごとしく、胸をを



どらせてゐるのは、あの鳴澤のやうである。

【後記】この歌は夜がれがちなる男の心を疑ひつゝよんだものと見える。卷七に「潮満てば入りぬる磯の草なれや見らく少く戀ふらくの多き」とあるのと同様の歌である。

或本歌曰 麻可奈思美 奴良久波思家良久 佐奈良久波 伊豆能多可禰能 奈流左波奈須與

【語釋】思家良久は古義の説の如く、しまらくの誤、佐奈良久は噂に立てられることをいふのであらう○伊豆の高嶺は日金山（海拔二千六百尺）のことで、この山脈の中腹にあたる伊豆山神社の東方に、今も鳴澤といふところがある。

一本歌曰 阿徹良久波 多麻能乎思家也 古布良久波 布自乃多可禰爾 布流由伎奈須毛

【語釋】しけや、眞淵は思家は次也及也、玉のをの如くといふに同じといつてをる○降る雪な

すよは、降る雪の如く、常止まず戀しく思ふぞとの意であらう。

三五九

駿河能字美 於思徹爾於布流 波麻都豆良 伊麻思乎多能美  
波播爾多我比奴 一云 於夜爾多我比奴

【語釋】於思徹は磯邊の訛○波麻都豆良は濱べに生ずる蔓草である。特に濱つゞらといつたのは、濱邊に生ずる蔓草は上層の沙をとほして、深く土中から養分を取るの、根が非常に長く容易に抜けないためで、絶えざる譬としたのである。直接経験から來たものと思はれる。

【口譯】あの磯のほとりに生えてをる蔓草の根は長く絶えないものであるが、あなたの心も、この蔓草のやうにいつまでも絶えることはあるまいと頼みにしてゐたために到頭おつかさんの心に背いてしまった。おかつさんに對してまことにすまないことである。

【後記】駿河の海邊に住む女の歌であらう。母にたがひぬといふ一語に、しほらしい女の心もちが見える。



右の五首は駿河國の歌

三六〇

伊豆乃宇美爾 多都思良奈美能 安里都追毛 都藝奈牟毛能  
乎 美太禮志米梅楊

【語釋】伊豆の海といふのは、どのあたりを指すのであらうか。自分の實地踏査するところによると、箱根山の舊街道から熱海あたりの海面を望んだところが殊におもしろい。彼の實朝が「箱根路をわがこえ來れば、伊豆の海や沖の小島に浪のよる見ゆ」と歌つたのもこのあたりで、沖の小島とは初島のことである○伊豆の海に立つ白波のはつきなむにかゝる序、在りつゝはがくながらへての意○續ぎなむは續ぎて逢はうとの意、亂れしめやは亂れそめめやの轉である。

【口譯】あの伊豆の海にたつ白波を見てゐると、あとから／＼とまき起つて來て、いつまでも絶えることがない。自分もあの波のやうにいつまでもながらへて、續ぎ／＼て會ひたいと思

ふのであるから、一時心にそはぬことがあつても、心をとりみだすやうなことは致しませま  
る。

【後記】海面にたち來る浪を見て、やゝともすると疑惑を生じやすい自らをばげまさうとする  
女の歌である。

或本歌曰 之良久毛能 多延都追母 都我牟等母信也 美太禮會米家武

【語釋】つがむともへや、繼がむと思へばこそその意

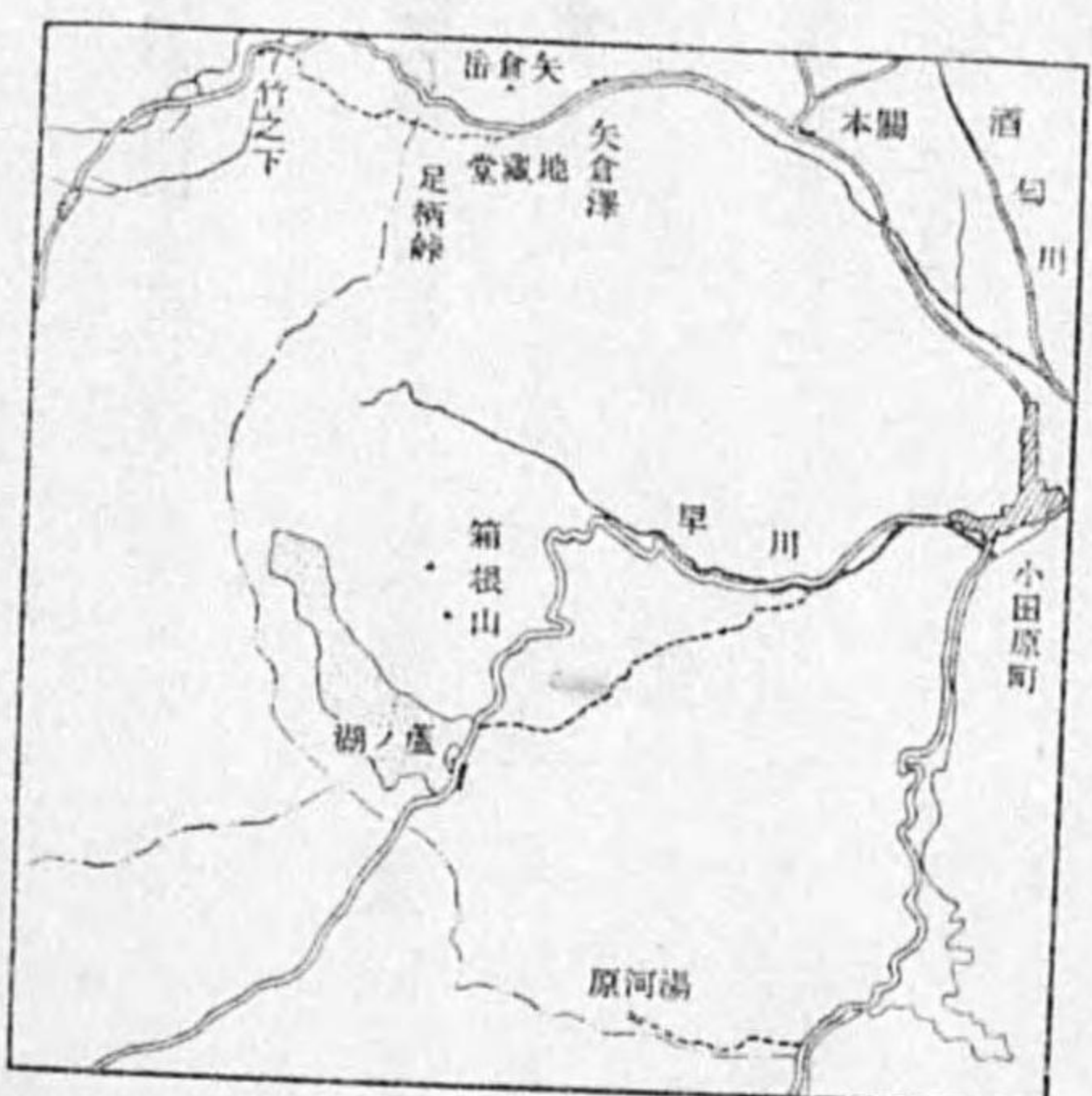
右の一首は伊豆國の歌



三六一

安思我良能 乎氏毛許乃母爾 佐須和奈乃 可奈流麻之豆美  
許呂安禮比毛等久





【語釋】乎氏毛許乃母は遠方此方で、あちらこちらの意○佐須和奈は小鳥などを捕るために張る罨即ち網のこと○可奈流麻は驚しく鳴ること、小鳥などが網に近く来て、さわぐのをいふ。麻は新考に意味のない助辭であらうとあるのに従ひたい○之豆美はしづまりの約である。

【口譯】足柄のあちらこちらに張つてある罨に近く来てさわぐ鳥の音もしづまり、夜も

ふけたから自分は下紐をといて女と共寝をする。

【後記】足柄山中に於ける深夜の情景のしはれる歌である。足柄山には今も小鳥が多く、いつも木のまに小鳥の聲がおもしろくひびいてゐるが、昔はこの小鳥を捕るためにあちらでもこちらでも、罨をはつたのであらう。罨といふのは、古事記の神武天皇の御製に、「宇陀の

高城にしぎわなはる」とあるわなと同じく、鳥網のことと思はれる。鳥が一つの谷から他の谷へ移るには交通路が大體きまつてゐるから、獵師は、そこに網を張つておいて捕獲するのが常である。

三三三  
相模禰乃 乎美禰見所久思 和須禮久流 伊毛我名欲妣氏  
吾乎禰之奈久奈

【語釋】相模峯は今の大山即ち雨降神社のある山であらうと本居翁はいつてをる。相模峯といつて、更に小峯といつたのは、筑波嶺の嶺ると同例である○見所久思は見過しの意○妹が名よびてはわが妻の名に通ふ語を口にする事、横井也有の旅の賦に「その下人を孫平とは我が伯母鐸の名なるものと、ふと故郷の戀しき折もあるべし」とあるに似てをる○奈久奈は、聲をたてゝ泣かしむる勿れといふに同じい。

【口譯】旅に出て、今ははや相模峯をも過ぎ、やう／＼家の戀しさを忘れようとしてをるの



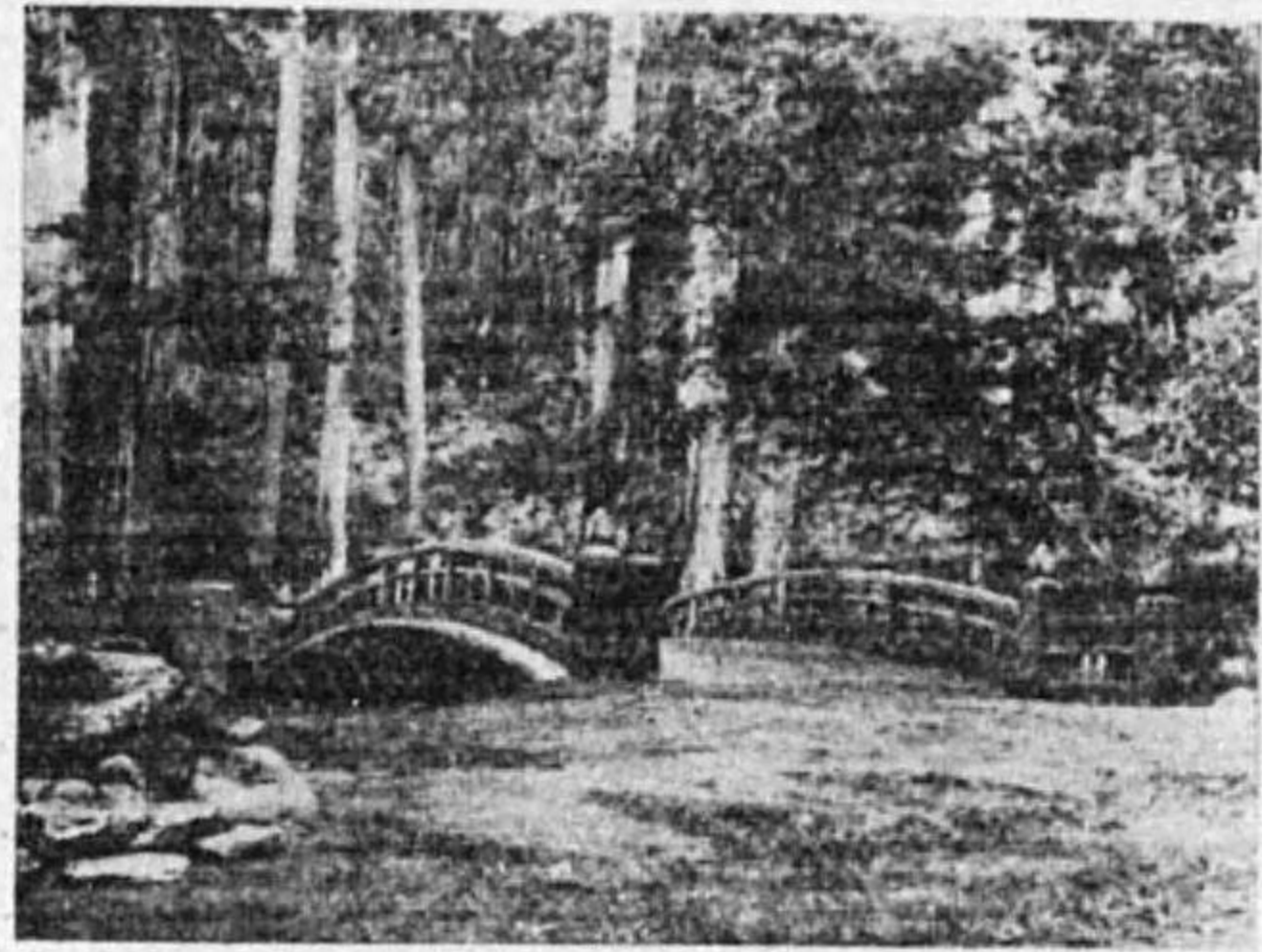
に、わが妻の名に通ふ語を口に出して、わが家のことを思ひ出して泣かせてくれるな。  
【後記】防人の歌ではあるまいか。

或本歌曰 武藏禰能 乎美禰見可久思 和須禮遊久 伎美我名可氣氏 安乎禰思奈久流

【語釋】武藏峯は秩父の連山である○奈久流は泣かすの約まり。

三六三  
和我世古乎 夜麻登徹夜利氏 麻都之太須 安思我良夜麻乃  
須疑乃木能末可

【語釋】足柄山は相模國足柄上郡に在り。杉の木が多く、最乗寺のあたりは今も鬱蒼たる杉林であるが、昔から杉が多かつたものと見える。麻都之太須は待ち立つの轉○木能末可は木のまにの誤であらうといふ新考の説に従ひたい。



足柄山の杉

【口譯】わが夫は誘惑の多い大和へいつてをられるが、もう歸つて來られさうなものだと、毎日く待ちこがれてをるのに、一向たよりが無い。それで、そつと家を出て、杉林まで來て、今日も木のまで待ちくらししてゐる。待ち遠なことであるよ。

【後記】一日千秋の思ひをして、夫の歸りを待ちわびる女の心もちが卒直に表現されてゐる。大和への一句に大なる不安のこもつてゐることはいふまでもなからう。

三六四  
安思我良能 波姑禰乃夜麻爾 安波麻吉氏 實登波奈禮留乎  
阿波奈久毛安夜思



【語釋】足柄の箱根の山といったのは、足柄はこの地方の總名であるからである○粟まきは逢はなくにかけたのであるが、歌序ではない。

【口譯】わが夫はこのまいた粟の實る頃までには歸つて來るといつて、遠く旅だつたのであるが、今ははや粟も熟し實になつてしまつたのに、まだ逢ふことの出來ないのは不思議である。

【後記】これも夫の歸りを待ちわびる女の歌で、あやしの一語に煩悶の情がよく現れ、粟まきてといつて、逢はなくもといつたところに聲調の美がある。箱根地方には今も粟を栽培するところの多いのは地味に適するものと見える。

この歌は前に擧げた「信濃なる須賀の荒野にほととぎす鳴く聲聞けば時過ぎにけり」とあるのに似、景によつて情を起した點は同一である。

或本歌末句云 波布久受能 比可波與利己禰 思多奈保那保爾

【語釋】下は心のこと。奈保那保爾はすなほにの意である。

三六五  
可麻久良乃 美胡之能佐吉能 伊波久叡乃 伎美我久由倍伎  
已許呂波母多自

【語釋】美湖之能崎は仙覺抄には「今の腰越をいひけるとなん申す。昔も石の弱くてくづれけるにや」とある。この腰越を今の小動の崎にあてる人もあり、稻村が崎にあてる人もあるが、鎌倉大觀には「長谷の東部を流るゝ稻瀬川の東に聳ゆる高き山を御輿が嶽とも見越が嶽とも御輿が崎ともいふ。」といつてをる○いはくえは岩崩である。此處の岩崩は名高かつたものと見えて相模風土記の逸文にも「鎌倉郡見越崎、毎に速浪あり。石を崩す。人名づけて伊曾布利といふ。」とみえてをる。いはくえのまでは、くゆべきといはむための序である。

【口譯】そなたはまだ私を疑つてゐられるやうであるが、私はそなたが後に悔ゆべきやうな心をもちませんから、安心をして、私をお恃みなさい。

【後記】疑念をすてない女に對する男の誓約の歌である。



麻可奈思美 佐禰爾和波由久 可麻久良能 美奈能瀬河泊爾  
思保美都奈武賀

【語釋】麻可奈思美は、かはゆさにといふに同じい。まは接頭語○美奈能瀬川は大佛の東を流れてをる川で、今もその川を稻瀬川とも水無瀬川ともいつてをる。美都奈武はみつらむの訛、らをなに訛るのは、東歌にその例が多い。

【口譯】かはゆさに堪へかね、早く女と寝ようと思つて出かけたのであるが、潮時はどうであらうか。美奈の瀬川に今頃は潮がさして来てはをるまいか。心がかりなことである。

【後記】水無瀬川を渡つて、女の家へ通ふ男が途中で詠んだのであらう。

母毛豆思麻 安之我良乎夫禰 安流吉於保美 目許曾可流良  
米 已許呂波毛倍杼

【語釋】安之我良乎夫禰 足柄山の杉は古來船材として賞用せられたのであるが、その杉でつくつたのが足柄小舟である。相模風土記には「足柄山はこの山の杉の木をとりて舟を造るに足の軽きこと他の材にて作れる舟に異なり。よりに足輕山と名づけたり云々。」と見えてをる。○母毛豆思麻は數多き島をいふ○上の二句はあるきおほみといはむための序である○目許曾可流良米は目こそ疎るらめで、男の打絶えて來ないのをいふ。

【口譯】あの人の心にはかはりはない。今も深くわたしを愛してゐて下さるにちがひない。それなのに、このやうに打絶えて見えないのは用事が多く、足柄小舟のやうにあちらこちらへと歩きまはつてをられるためであらう。氣のもめることである。

【後記】男の來ないのを思ひわづらひつゝ、強ひて心を慰めようとしてよんだものと見える。

阿之我利能 刀比能可布知爾 伊豆流湯能 余爾母多欲良爾  
故呂何伊波奈久爾



【語釋】阿之我利は足柄アシガラに同じい○刀比は今の湯河原の地、土肥村に屬する。藤木川の谿谷で、温泉が到る處に湧き、湯の量が豊富である。昔はこの川を土肥川といったものと見える○河内は谿谷の内のこと○よにもは、ひどくといふほどの意○多欲良は、ゆたくと漂うて、どちらにもつかず、心の定まらないこと○湯のまでは、たよらにといはむための序で、温泉の満ち溢へて寛ユタかにたつぷりとしてゐる意にいひかけたのである。

【口譯】あの娘はたしかに自分と言ひかしたのである。心のゆたくとして定まらないやうには言はなかつたのに、自分は今更何を疑つて、かくさま／＼に物思をするのであらうか。

【後記】湯の量の豊富な刀比の温泉に浴しつ、女の心に疑をもつ男の詠んだのであらう。たよらにといふ語のつかひさまは、常陸歌に「筑波嶺のいはもとゞろにおつる水世にもたゆらにわが思はなくに」とあると同じである。

三六  
阿之我利乃 麻萬能古須氣乃 須我麻久良 安是加麻可奈武  
許呂勢多麻久良

【語釋】麻萬は地名と見たい。足柄の北に接し、酒匂川の右岸に壙下ウツタといふ地がある。元來まは斷崖のことであるから、斷崖の下といふ意であらう○あぜかは何故ナゼといふに同じい○菅枕は今も世間に多く用ひられてをるが、この時代にはこの枕が普通であつたものと見える。

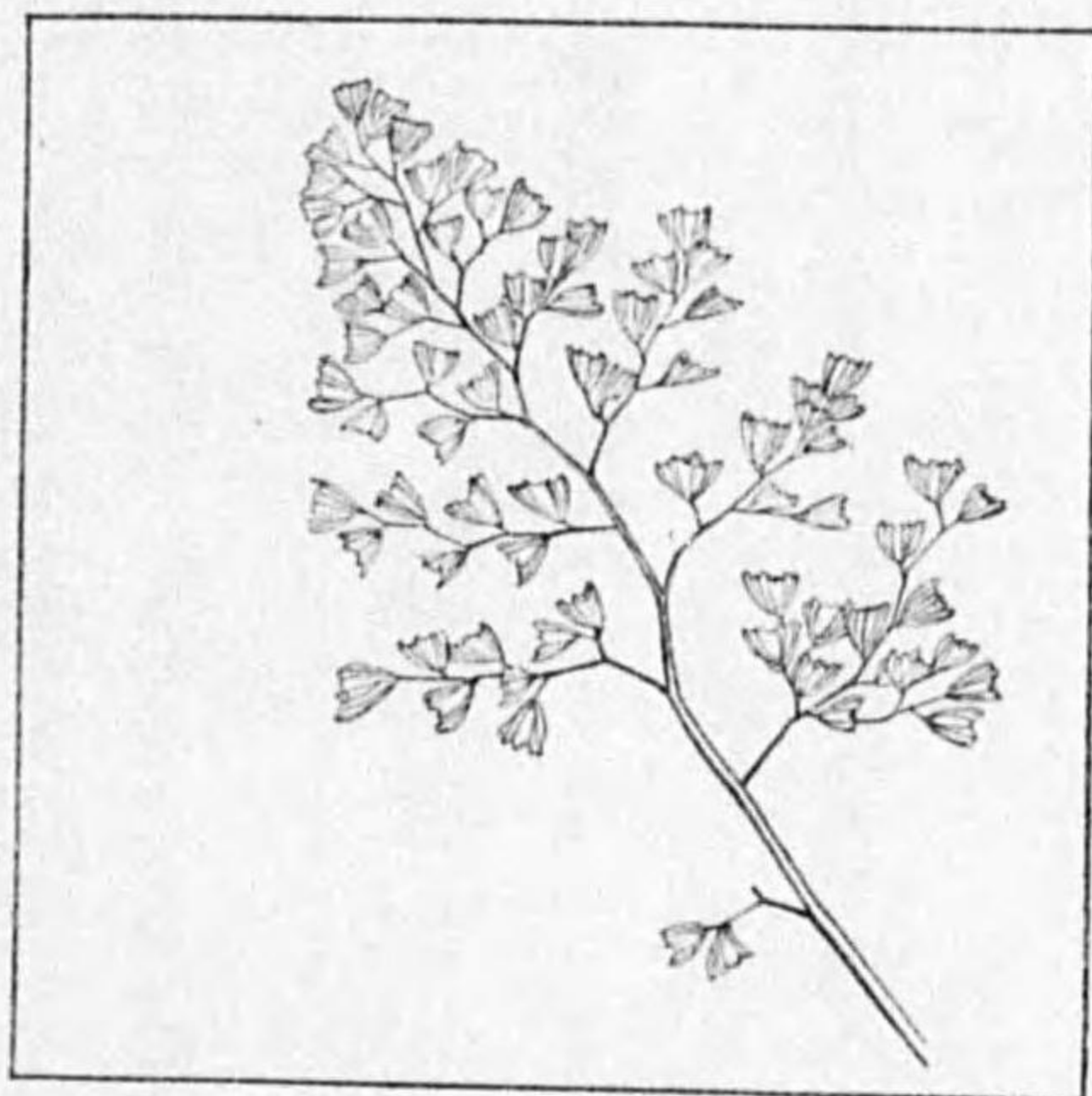
【口譯】こゝにあの麻萬から取つて來た菅でこしらへた枕もあるが、それよりはこのわたしの手を枕にして、一緒に寝ませうよ。

【後記】露骨に眞情を吐露したところがおもしろい。野趣にみちた、男の歌である。

三七  
安思我里乃 波故禰能禰呂乃 爾古具佐能 波奈都麻奈禮也  
比母登可受禰牟

【語釋】ねろのろは添辭○爾古具佐は、はこねだともいふ。しのぶに似て小さく、葉が細く莖に紫色の光があり、莖が堅い。山地殊にけはしい崖に多い羊齒シダで、四時凋むことなく、春時の新葉は紅色を帯びて、頗る雅趣に富み、今も箱根山中に多く野生してをる。かはいらし





草 此 に

いやさしい草であるから、花といはむための序としたのであらう○奈禮也は、なればにやの意。

【口譯】なぜそなたは、さう恥しがるのであるか。花嫁でもないのに、いつまでもさう改まるに及ばんではないか。はやく下紐を解いて寝ませうよ。

【後記】古義に「此の歌ははやく婚ひたる女のなほ恥しがりて、紐解きがてにする時男のよめるなるべし。」といつてをるが、いかにも適切な解釋である。

三七  
安思我良乃 美佐可加思古美 久毛利欲能 阿我志多婆倍乎  
許知氏都流可毛

【語釋】足柄の御坂は足柄峠で、矢倉驛から、竹の下に達する坂路である。可思古美は嶮しさにといふに同じ○久毛利欲能は、したばへの枕詞。志多婆倍は、下延シタベの意で、心の中にかくしてゐる感情をいふ○許知氏は言いでコトの略。

【口譯】これまでは、妻のことを心のうちに思ひつゝも、口には出さなかつたのであるが、足柄の坂路のあまりの嶮しさに妻と一緒にならばなどと考へ、覺えずわが妻のことを口に出してしまつたわい。

【後記】これは實感をそのままに表現したもので、十五の卷に、「かしこみと告らずありしをみ越路のたむけに立ちて妹が名のりつ」とあるのに似た歌である。新考に「倭建命が阿豆麻波夜と嘆きたまひし事も聯想せらる。」とあるのもおもしろい。

三七  
相模治乃 余呂伎能波麻乃 麻奈胡奈須 兒良波可奈之久  
於毛波流留可毛



【語釋】余呂伎は相模國中郡に在り。今の國府村にあたり、大磯附近である。この一帯の海岸の松青く沙白く、風光の明媚なることは人のよく知るところであるが、特に余呂伎の濱をとり出したのは、この地は沙の美しさが殊に人目をひくからであらう。○麻奈胡奈須は眞砂の如くの意で、可憐な女を美しい眞砂にたとへたのである。

【口譯】この余呂伎の濱の眞砂はいかにも美しいが、この砂の美しいのを見るにつけ、家に残して来た眞砂のやうに美しい妻がかはゆらしく思はれる。

【後記】これは余呂伎の濱を歩みつゝ行く男のよんだものであらう。  
右の十二首は相模國の歌

三七三  
多麻河泊爾 左良須氏豆久利 佐良左良爾 奈仁曾許能兒乃  
已許太可奈之伎

【語釋】多摩川は武藏國に在り、西多摩郡に發源し、東京市の西を流れ、羽田の南に至り、海

に注いでをる。日本六玉川の一で、其の水極めて清く、鮎獵を以て名高い。武藏風土記に「里人作調布納内藏寮」とある通り、昔はこの沿岸で多く布を作り、河水に晒して、官に納めたのである。○氏豆久利は手織の布である。○上の三句はさら／＼といはむための序。○佐良左良爾は新／＼の意で、手づくりの布を水に晒せば晒すほど美しさを加へることく、なじみを重ねれば重ねるほど、女のかはゆさの増すことをいつたのである。○已許太は、ひどくとかむしやうにとかいふ程の意。

【口譯】自分はどうしてまあ、このやうに新／＼限りなく、この娘がむしやうにかはいのであらうか。

【後記】これは次第に高まりゆく熱情を、手づくりの布によせて、卒直に、しかも力強く歌つたものである。上の三句の構造は卷一に「巨勢山のつらく椿つらくに見つゝ思ふな巨勢の春野を」とあるのに似てをる。

三三四  
武藏野爾 宇良徹可多也伎 麻左氏爾毛 乃良奴伎美我名



宇良爾低爾家里

【語釋】宇良徹は占、可多也伎は肩灼で、武藏野の鹿の肩骨を焼いて占ふ太占である。武藏野にさういふ占をするものがあつたと見える。和名抄に豊島郡占方郷とあるのはそれに關係があるのではあるまいか○麻左氏爾毛乃良奴は、確に言はないの意。

【口譯】これまでは、あなたの名を堅くく隠しておいたのに、わたしの親が武藏野の鹿の肩を取つて灼いて、占をしましたので隠しておいたあなたの名が、到頭卜兆に現れてしまひました。すまぬことであります。

【後記】新考に「この歌は女の作にて、其女に男ありて、子孕みなどせるより、親が男の名を責め問へど、白状せざれば、武藏野なる卜師の許に率てゆきて占はせしに、男の名の卜兆にあらはれし趣なり」とあるのは、おもしろい解釋である。

三七五 武藏野乃 乎具奇我吉藝志 多知和可禮 伊爾之與比欲利

世呂爾安波奈布與

【語釋】乎具奇は小岫、小は接頭語、岫は洞のこと、上の三句は立ち別れといはむための序である。雉は洞穴のあるところに棲むとは限らないが、これは所謂純然たる寫生の歌で、女の家から男の歸つてゆく野路にある洞穴のあたりから、あわたゞしく雉の飛び立つたその夜の光景を思ひおこしてよんだのであらう○安波奈布は、逢はぬといふと同意の東國語で、このなふといふ語は、なは・なな・なふ・なへ・なへと活用してをる。

【口譯】わが戀人はあの宵にあわたゞしく立つて往つたきり、一向に顔を見せないが一體どうしたのであらうか。

【後記】これは、久しくおとづれない男の心を疑つて、思ひわづらふ女の歌と思はれる。

三七六 古非思家波 素氏毛布良武乎 牟射志野乃 宇家良我波奈乃  
伊呂爾豆奈由米





草らけう

【語釋】ウケラ 尤は山野に自生する多年生草本で、今も東京近郊の森かげなどに多く野生してをる。莖の高さが一二尺、秋になると、白みを帯びた頭状花を開くのであるが、その色が夢に似て一向に目だたないので、萬葉人は色に出ないめづらしい花として詠んだのである。尤の花の色に出づまにかゝるのではなく色にいづなゆめまにかゝつてゐるのである。古非思家波は戀しからばの意。

【口譯】そなたが私を戀しく思ふならば、袖をふつて慰めましょう程に、あのうけらが花の色に出ないやうに顔色に出して、人に知られないやうになさい。

【後記】東歌にはこの外に尤をよんだのが三首ある。いづれも色に出ない花としてよんだものであることは、「あがせこをあどかもしはむ牟射志野の宇氣良が花の時なきものを」とある

によつても明である。それで、仙覺の萬葉抄にもこひしけば云々の歌を釋して、「うけらが花は心よくもひらけずしてはつるものなれば色にいづなゆめとよそふるなり。」といつてをる。然るに近頃續出する萬葉の註釋書の中には略解や古義の誤を踏襲して、「武藏野にはいろに出る赤い尤があつて、それをよんだのであらう」などといつてをるものゝあるのは誤である。牧野富太郎氏の話によると武藏野にも稀には赤い尤があるが、色に出るといふやうな顯著な花ではないといふことである。

或本歌曰 伊可爾思氏 古非波可伊毛爾 武藏野乃 宇家良我波奈乃 伊呂爾低受安良牟

【口譯】どういふ風にして、戀をしたならば、武藏野のうけらが花のやうに顔色に出ないでをるであらうか。

【後記】或本の歌とあるけれども、全く別の歌であらう。

三七 武藏野乃 久佐波母呂武吉 可毛可久母 伎美我麻爾末爾



吾者余利爾思乎

【語釋】武藏野といへば、利根川以南秩父以東、相模野に連る茫々たる平野を聯想せしめるが、昔はこのあたりは一帶の草原であつたのである。作者はこの草原が風のまに／＼あちらへ靡き、こちらへ靡きする光景を見て、草は諸向と歌ひ出したのであらう。諸向はあちらへもこちらへも依り向ふことである。

【口譯】私はある武藏野の草の如く、あなたの心のまゝに、身を委せて依りなびいてゐるのに、貴方はなぜこのやうに私を疑はれるのでありませうか、

【後記】これはうち解け難い男を恨んだ女の歌であらう。

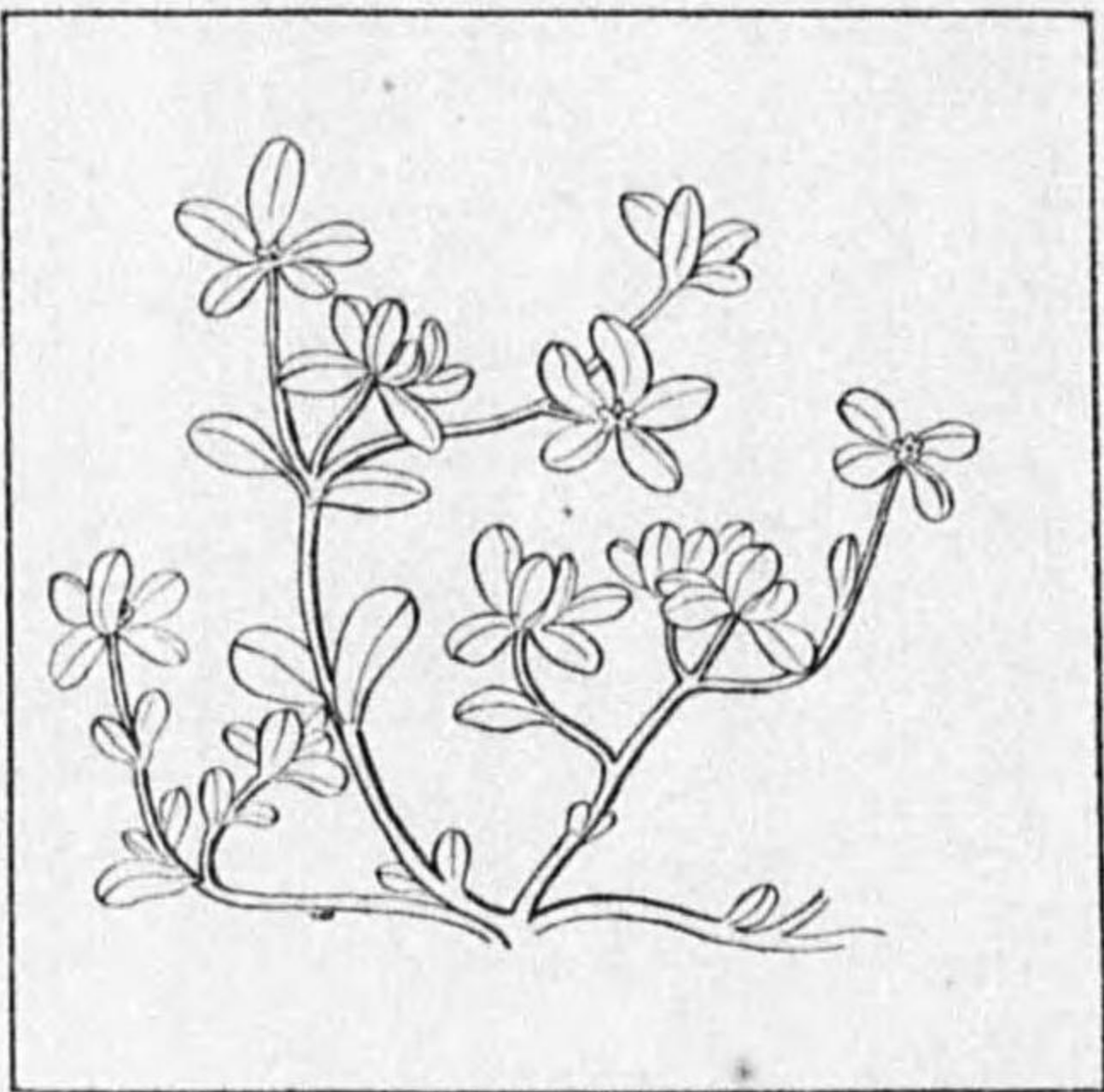
三六  
伊利麻治能 於保屋我波良能 伊波爲都良 比可婆奴流奴流  
和爾奈多要會禰

【語釋】入間は武藏の郡名、伊利麻治は入間郡に在る路の意。大家が原は今の<sup>オホヤ</sup>大井村の地である。○いはむづらは馬齒莧のことだといふこと



である。小野蘭山の本草綱目啓蒙に馬齒莧の伯州方言にいはむづらといふのが見えてをる。○奴流奴流はやはらかに靡きよる貌。

【口譯】あの入間郡の道にある大家が原に多く野生してゐるいはむづらの引くに従つてより来るやうに、私が引くならば、あなたもすなほに私により靡いて、中の絶えないやうになさい。



いはむづら

【後記】うぶな處女によみかけたものと見える。次の二首はこの歌の類歌であるが、地方により、いろ／＼に歌ひかへられたものと見える。

上野かほやが沼のいはむづら引かばぬれつゝ吾をな絶えそね。



安房をろのをろ田に生はるたはみづら引かばぬる／＼吾に言な絶え。

三九 和我世故乎 安抒可母伊波武 牟射志野乃 宇家良我波奈乃  
登吉奈伎母能乎

【語釋】安抒可母伊波武は何とかも言はむで、何とも言葉に言ひ表しやうがないの意○武藏野の朮が花のは、時なきまでにかゝる譬喩。時なきは、いつも色をかへないのをいふ。

【口譯】けふはなぜまあ此のやうにあの人が戀しいのであらうか。あの人の戀しさは何とも言葉に言ひ表しやうがない、あの朮が花のいつも色をかへないやうに、わたしの戀はいつもかはらないのに。

【後記】あどかも言はむの一語に、抑へ難い熱情が力強く表現されてゐる。

三八 佐吉多萬能 津爾乎流布禰乃 可是乎伊多美 都奈波多由登

毛 許登奈多延會禰

【語釋】佐吉多萬能津は埼玉郡の海邊の船つき場である。考古學者の説によると、石器時代には東京灣が遙か北方にのびて、今の杉戸幸手スギドサツテのあたりまで入りこんでゐたといふことであるが、萬葉時代にも今の南北埼玉郡のたりは大利根の下流をうけて、入海のやうになつてゐたのであらう。このあたりは昔から風が強く、船の綱のきれることが多かつたものと見える。風をいたみは、風がはげしいによつての意。

【口譯】この埼玉の津に碇泊してゐる舟の、風のはげしいために綱の絶えるやうに、われ／＼二人の中の絶えることがあつても、せめては音信だけなりとも絶えないやうにして下さい。

【後記】これは親兄弟などの中に二人の中をさかうとするもののある折ふし、遠く旅立つ男を船つき場まで送つて來た女のよんだのではあるまいか。

三六 奈都蘇妣久 宇都比乎左之氏 等夫登利乃 伊多良武等會與



阿我之多波倍思

【語釋】夏麻ナツマひくは宇奈比の枕詞○宇奈比は武藏國の地名であらう○飛ぶ鳥のまでは、到らむの序○下ばへは心のうちに思ふこと。

【口譯】わたくしは彼の宇奈比を指して飛ぶ鳥のやうにそなたのところへ行かうと心組んでゐたのに。

【後記】これは何かさはることがあつて、女のところへ申し送つた男の歌と思はれる。

右の九首は武藏國の歌

三三三  
宇麻具多能 禰呂能佐左葉能 都由思母能 奴禮氏和伎奈婆  
汝者故布婆曾母

【語釋】宇麻具多能禰呂は、上總國望陀郡（今市原郡に入る）駒形村東方の丘陵であらう。望

陀は古くは馬來田と記したのである○露霜のは露霜にの誤か○戀ふばぞもは戀ひるであらうぞの意であらう。

【口譯】あの馬來田の嶺の篠の葉の露も朝の寒さに霜になつてをる。その露霜にすそをぬらしつゝ越えて行かねばならぬが、わたしがそこを越えて来てしまつたならば、後に残つたそなたはわたしを戀ひこがれて、どんなに淋しく思ふであらうか。

【後記】旅に立たうとする男の歌と見える。

三三三  
宇麻具多能 禰呂爾可久里爲 可久太爾毛 久爾乃登保可婆  
奈我目保里勢牟

【語釋】登保可婆は、遠からばの約まり。

【口譯】自分はまだ遠くは來てゐない。やうやく馬來田の嶺のために、わが家が見えなくなつたばかりのことであるのに、このやうにこひしくては、これから遠く離れてしまつたならば、



どんなにそなたが、戀しいことであらう。

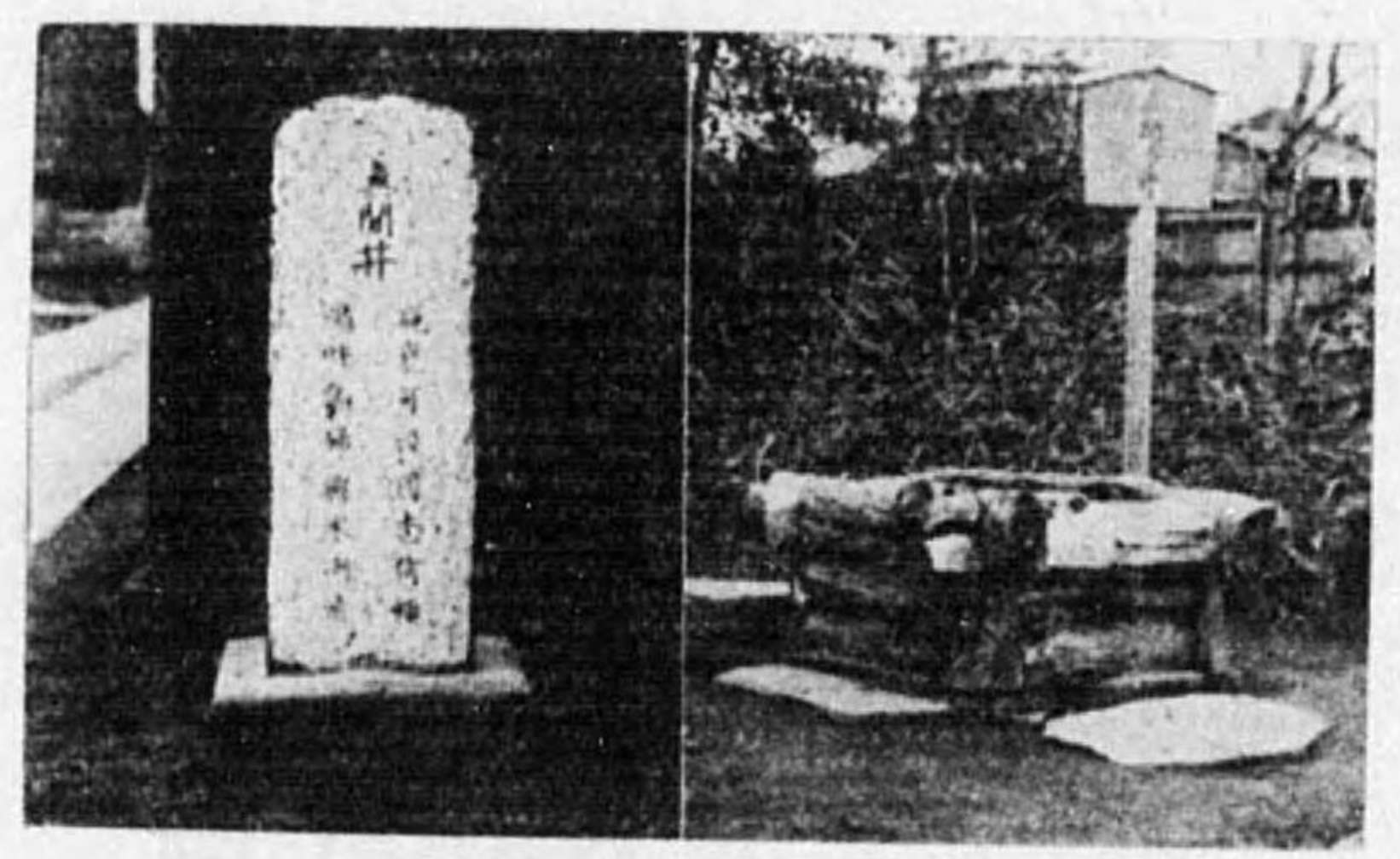
【後記】この歌は前の歌とともに旅の歌であるが、前のは妻に別れむとしてよんだもの、これは馬來田の嶺を越えてよんだものであらう。

古義に「歌の意は望多の一、嶺に隠れ居つゝかくてさへも、いと家戀しく思はるゝを、いよ／＼國を放りなば幾許か妹が目を見まく欲せむといふなるべし、第三第四の句の間へ言を添へて意得べし。聊かいひたらはぬやうなれど、右の意ならではきこえがたし。」といつてをるのは、穩當な解釋である。

右の二首は上總國の歌

三三四  
可都思加能 麻末能手兒奈乎 麻許登可聞 和禮爾余須等布  
麻末乃氏胡奈乎

【語釋】眞間は下總國東葛飾郡に在り、眞間川の岸で、國府臺の岬崖に當つてをる。手古名は



眞間の井

作である。

こゝに住まつてゐたといふ美人である。今千葉縣市川市弘法寺の南に手古奈堂といふのがあり、その傍の碑に赤人の短歌を刻んでをり、又その附近に手古奈の井といふのもある。

【口譯】まあ何といふうれしいことであらう。あの眞間の手古名をおれにとりもつてくれるといふが、ほんたうであらうか。あの眞間の手古名を。

【後記】このあたりに住む若い男の歌と見える。眞間の手古名をといふ語を二度くりかへしたところに強い喜がみえる。卷二にある「われはもよ安見兒得たり世の人の得がてにすといふ安見兒得たり」といふのと並べ見るべき



三五 可豆思賀能 麻萬能手兒奈家 安里之可婆 麻末乃於須比爾

奈美毛登杼呂爾

【語釋】於須比は磯邊の訛○奈美毛登杼呂爾は、波もとゞろくばかりにの意で、瀧もとゞろくに、宮もとゞろにといふに似てをる。眞間は今は海岸から餘程の距離があるが、上古はこのあたりまで波がうちよせてゐたものと見える。

【口譯】こゝに彼の有名な眞間の手古名がゐたので、この海岸に慕ひより來る人の船が多く、波もとゞろくばかりであつた。

【後記】多くの若い男子の心をひきつけた手古名のことを誇張して歌つたものであらう。

三六 爾保杼里能 可豆思加和世乎 爾倍須登毛 會能可奈之伎乎  
刀爾多氏米也母

【語釋】爾保杼里能は鷓鴣ニホトリので、葛飾の枕詞、鷓鴣は水を潜くものであるから、鷓鴣のかづくといふを、葛飾にかけたのである○葛飾は早稻の産地○饗すとは、袖中抄に「田舎に始て早稻を刈りて物して、里隣の者集りて食ふをば、にへすと云ふなり。」といつてをる○刀は外である。

【口譯】今日は新饗で、忌みつゝしむべき日であるが、たとひ門はとざしてゐても、あのいとしい御方がみえたならば、外に立たせておかれませうか。

【後記】強い熱情のこもつた女の歌である。眞淵が「鷓鴣のかつしか早稻のひしほり酌みつゝをれば月傾きぬ」と詠んでゐるのは、この上の句を取つたのであらう。

三七 安能於登世受 由可牟古馬母我 可都思加乃 麻末乃都藝波  
思 夜麻受可欲波牟

【語釋】都藝波思は、柱を立てゝ上に板をつぎわたし、幾つもの橋を繼ぎたしたやうに見える



橋で、眞間の入江に架けてあつたものと思はれる。眞間は今は大層地形がかはつてゐるが、昔は今の眞間小學校のあたりまで入海であつたのであらう。

【口譯】足音をたてないであるく駒がほしいものである。さういふ駒があれば、人に知られないやうに、眞間の繼橋を絶えず渡つて、手古名のところへ通はう。

【後記】里の若い男の歌である。

右の四首は下總國の歌

三六八

筑波禰乃 禰呂爾可須美爲 須宜可提爾 伊伎豆久伎美乎  
爲禰氏夜良佐禰

【語釋】上の二句は過ぎといはむ爲の序、霞のはれることを「すぎる」といふので、過ぎといふ語にかけたのである。○過ぎがてには、過ぎあへずの意、がては敢てすることである○息づくは、戀にあへぐこと○爲禰氏夜良佐禰は、率て共に寝て行かしめよとの意である。

【口譯】あの男君はあなたを思ひつめ、戀にあへぎつゝ、この門前を行き過ぎあへずにいらつしやるから、内へよび入れて寝させておかへしなさい。

【後記】古義に「歌の意は、女の家あたりに行く男の息づきて、過ぎがてにするを侍婢か又はさらぬかたへの女などの見て、いで内に引き入れて、率寝て行し給へよといへるなり。」といつてをるのが、よく當つてをる。

三六九

伊毛我可度 伊夜等保會吉奴 都久波夜麻 可久禮奴保刀爾  
蘇提婆布利氏奈

【語釋】布利氏奈は、振りてむといふに同じい。

【口譯】わが妻の家はいよ／＼遠くなつてしまつた。いますこし行くと、あの筑波山にかくれてしまふかも知れないから、山にかくれないうちに袖をふつて、名残を惜んで行くことにしよう。



【後記】遠く旅立つ男の歌であらう。「いや遠ざきぬ」とあるによつて、幾度もふりかへり見たことがわかる。

三九〇  
筑波禰爾 可加奈久和之能 禰乃未乎可 奈岐和多里南牟  
安布登波奈思爾

【語釋】上の二句は音のみといはむ爲の有心の序である。當時筑波山には鶯が棲んでゐたものと見える。筑波志によると、明治三十年の頃にも鶯が巢をつくつたといふことである。

【口譯】私はかうしてあの筑波山で、かくく〜と鳴いてゐる鶯のやうに聲をあげてなきくらすことであらうか、いつまでも戀人に逢ふことは出来ないで。

【後記】戀に破れた言ひ知れぬ哀感のこもつた歌である。

三九一  
筑波禰爾 曾我比爾美由流 安之保夜麻 安志可流登我毛

左禰見延奈久爾

【語釋】葦穂山は常陸國眞壁郡に在り、筑波山の東北に當つてをる。上の二句はあしかるといふむ爲の序○曾我比爾は、うしろにの意。左禰は實にである○見延奈久は見せなくといふに同じ。

【口譯】わたくしは、あの人の氣にそはないやうなことをして見せたことはないのに、どうしてこのやうに疎遠にされるのであらうか。

【後記】男の通はないやうになつたのを恨んで女の詠んだのであらう。

三九二  
筑波禰乃 伊波毛等杼呂爾 於都流美豆 代爾毛多由良爾  
和家於毛波奈久爾

【語釋】上の三句はたゆらにといはむための序○落つる水は有名な男女の川のこと、女體山



頂に近い清水に發源し、男體山なる橋井の下流を合せ、輕轄として澗底に落ち、末は櫻川に入つてをる。○多由良爾は、ゆたくとして、心の定まらぬことである。上の相模歌に「足柄の土肥の河内に出づる湯のよにもたよらに見ろが言はなかに」とあるに同じい。

【口譯】わたくしはあの筑波山の岩にとどろいておちる水のゆつたりとしてゐるやうに、氣長には思はないのに、なぜ早く逢ふことが出来ないものであらうか。

【後記】女の心に疑をもつ男の歌であらう。

三九三

筑波彌乃 乎氏毛許能母爾 毛利徹須惠 波播已毛禮杼母  
多麻會阿比爾家留

【語釋】上の句は守部すゑといはむ爲の序である。この守部を古義には鳥獸の番人とし、新考には山林盜伐の番人としてあるが、自分は橋の番人であらうと思ふ。筑波山は橋の名所で、二十の卷の防人の歌にも「橋の下吹く風のかぐはしき筑波の山を戀ひずかもあらむ」と見え

てをる上に、十の卷には、「橋を守部の里に妹をおきて」といふこともある○已毛禮のいは接頭語。

【口譯】筑波山のおちらこちらに橋の番人をすゑるやうに、母は番人をつけて、私を見守つてゐるのであるが、私の心は彼の人と一つになつてをるのであるから、何ともいたし方がない。

【後記】田舎處女の純情をありのまゝに披瀝した歌である。

三九四

左其呂毛能 乎豆久波彌呂能 夜麻乃佐吉 和須良延許波古  
會 那乎可家奈波賣

【語釋】左其呂毛能は、小筑波の枕詞で、さ衣の緒とかゝつてゐる○小筑波のをは接頭語○忘らえ來ばこそは、忘られて來ばこそその意○可家なはは、かけぬのぬを延ばして、かけなふとし、それを四段にはたらかせたのである○懸けは本居翁の説の如く、口にかけることである。「武藏根の小嶺見すぐし忘れゆく君が名かけて吾を音し泣くる。」とある「かけ」に同じ。



【口譯】自分は筑波山の山の崎に行くにつけても、そなたのことが忘れられるならば、かうはしないが、忘れられねばこそこのやうにそなたの名を呼ぶのである。

【後記】筑波山の麓をめぐつて旅立つ男の歌である。かけるといふのは、十五の巻に「かしこみと告らずありしをみ越路のたむけに立ちて妹が名のりつ」とある「のり」と同じ意であらう。

三五  
乎<sup>ヲ</sup>豆<sup>ツク</sup>久<sup>ク</sup>波<sup>バ</sup>乃<sup>ノ</sup> 禰<sup>ネ</sup>呂<sup>ロ</sup>爾<sup>ニ</sup>都<sup>ツク</sup>久<sup>ク</sup>多<sup>タ</sup>思<sup>シ</sup> 安<sup>ア</sup>比<sup>ヒ</sup>太<sup>タ</sup>欲<sup>ヨ</sup>波<sup>ハ</sup> 佐<sup>サ</sup>波<sup>ハ</sup>太<sup>タ</sup>奈<sup>ナ</sup>利<sup>リ</sup>努<sup>ヌ</sup>乎<sup>ヲ</sup>  
萬<sup>マ</sup>多<sup>タ</sup>禰<sup>ネ</sup>天<sup>テ</sup>武<sup>ム</sup>可<sup>カ</sup>聞<sup>モ</sup>

【語釋】都久は月の訛○多思は立ちの訛○安比太は逢ひたるの約まりではあるまいか○佐波太は、多くの日數を経たのをいふ。

【口譯】彼の筑波山に月の昇るのを見ながら、一緒に寝てから、はや久しくなるが、いつになれば、また寝ることが出来るであらうか。

【後記】女の家によどつた月夜を思ひ出して詠んだ男の歌であらう。

三六  
乎<sup>ヲ</sup>都<sup>ツク</sup>久<sup>ク</sup>波<sup>バ</sup>乃<sup>ノ</sup> 之<sup>シ</sup>氣<sup>ゲ</sup>吉<sup>キ</sup>許<sup>コ</sup>能<sup>ノ</sup>麻<sup>マ</sup>欲<sup>ヨ</sup> 多<sup>タ</sup>都<sup>ツク</sup>登<sup>ト</sup>利<sup>リ</sup>能<sup>ノ</sup> 目<sup>メ</sup>由<sup>ユ</sup>可<sup>カ</sup>汝<sup>ナ</sup>乎<sup>ヲ</sup>見<sup>ミ</sup>牟<sup>ム</sup>  
左<sup>サ</sup>禰<sup>ネ</sup>射<sup>ザ</sup>良<sup>ラ</sup>奈<sup>ナ</sup>久<sup>ク</sup>爾<sup>ニ</sup>

【語釋】上の三句は、目ゆかといはむ爲の序である○繁き木のまとしたのは、筑波山は鬱蒼として鳥の姿のさだかに見え難いからであらう○許能麻欲は、木の間よりの意○目由は目にと同じく、目のみにの意と思はれる。

【口譯】自分は彼の女と同衾をしたことがないでもないのに、この頃はちらと見るばかりで、ゆつくりと逢ふことが出来ない。

【後記】契沖が「繁き木の際より立つ鳥は、さだかにも見えず立つものなれば」といつてをるのがおもしろい。



三九七 比多知奈流 奈左可能宇美乃 多麻毛許會 比氣波多延須禮  
阿杼可多延世武

【語釋】奈左可は浪逆で鹿島郡に在り、今の北浦の南與田浦の東に當り、北利根の來會する江灣の稱である○阿杼可はなどかに同じ。

【口譯】この浪逆の海の玉藻は引つばれば、絶えもするが、われら兩人の關係はどうしてきれることがあらうか。

【後記】女にかきおくつた誓の歌であらう。

右の十首は常陸國の歌

三九八 比等未奈乃 許等波多由登毛 波爾思奈能 伊思井乃手兒我  
許登奈多延會禰

【語釋】伊思井、和名抄に信濃國埴科郡磯部郷といふのがある。今の戸倉村の地である。郡郷考には石井を磯部の井かといつてをる。○手兒は、父母の手に養はれる愛子の意。

【口譯】世間の人からのたよりは、すつかり絶えてしまつても、いとしく思ふあの石井の手兒のたよりだけは絶えないやうにありたい。

【後記】つよい憧憬の情の見える歌である。

三九九 信濃道者 伊麻能波里美知 可里婆禰爾 安思布麻之牟奈  
久都波氣和我世

【語釋】今の壘道は新しく開通した道をいふ。續日本紀元明天皇の和銅六年秋七月戊辰の條に、美濃信濃二國之堺。徑道險阻。往還艱難。仍通吉蘇路。とあるのはこの路であらう ○可里婆禰は竹木などの刈株をいふ○布麻之牟奈は、踏ますなといふに同じく、踏み給ふ勿れの意である。



【口譯】この信濃路は新に開通したばかりの道であるから、刈株でふみぬきをなさらないやうに履をおはきなさい。わが夫よ。

【後記】遠く旅立つ夫に贈った歌であるが、足踏ましむなといつて、更に履著け我が夫といつてをるところに、深く夫を思ひやる濃やかなる愛情が見える。古事記の衣通姫の歌に「なつくさのあひねの濱のかきがひに足ふましむな。あかして通れ。」とあるのと同じ趣の歌である。

三四〇  
信濃奈流 知具麻能河泊能 左射禮思母 伎彌之布美氏婆  
多麻等比呂波牟

【語釋】左射禮思は細石○布美氏婆は踏みたらばといふに同じ。

【口譯】あの筑摩の川の細石も、いとしいあなたが御踏みになつたら、わたしは尊い玉として拾ひませう。

【後記】戀人に對する熱愛がすべての物を美化するのである。

三四一  
中麻奈爾 宇伎乎流布禰能 許藝氏奈婆 安布許等可多思  
家布爾思安良受波

【語釋】中麻奈は未詳、古義には中志麻の誤ならむといつてをる。中志麻は信濃國水内郡に在り。今の河中島である。荒木田久老の信濃漫録には水内郡なる中俣ならむといつてをる。

【口譯】あの中麻奈に浮いてゐる船には、わが思ふ人が乗つてゐるのであるから、早くいつて逢つて來よう。船が出てしまつたならば、二度と逢ふことは出來まい、今日でなくては。

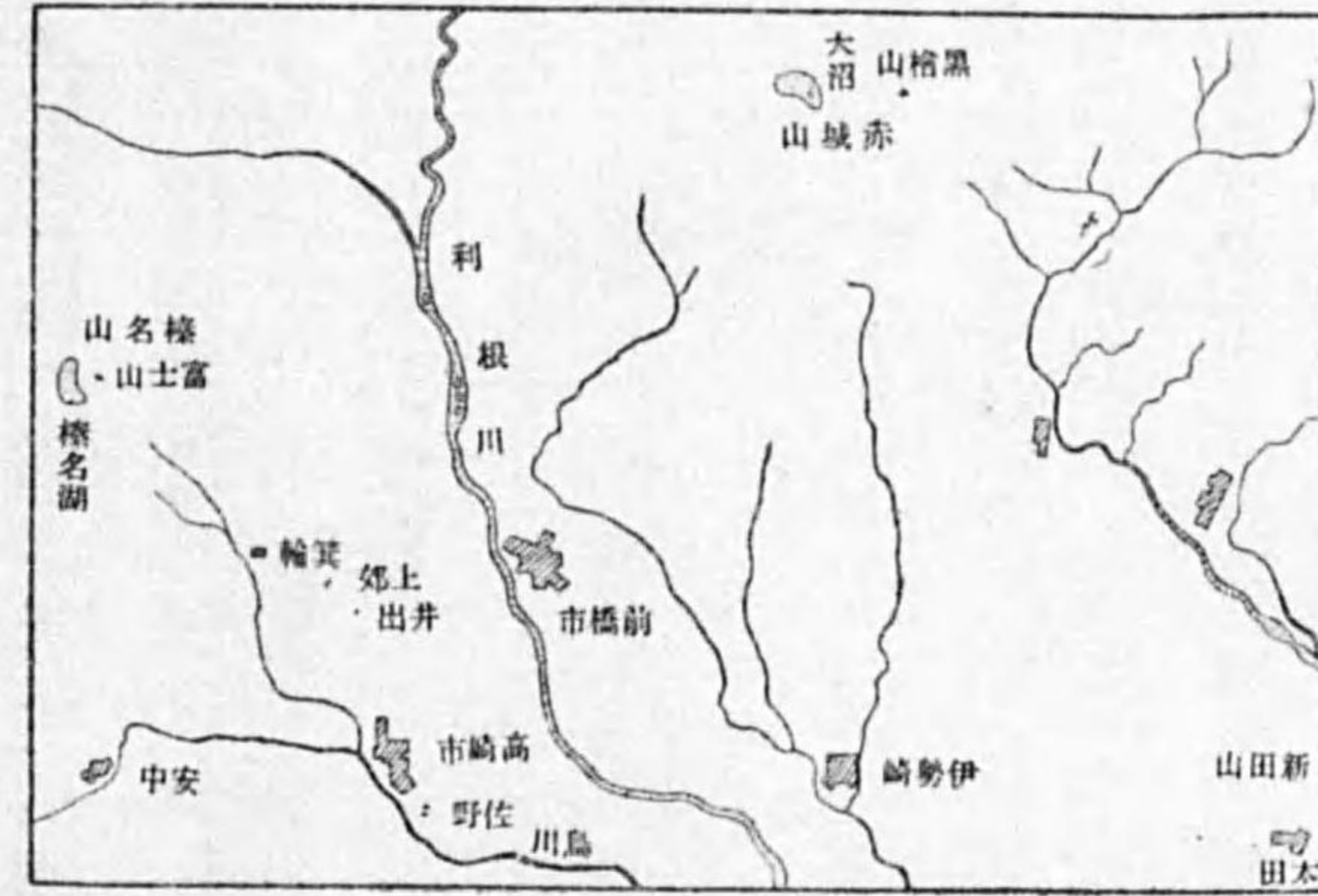
【後記】舟に乗つて旅立たうとする夫を見送る女の歌である。今日にしあらずばの一句に窮迫の感が現れてゐる。

右の四首は信濃國の歌



三〇三 比能具禮爾 宇須比乃夜麻乎 古由流日波 勢奈能我素低母

佐夜爾布良思都



【語釋】勢奈能賀の能は助詞○佐夜爾布良思都は、清ササに振り給ひつの意。

【口譯】わが夫が碓氷の山を越える頃には、日はけや暮方になつてゐたが、夫もひどく名残を惜んで、自分をふりかへりみつゝ、さやかに袖をふつてくれたのがうれしい。

【後記】旅立つ夫を見送り、夫の名残を惜しむのを喜んだ女の歌である。上野から碓氷峠をこえ、中山道へ向つたのであらう。

三〇四 安我古非波 麻左香毛可奈思 久佐麻久良 多胡能伊利野乃 於久母可奈思母

【語釋】伊利野は上野國多胡郡入野村の東なる黒熊村のあたりである○第三句は略解に「この草枕は枕詞ならず。旅のさまをいふ。」といつてをるが、其の通りで、草を枕とする意につかつたのであらう○多胡の入野のはおくといはむための序である○麻左香は現在の意。

【口譯】わたしたち二人の仲はどうしてかう思ふまゝにならないのであらうか。現在とてもこの通りであるが、將來とても案じられる。

【後記】戀の煩悶を多胡の入野の旅行のなやみの多いのに比したのであらう。

三〇五 可美都氣努 安蘇能麻素武良 可伎武太伎 奴禮村安加奴乎 安村加安我世牟



【語釋】安蘇は下野の安蘇郡で、古來有名な麻の産地である。今は下野國に屬してゐるが、昔は上野國に屬してゐたのであらう○眞麻屯マツムラは麻のたばで、眞は接頭語である○武太伎は抱ダきに同じい○上の三句は搔き抱きといはむための序。

【口譯】麻を取り入れるのには、麻のたばを抱きよせるやうにするが、自分はそのやうにして女を抱いて寝てゐるのであるから、この上はないのに、満足の出來ないのはどうしたらよからうか。

【後記】新婚の男のよんだ歌である。島木赤彦氏のいふ満足感の生む不満足感であらう。

三四五  
可美都氣乃 乎度能多杼里我 可波治爾毛 兒良波安波奈毛  
比等理能未思氏

【語釋】乎度は或本の歌にある如く乎野の誤であらう○多杼里は地名で、上野の小野といふ地に在るのであらうが、小野郷は甘樂郷にもあり、綠野郡にもあり、群馬郡にもあるから、い

づれとも定め難い○可波治は川ぞひの路であらう。安波奈毛は逢はなむに同じい。

【口譯】自分は今乎度の川路をあるいてゐるが、丁度かういふところで、あの娘に出くはしたらよいに、外に見る人もなくて。

【後記】人目の少い處に來たときの若い男の感想であらう。

或本歌曰 可美都氣乃 乎野乃多杼里我 安波治爾毛 世奈波安波奈毛 美流比登奈思爾

【語釋】安波治はかはぢの誤であらう。

三四六  
可美都氣野 左野乃九久多知 乎里波夜志 安禮波麻多牟惠  
許登之許受登母

【語釋】佐野は上野國群馬郡に在り、今の佐野町で、烏川の北岸に沿ひ、高崎市街の東南郊に



當つてをる○九久多知は蔓菁の苗○乎里波夜志は、折つてこまかにきざむことで、この地方では今もこまかにきざむことを、はやすといつてをる。きざんで鹽漬などにするのであらう○麻多牟恵の糸は感動の助辭である。

【口譯】あの蔓菁の苗がだん／＼大きくなるが、わが夫はまだ歸つてみえない。ひとり取り入れて、こまかに刻んで漬物にして、心しづかに夫の歸りを待ちませう、たとひ今年の中にお歸りにならずとも。

【後記】家に在つて、夫の歸りを待つ女の歌である。

三四七

可美都氣努 麻具波思麻度爾 安佐日左指 麻伎良波之母奈  
安利都追見禮婆

【語釋】上の三句はまぎらはしもなといはむ爲の序である○麻具波思麻は考には真桑島と見てある。利根川沿岸の地名であらう。利根川の沿岸には、敷島・京ヶ島・福島・前島・尾島・

梅島等の如く、島といふ地名が多い。島戸はその渡瀬と見える○麻伎良波之とは眩ゆくて、常に心のおかれるのをいふのであらう。

【口譯】彼の真桑島の渡に朝日がさすと、きら／＼としてまばゆいが、丁度そのやうに結婚をして、一しよになつてみると、常にまばゆく氣のおかれることである。

【後記】卷十に「いはばしの間々にさきたるかほ花の花にしありけりありつゝみれば」とあるのに似た歌である。

三四八

爾比多夜麻 禰爾波都可奈那 和爾余曾利 波之奈流兒良師  
安夜爾可奈思母

【語釋】爾比多夜麻は上野國新田郡に在り、今の太田の金山で、平野の間に孤立してをる○都可奈那は着かずしての意。ななはなふといふ東語の中止形と見える。この下にある「しらとほふ小新田山の守る山のうらがれせななとこはにもがも」又二十の卷にある「わがせなをつ



くしへやりてうつくしみ帯はとかななあやにかもねも」とあるのと同例である○餘曾利はよ  
りながらの意○波之奈流は中途半ばなるをいふ。この巻に「梓弓末はより寝むまさかこそ人  
目を多み汝をはしにおけれ」の「はし」と同意である。

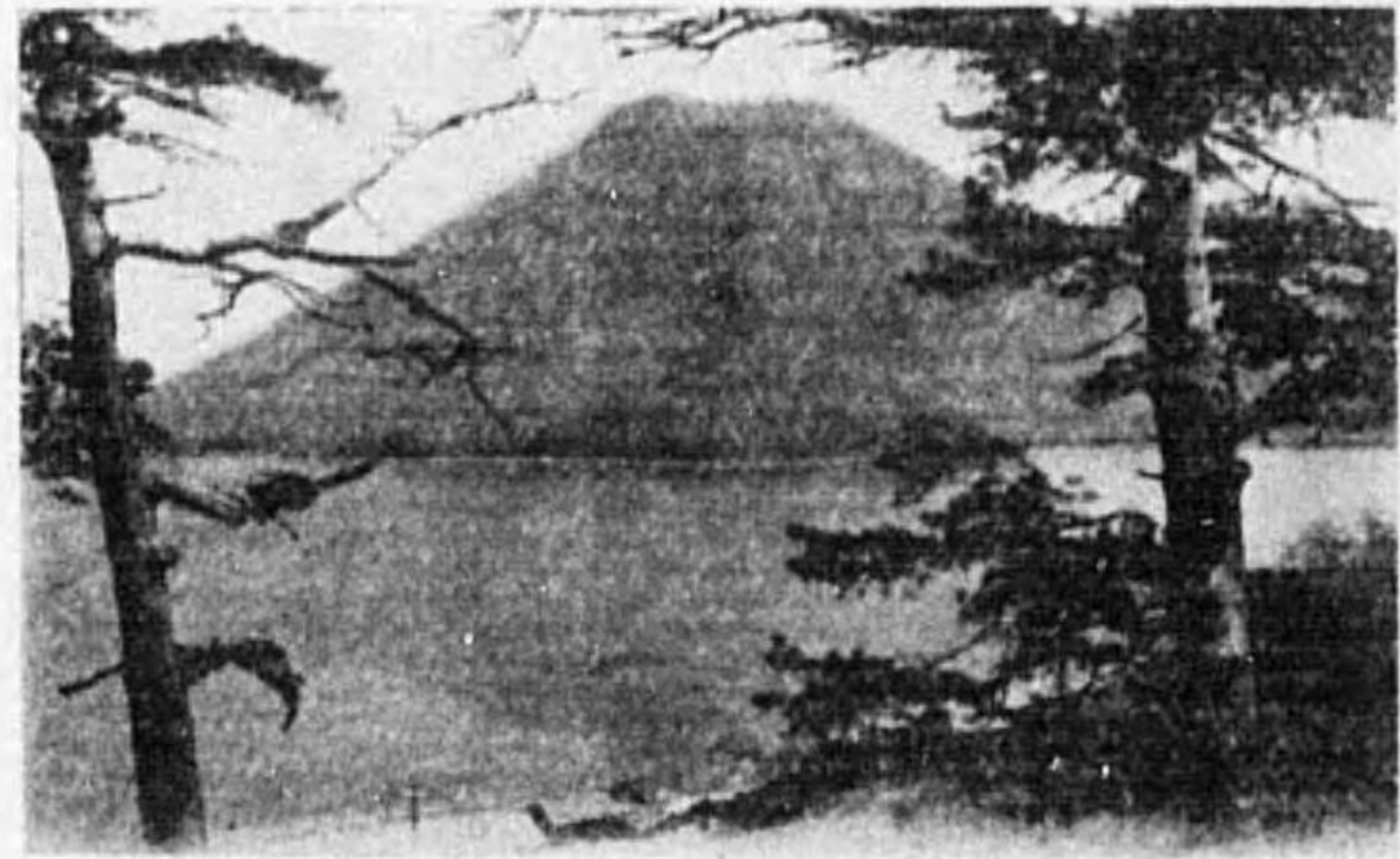
【口譯】新田山の他の嶺につかないやうに、あの娘は吾によりながら、どうもしつくりと自分  
にあはず、中途半ばであるのに、なぜこのやうに無上にかはいゝのであらうか。

【後記】古義に「按ふに此の新田山は外の大山とはつゞかずして、孤立の山なるべし。古來山  
の嶺に雲のつかぬごとくといふ意に解き來れども、雲といはざれば、いかゞ」といつてを  
るが、よく當つてをる。

三四〇九

伊香保呂爾 安麻久母伊都藝 可奴麻豆久 比等登於多波布  
伊射禰志米刀羅

【語釋】伊都藝のいは接頭語、つぎは打續きて立つこと○可奴麻豆久は可沼になれ親しむ意。



榛名湖

可沼は伊香保の沼即ち今の榛名湖のことである○比等登は  
人の如くの意。於多波布は仙覺の説の如く戯れること○刀  
羅のらは助詞であらう。

【口譯】伊香保に天雲がうちつゞき垂れ下つて、榛名湖の水  
につき、水に馴れ親しむ人のやうに水に戯れてゐる。あれ  
はさあ自分と寝させよといふのであらう。

【後記】この歌は古來難解とされてをる歌であるが、仙覺抄  
に「あまぐもいつぎとは天雲のつゞきなびけるなり。かぬ  
まづくとは沼なれたりといふ詞、ひととおたばふとはそば  
へたるなり。歌の心はいかほの沼に天雲のたなびきくだれ  
るが、水に浮びなれたる人のごとくにてそばへたるはいざねんとよそへ詠めるなり。」といつ  
てをるのがおもしろく思はれる○おたばふは戯れる意の方言であらう。



三二〇 伊香保呂能 蘇比乃波里波良 禰毛己呂爾 於久乎奈加禰會  
麻左可思余加婆

【語釋】傍は溪流に沿ひたる地○ねもごろには、念入りにの意○於久は、將來のこと○麻左可は現在のこと○餘加婆は、よからばの略である○上の三句はおくといはむ爲の序。

【口譯】そなたは、いろ／＼と將來のことを氣にしてゐられるが、現在さへよければ、それでよいではないか。さのみ深く將來のことを案じるには及ぶまい。

【後記】榛名山の溪間は到るところ榛の林である。それで、大日本地名辭書には「榛野の義にて、榛の木の生ひ茂れるよりの名なるべし。」といつてをる。この榛を萩と見る説もあるが、萬葉に數多い榛の歌に一首も花を詠み合せた歌のない一事によつても、萩でないことが明である。

三二一 多胡能禰爾 與西都奈波倍氏 與須禮騰毛 阿爾久夜斯豆志

會能加把與吉爾

【語釋】多胡の嶺は多胡郡の嶺で、今の御荷鋒山を指すのである。この山は横に長く延び、よせ綱をつけて引き出したやうな形をしてをる。寄せ綱は石などを引きよせる綱のこと○斯豆志は重々しく鎮まる意の形容詞である。

【口譯】あの娘は容貌は美しいが、引き試みても多胡の嶺と同様で、容易に動きさうにもない。  
【後記】泰然自若たる御荷鋒山を取り出して堅實なる女に譬へたもので、出雲風土記の國引の條が聯想される。

三二二 賀美都氣野 久路保乃禰呂乃 久受葉我多 可奈師家兒良爾  
伊夜射可里久母

【語釋】久路保乃禰呂、上野國には、利根川を隔て、西なる榛名山に對し、東に赤城山があ



る。遠く裾野をはつた雄大な山で、其の最高峰を黒檜山クロヒノといふ。こゝに久呂保の嶺ろとあるのは、この黒檜山を指すのであらう。○久受葉我多、井上博士がその著萬葉新考に於て、この久受葉我多を久受葉奈須の誤とし、下野歌に「下野のみかもの山の小檜のす、まぐはし見ろは誰が筒か持たむ」とあるのを引いて證としてをられるのは卓見である。

【口譯】自分は今遠く旅立つてゆく。あの久路保の嶺の葛の葉のやうにうつくしくかはい、娘にいよ／＼遠ざかつて來ることよ。

【後記】惜別の情の言外に味ははれる歌である。

三四三  
刀禰河泊乃 可波世毛思良受 多多和多里 奈美爾安布能須  
安做流伎美可母

【語釋】刀禰河泊は利根川。上野國利根郡に發源し、赤城榛名兩山の間を流れ、常陸と下總の界をなして、太平洋に注いでゐる○多多和多里は、むやみに歩涉カチワタリをすること。

【口譯】利根川の河の淺瀬がどこにあるかも知らず、むやみに歩涉カチワタリをしたのに、偶然に白浪のたつ淺瀬に逢つたやうに思ひがけなく君に逢つたのがうれしい。

【後記】浪に逢ふとは、淺瀬に出たことをいふのであらう。古今集に「淺瀬白浪たどりつゝ」といつたり、「淺き瀬にこそ仇浪はたて」などとあるのと、同様である。

三四四  
伊香保呂能 夜左可能爲提爾 多都弩自能 安良波路萬代母  
佐禰乎佐禰氏婆

【語釋】夜左可能爲堤、上野國群馬郡上郊村カミサトに大字井出といふ處があり、地理志料にはこゝを八坂の井堰に當てゝをる。村の西に井野川といふのがある。榛名山の東麓なる箕輪ミヅノの方から流れて來る小川であるが、今も處々に井堰を設けて、水田に灌ぎ、十二堰トビキの名がある。この地方は驟雨の多いところであるから、虹のたつことが多かつたものと見える。上の三句はあらはるまでもといはむための序である○さ寢をさ寢てばは、寢たらばといふことを強くいつ



たので、古事記の木梨輕太子の御歌に「笹葉に打つや霰のたしたしにゐねてむ後は人はかゆとも。美はしみさねしさねてば刈こもの亂れば亂れ、さねしさねてば」とあるに同じく、この下にうれしからましなどいふ語を略してをる○弩自は虹の訛、あらはるはあらはるの訛であらう。

【口譯】あの夜佐可の井堰にたつた虹のやうに、あざやかに顯れるまで、たび／＼寝たらば、うれしいことであらうに。

【後記】強い熱情の現れた歌である。

三四五 可美都氣努 伊可保乃奴麻爾 宇惠古奈宜 可久古非牟等夜  
多禰物得米家武

【語釋】伊可保乃奴麻は榛名湖のこと○古奈宜は水葱で、みづあふひに似た水草であるが、昔は食料として栽培したものと見える。こゝは美しい若い女にたとへたのである。



草 ぎ な こ

【口譯】自分は伊香保の沼に殖子水葱の種子を求めてうゑておいたが、それが生ひ立つて如何にも美しい。それと同じやうに、はやく縁を結んでおいた若い女が生ひたつて如何にも美しく、戀しさに堪へられない。もと／＼このやうに戀しさに堪へられないほど美しくならうと思つて、縁を結んだのであらうか、さうでもないのに。

【後記】いひなづけなどの女の急に戀しさに堪

へられないのを歌つたのであらう。

三四六 可美都氣努 可保夜我奴麻能 伊波爲都良 比可波奴禮都追  
安乎奈多要會禰



【語釋】可保夜我奴麻能、上野國邑樂郡に多々良沼があり、この附近に沼澤が多い。集中に見える伊奈良沼・可保夜沼はこれらの澤地であらうといふことである○伊波爲都良は上にいつた通り、馬齒莧スズリヒユのことである。あをなたえそねは、吾を疎み絶ゆること勿れの意。

【口譯】あなたはあの可保夜が沼の伊波爲都良のやうに、引かばぬる／＼とやはらかに靡き依つて、吾をうとみ絶えないやうになさい。

【後記】この歌は上の武藏歌に「入間道の大家オホヤが原のいはぬづら引かばぬる／＼吾にな絶えそね」とある替歌である。

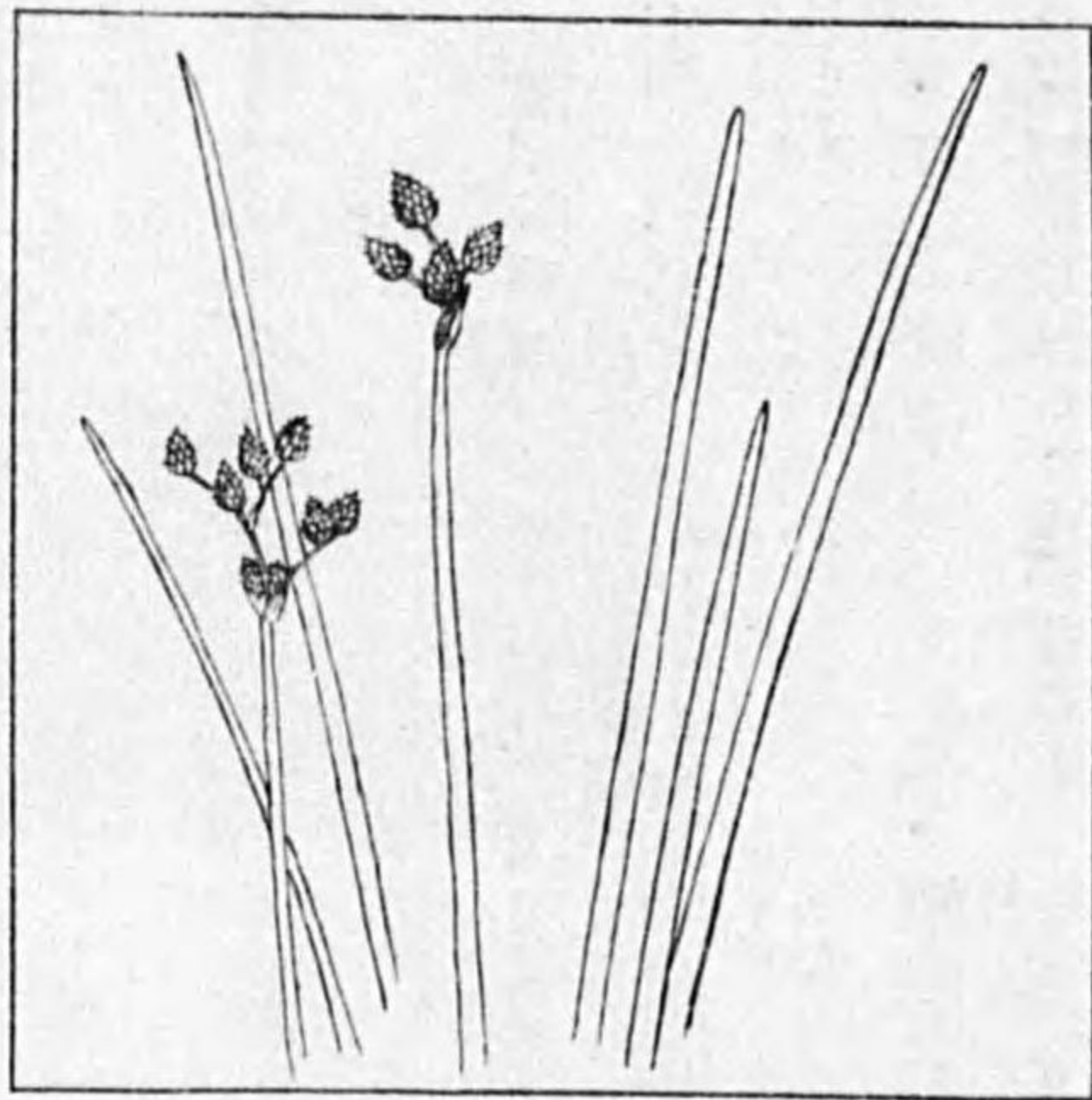
可美都氣努 伊奈良能奴麻能 於保爲具左 與會爾見之欲波  
 伊麻許會麻左禮柿本朝臣人 磨歌集出也

【語釋】大蘭草は莞フトナである○與會爾見之欲波は、よそに見しよりはの意。

【口譯】伊奈良の沼の大蘭草を手にとつて見ると、よそ目に見たときよりも美しいやうに、つ

れそうて見ると、一段美しく思はれる。

【後記】この歌は、上の「上毛野真桑島門に朝日さしまぎらはしもよ在りつゝ見れば」とあるとは正反對である。



莞

可美都氣努 佐野田能奈倍能  
 武良奈倍爾 許登波佐太米都  
 伊麻波伊可爾世毛

【語釋】佐野田は佐野に在る田○上の二句は群苗にかゝる序。武良奈倍は群がり生ずる苗であるが、それを占ウラナヒにかけたものと見える。うらなへを、むらなへといふのは、うだき(抱)をむだきといひ、うま(馬)をむまといふと同例である○世母はせむに同じ。

【口譯】わたくしの結婚のことは占によつて、とくに定めてしまつてをりますので、今は何と



もいたし方がございません。

【後記】男から挑まれた女の歌であらう。

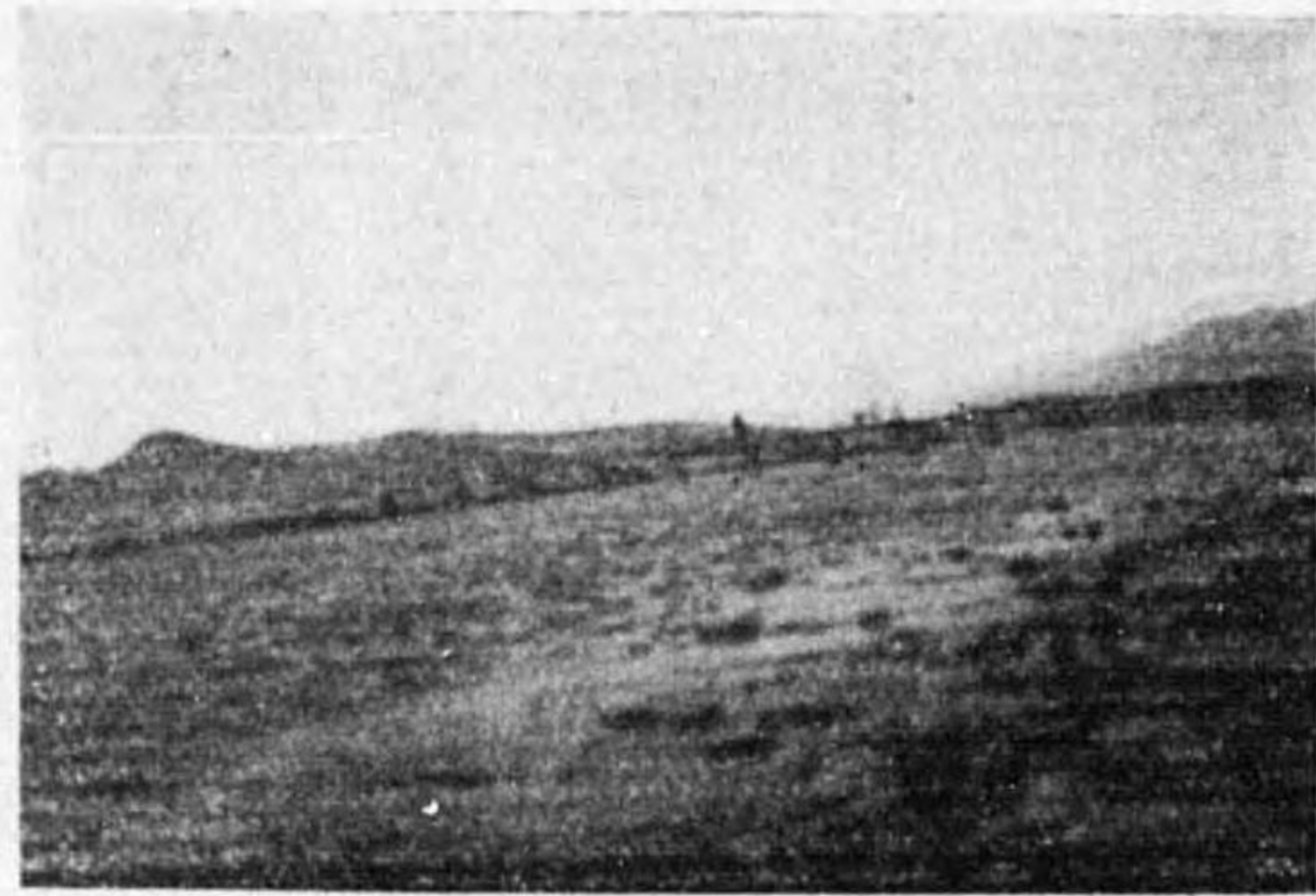
三二九 伊香保加世 欲奈可次下 於毛比度路 久麻許會之都等 和  
須禮西奈布母

【語釋】新考に思びとろを思へどももの誤とし、くまこそしつとを、かれこそしつれの誤としてをるのがおもしろい○かれは夜がれをすること○忘れせなふもは、忘れせずもの意である。

【口譯】伊香保から吹きおろす風の夜どほし吹くごとく、自分は思ひつゞけてゐるにも拘らず。夜がれをするのは、已むを得ぬ事情のためで、決してそなたを忘れはしないのである。

【後記】この歌についておもしろく感ずるのは、上州のからつ風のみ合されてゐることである。からつ風は上州の名物で、榛名おろしは、三國おろしや浅間おろしとともに有名であるが、集中には伊香保風とよまれてゐる。

三三〇 可美都氣努 佐野乃布奈波之 登利波奈之 於也波左久禮騰  
和波左可禮賀倍



佐野の船橋

【語釋】上の二句は序である○舟橋は舟を並べて造つた橋で、大水の出ようとするときは取り放つものであるから、取り放しにかけたのである○左久は二人の間を離すこと、○賀倍はかはの訛○舟橋の跡は高崎市の南佐野村に在り、長さ二十間許の板橋が烏川に架けられてゐる。烏川は相當に川幅の廣い川であるから、橋のあるのは、その一部分に過ぎず、針金を以て橋板を兩岸の杭につないでゐるのは、昔の舟橋の面影を存するもので、今も渡船料だといつて橋錢を取つてゐる。附近に舟橋觀音といふのもある。



【口譯】あの佐野の舟橋を左右へ取放すやうに、親は我等二人の間を引きはなさうとするけれども、吾は離れようか、決して離れはしないよ。

【後記】さかるがへと頑張つてゐるところが、如何にも上州の青年らしい。この下に「我がまつま人はさくれど、朝がほのとしさへこどとわはさかるがへ」とあるのは、これに似た歌である。

三三  
伊香保禰爾 可未奈那里曾禰 和我倍爾波 由惠波奈家杼母  
兒良爾與里氏曾

【語釋】奈那里曾禰は、鳴つてくれるなの意○和我倍は吾が上○由惠波奈家杼母は、仔細はなけれどもの意。

【口譯】伊香保の嶺で、雷は鳴つてくれるな。雷が鳴つても、自分は何とも思はないが、この娘のためにかく祈るのである。

【後記】同行の女の身の上を氣づかふやさしい心もちの見える歌である。上州は氣候の激變が多く、恐ろしい雷鳴を起し、それが四方の山々に反響して、耳を劈くことがある。この歌はかういふ場合に女を伴うて山路などを行く男のよんだものであらう。



三三  
伊香保可是 布久日布加奴日 安里登伊倍杼 安我古非能未  
思 等伎奈可里家利

【語釋】上州は、冬になると、榛名おろしの吹く日が殊に多い。こゝに伊香保風をとり出したのは、これが爲であらう。

【口譯】上州には伊香保風の吹く日が多い。それとても、吹く日もあり、吹かぬ日もあるが、自分があの娘を戀しく思ふ心のみは、いつと定まつた時がない。

【後記】古今集に「駿河なる田兒の浦浪立たぬ日はあれども君に戀ひぬ日はなし」とあるのはこれによく似た歌である。



三四三  
 可美都氣努 伊可抱乃彌呂爾 布路與伎能 遊吉須宜可提奴  
 伊毛賀伊徹乃安多里

【語釋】上の三句は、雪と行きと類音を重ねて、行き過ぎといはむための序としたのである○  
 布路は降るの訛。

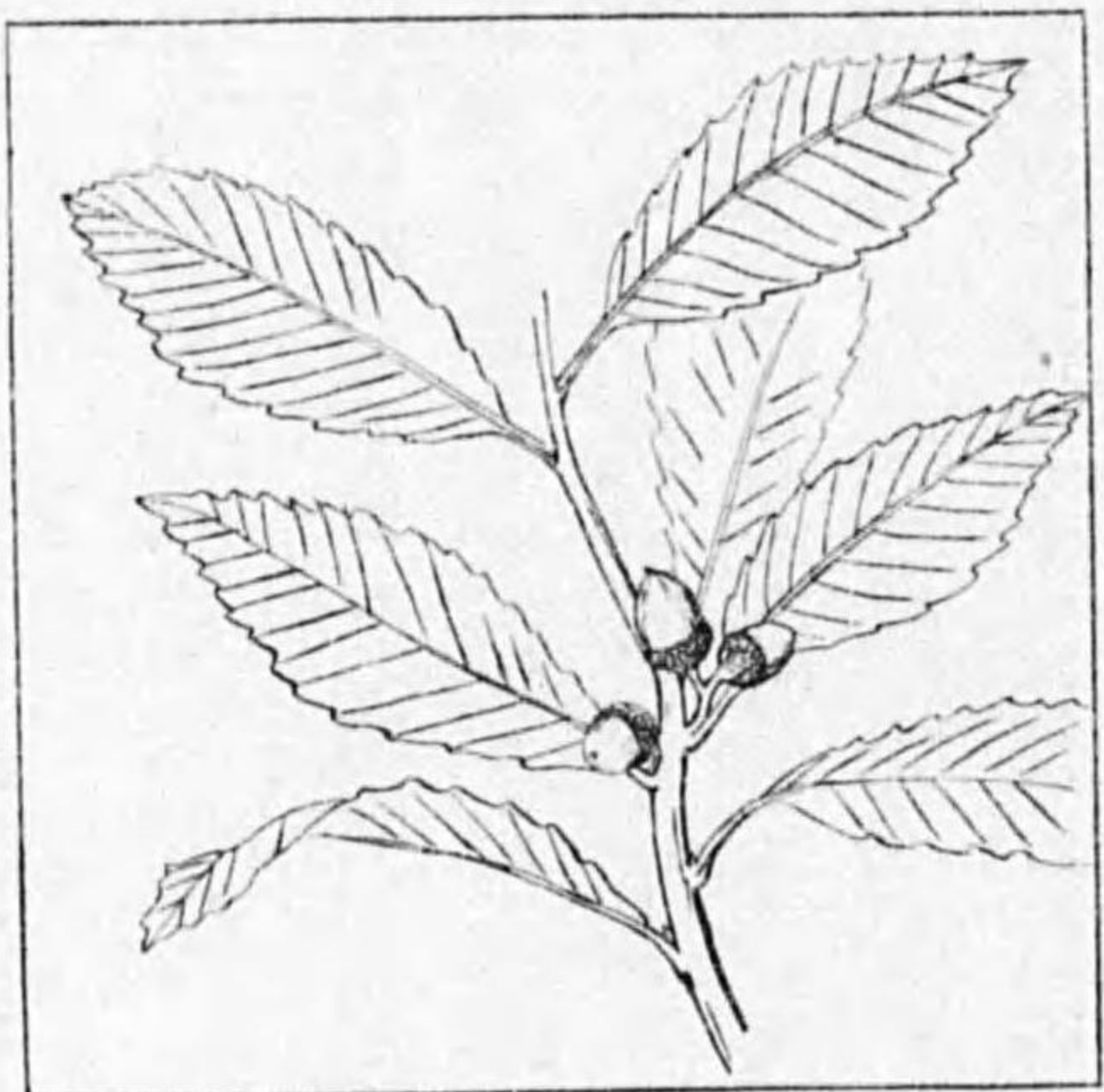
【口譯】自分はこゝまで来たが、このあたりにいとしい妻の家があるかと思ふと、急に立ちよ  
 りたくなり、素通りには出来ない。

【後記】伊香保嶺に近く住む男の歌であらう。伊香保は今スキーの名所として世に知られ、  
 春の初にも久しく雪が残つてゐる。

右の二十二首は上野國の歌

三四四  
 之母都家野 美可母乃夜麻能 許奈良能須 麻具波思兒呂波

多賀家可母多牟



ら な こ

【語釋】美可母乃夜麻、下野國都賀郡に在り。

(三鴨山)今岩舟驛の南一里。平原に突起した  
 小丘で、俗に大田和山と呼んでをる○麻具波  
 思は、目細しで、美しいこと○多賀家可母多  
 牟は、誰が筈か持たむで、誰の妻となるであ  
 らうかの意であるといふ大神眞潮の説に従ひ  
 たい。

【口譯】あのみかもの山の小檜のやうに美しい  
 娘は誰の妻となつて、飯筈を持つてつかへる

であらうか。

【後記】ひそかに想を懸けてゐる男のよんだものであらう、伊勢物語にある「うらわかみ寝よ



げに見ゆる若草を人の結ばむことをしぞ思ふ」といふ歌が思ひ合される。

三四五 志母都家努 安素乃波泊良欲 伊之布麻受 蘇良由登伎奴與  
奈我已許呂能禮

【語釋】安素乃河泊良、和名抄に下野國安蘇郡安蘇郷がある。今の佐野町犬伏町旗川村に當り利根川の支流がこゝを流れてをる。安蘇の河原とはこの支流の河原を指すのであらう○河泊良欲のよ、蘇良由のゆは、ともによりの意。

【口譯】わたしはそなたの戀しさに足も地に着かず、宙を飛ぶやうにして來たのであるが、そなたはどう思ふか。そなたの本心を聞きたい。

【後記】強い熱情のこもつた歌である。石ふまずといつて更に空より來ぬよといつたところに、非常な迫力がある。

右の二首は下野國の歌

三四六 安比豆禰能 久爾乎佐杼抱美 安波奈波婆 斯努比爾勢毛等  
比毛牟須婆佐禰

【語釋】安比豆禰は、岩代國耶麻郡會津の北にある磐梯山を指すのであらう。觀聞志に會津山即ち磐梯山也と見えてをる○さ遠みのさは接頭語○安波奈波婆は、逢はずあらばの意○比毛牟須婆佐禰は紐を結び給への意、紐は下紐である。

【口譯】自分は今旅立つて行くが、あの會津嶺のある國を遠くはなれて、逢ふことが出來ないやうになつたら、見て心を慰めたいと思ふから、この下紐を結んで下さい。

【後記】別離の情の切々たるものがある。

三四七 筑紫奈留 爾抱布兒由惠爾 美知能久乃 可刀利乎登女乃  
由比思比毛等久



【語釋】由惠爾といふ語は、上文の意を承けて順説するにも用ひ、逆説するにも用ひるのであるが、こゝは順説の方である○爾抱布は、しほらしい意、一の巻に「紫のほへる妹をにくくあらば」とあるのと、つかひ方が同じである○可刀利 磐城國石城郡に片依郷カタマセがあり、古義にはこれを可刀利にあてゝをる。

【口譯】筑紫にゐる美しい娘のかはゆさに、わが故郷を出るときに、かどりの處女が結んでくれた下紐をといてしまつた。

【後記】異郷に在る男の偽らざる告白である。筑紫へ差遣せられた防人の歌であらう。

三六 安太多良乃 爾爾布須思之能 安里都都毛 安禮波伊多良牟  
禰度奈佐利曾禰

【語釋】安太多良は、安達太良山で、岩代國安達郡に在る○上の三句は、猪が伏處を定めて容易に他に移らないといふ習性を捕へて、寢處な去りそねにかゝる序としたのである。

【口譯】彼の安太多良の嶺に伏す鹿のやうに、いつも臥處をかへずに待つてゐて下さい。自分はそのこへいつて、一緒に寢ようと思ふから。

【後記】野趣の多い歌である。

右の三首は常陸國の歌

### 譬喩歌

三七 等保都安布美 伊奈佐保曾江乃 水乎都久思 安禮乎多能米  
氏 安佐麻之物能乎

【語釋】引佐細江は、遠江國引佐郡にあり。濱名湖の一支灣で、東北に斗入し、引佐峠の下に及び、井伊谷川が北から來て、こゝに注いでゐる○水乎都久思は滞標とかく。水路標即ち水先案内のために立てる杭である○憑めては、たのませるの意。



【口譯】あの人は、引佐細江の水路標が人をたのませるやうに、わたしを頼ませておきながら、心の浅いのに氣づかなかつたのがくやしい。

【後記】男にすてられた女の歌であらう。

右の一首は遠江國の歌

三三〇  
斯太能宇良乎 阿佐許求布禰波 與志奈之爾 許求良米可母  
與 余志許佐流良米

【語釋】斯太は駿河國志太郡の地である。大井河の末流なる河水が分派停滯して、昔は江灣の狀をなしてゐたので、志田の浦といつたのであらう○與志奈之爾は理由なくの意○餘志許佐流良米は、よしこそあるらめの約。

【口譯】志太の浦を漕ぐ舟は絶えずあちらへ行き、こちらへもどりしてゐるが、その舟のやうに、あの人はわたしの門前を往きつもとどりつする。理由なしに往來するはずはない。何か仔

細があるのであらう。

【後記】若い女の歌である。後の民謡に「用もない門を二度三度」などいふのに似て、無限の含蓄がある。催馬樂に「我が門をとさんかうさん練るをのこ。よしこそさるらめ」とあるのと並べ見るべき作である。

右の一首は駿河國の歌

三三一  
阿之我里乃 安伎奈乃夜麻爾 比古布禰乃 斯利比可志母與  
許己波故賀多爾

【語釋】安伎奈は、足柄山の一峯と思はれるが、所在がわからない○比古布禰のは引く船のの訛。萬葉新考に「いにしへの舟は丸木舟なれば、大木をそのままに山より引き下さむよりは刳りて船に作りて、後に引き下さが便なりしなり。さて其の舟をおろすに急に下らば危かるべきによりて、舟の後にひかへ綱を附けて、その綱を取らせつゝ徐におろしゝなり。今はそ



の趣を序として、舟の後を引くごとく或女が男の後を引くわいといへるなり。」とあるのがおもしろい○比可志母與は引かすもよの訛○許已波はこゝばくの意○故賀多爾は、來がてぬの訛であらう。

【口譯】 自分は何とかして、あの人をこちらへ引きつけたいと思ふけれども、なか／＼思ふやうにはならない。あの安伎奈の山から引きおろす船を後から綱で引つばるやうに他に女があつて引くのではあるまいか。さてどうしたものであらうぞ。

【後記】 深く思をかけた男の自分の心にまかせないのを見て、男の心を疑つてよんだ女の歌であらう。それを山中から引きおろす丸木舟に思ひよせたのがおもしろい。

三三  
阿之賀利乃 和乎可雞夜麻能 可頭乃木能 和乎可豆佐禰母  
可豆佐可受等母

【語釋】 和乎可雞山は矢倉嶽の舊名、可頭乃木は白膠木のことである。矢倉が嶽の附近には今



も白膠木が多く、秋の季になると、全山紅葉して非常な美觀を呈する○上の三句はかつといはむ爲の序である。○かつは「一方にはかくあれど、他の方にては」の意に用ひられる語○「和乎」は「吾は」の誤であらう○「さねも」は「さ寝む」の意○「佐可受」はこの地方の方言で、割かむとすの意と思はれる。山梨長野地方では今も「行かう」といふべきを「行かず」といひ、「買はう」といふべきを「買はず」といつてを

る。「行かうずる」「買はうずる」の略であらう○割くは男女の仲をはなすことで、上野歌に「親はさくれど」とあると同じである。

【口譯】 吾々二人はかく互に愛し合つてゐる上は自分等は取り敢へず一緒に寝よう、たとひ一方に於て親は二人の仲を離さうとしても。



【後記】この歌は古來難解の歌とされてゐるのであるが、かう解すれば、意義がまことに明瞭である。内容は上野歌に「上野の佐野の船橋とりはなし親はさくれど吾はさかるがへ」とあるのに似てをる。

三三三 多伎木許流 可麻久良夜麻能 許太流木乎 麻都等奈我伊波  
婆 古非都都夜安良牟

【語釋】多伎木許流は、薪を樵るにつかふ鎌とかけた枕詞○木乎は木のの誤であらう○上の三句は序○許太流は、木の末の垂れさがること。

【口譯】自分は今から旅に出ようとするのであるが、そなたが氣長く待つてをるといふならば、自分も他の女に心をうつすやうなことはなく、それを樂しみにして、戀ひつゝゐよう。

【後記】防人などになつてゆく男の、女と別を惜んだ歌であらう。古今集に「立ち別れいなばの山の峯におふる松とし聞かば今歸り來む」とあるのに似た歌である。

右の三首は相模國の歌

三四四 可美都家野 安蘇夜麻都豆良 野乎比呂美 波比爾思物能乎  
安是加多延世武

【語釋】野乎比呂美は、野が廣いによつての意○延は心をかよはすこと○上の句は延ひといはむ爲の序である。

【口譯】吾々二人は、このやうに互に心をかよはしてゐる上は、どうして絶えることがあらうか。

【後記】若い男女の堅い決心のみえる歌である。

三四五 伊可保呂乃 蘇比乃波里波良 和我吉奴爾 都伎與良之母與  
比多倣登於毛倣婆



【語釋】與良之母は、よろしも同意で、つくにふさはしいのをいふ○比多徹は純栲即ち純白のきぬである○波里が榛の木であることは上にいつた通りで、當時は多くこの木の實を採つて、染料にしたものと見える。

【口譯】自分の着物が純白のきぬであるために、榛の實の色の着きやすいやうに、自分は純情をさゝげてゐるのであるから、彼の娘はたやすく自分に靡き従ふことと思ふ。

【後記】女を榛にたとへ、自分を布帛にたとへたのである。

三三六  
志良登保布 乎爾比多夜麻乃 毛流夜麻能 宇良賀禮勢那奈  
登許波爾毛我母

【語釋】志良登保布といふことにつき、宮地春樹は、志良登は白砥で、新田山の名産だといひ、本居宣長はその説により、志良登保布を白砥掘るの意としてをる。自分の實地踏査するとこ

ろに據ると、今はこの附近には白砥を掘り出すところはない。しかし、この山は水成岩であるにもかゝらず、處々に白色硬質の火成岩の迸出してをるところから考へると、昔はこのあたりから白い砥石を掘り出したのであらうかと思はれる○毛流夜麻は山林を荒さないやうに人の守る山、末枯れは、梢の枯れること○勢那奈は、せずしての方言と見える。その用ひ方は、上に「新田山嶺には着かなな」とあると同じである。末枯れせななといつたのは、この山が全山松であるからであらう。

【口譯】新田山はいつも常緑で、梢の枯れるといふことがないが、吾等二人の仲も末かけて離れるといふことがないやうにありたい。

【後記】右の新田山について、今も次のやうな民謡がある。

わたしは太田の金山そだち

ほかにきはない松ばかり

右の三首は上野國の歌



三三七 美知乃久能 安太多良未由美 波自伎於伎氏 西良思馬伎那  
婆 都良波可馬可毛

【語釋】安太多良末由美は、安達太郎山に産する檀の木でつくつた弓である。この山中には今も檀の木が多い○弾きおきては、はづしおきての意○西良思馬は、そらしめること○絃はくは弦をつけることである。

【口譯】安太多良真弓も弦をはづして、そのまゝそらしておいては、再び弦を着けることがむづかしいが、吾々二人の仲もその通りで、餘り久しく離れてゐては、再びしつくりと合ふことがむづかしからう。

【後記】おもしろい譬喩である。久しく逢はない男の歌であらう。

右の一首は陸奥國の歌

### 雜歌

以下卷末まで百四十首は國名不明の歌である。

三三八 都武賀野爾 須受我於等伎許由 可牟思太乃 等能乃奈加知  
師 登我里須良思母

【語釋】都武賀野未詳○須受我於等、鈴は鷹の尾に着けた鈴である。仁徳紀にも百濟の酒の君が韋縹を以て小鈴を鷹の尾に着けたとある○思太は駿河國志太郡の地、上下に分れてゐたのであらう○殿は國の守介郡領などのこと○仲子は仲の子、しは助辭○登我里即ち鳥狩は鷹狩である。

【口譯】都武賀野の方からちん／＼と鳴るかはいらしい鈴の音が聞えて來る。鷹の尾につけた鈴の音らしい。多分あのおなつかしい上志太の殿様の中の若様が鷹狩にいらしたのであらう。



【後記】遠く聞える鈴の音に耳をそばだてて、ひそかに小さい胸を躍らせてゐる純なる田舎娘の歌であらう。第二句を字餘りにして、句を切り、先づ情景を點出し、第五句に於て鳥狩すらしもと推斷したところに、聲調の言ひ難い美しさがある。

成本歌曰 美都我野爾 又曰 和久胡思

【語釋】今志太郡朝比奈村字玉取の中に、三津野といふところがある。或本の歌にみつが野とあるのは、この地であらう。

三四三九

須受我禰乃 波由馬宇馬夜能 都追美井乃 美都乎多麻倍奈  
伊毛我多太手欲

【語釋】須受我禰乃は、鈴の音のする早馬といひかけたのであらう。○都追美井即ち堤井は、驛馬に與へるために、つゝみかこつた井である○伊毛我多太手欲は直接に婦人の手からとい

ふのである。

【口譯】驛のほとりにある堤井の水が如何にも甘さうである。それを一杯姐ネエさんの手から飲ませてもらひたい。

【後記】考に「其の地に住める若人が女の包井の水を汲むを見て、水の飲みたさにおまへの手からちきに下されとそばへいへるなり。」といつてをるのがおもしろい。

三四〇

許乃河泊爾 安佐奈安良布兒 奈禮毛安禮毛 余知乎曾母氏  
流 伊低兒多婆里爾

【語釋】よちは同じ年ごろの子をいふとする宣長の説がよいと思ふ○多婆里爾は、給ばりねといふに同じ。

【口譯】この河で朝菜を洗ふ婦人よ。そなたもわたしも同じ年頃の子がありますね。どうか、その娘さんをわたしのむすこのよめに下さらないでせうか。



【後記】娘をつれて河ばたで、朝早く茶を洗つてゐる婦人によみかけたのであらう。田舎の小川のほとりなどでよく見る風景である。

一云 麻之毛安禮母

【語釋】麻之は、汝の略。

三四二

麻等保久能 久毛爲爾見由流 伊毛我敝爾 伊都可伊多良武  
安由賣安我古麻

【語釋】問遠くは、程遠きこと。

【口譯】わが妻の家はずつと向ふに見えてゐながら、なか／＼行き着かれない。なぜこの馬はこんなのにのろいのであらうか。はやく歩いてくれよ。

【後記】高まりゆく感情が終りの一句に強く表現せられてをる。一の巻に見える人麿の歌に「青駒のあがきを早み雲井にぞ妹があたりを過ぎて來にける。」とあるのは正反對である。

柿本朝臣人麿歌集曰 等保久之氏 又曰 安由賣久路古麻

三四三

安豆麻治乃 手兒乃欲妣左賀 古要我禰氏 夜麻爾可禰牟毛  
夜杼里波奈之爾

【語釋】手兒の呼坂は駿河國庵原郡に在る。田兒浦の坂路であるから、蒲原驛の東に在る七難坂などの古名であらう。

【口譯】今日はひどく疲れて、この呼坂を越えかねるから、山中に野宿をしようか。難儀なこ  
とだ。

【後記】卷七に「志長鳥猪名野をくれば有間山夕霧たちぬ宿はなくして」とあると同趣の歌で



ある。これによつても交通の不便であつた昔がしのばれる。

三四三  
宇良毛奈久 和我由久美知爾 安乎夜宜乃 波里氏多氏禮婆  
物能毛比豆都母

【語釋】宇良毛奈久は、何心なくの意○波里氏は芽を張りてである。

【口譯】自分は何心なく道があるいてゐたのに、ふと道ばたに青柳の芽をはつてをるのを見て、わが家のことを思ひ出し、急になつかしくなつた。

【後記】路傍の柳によつて、わが家の柳を聯想したのであらう。

三四四  
伎波都久乃 乎加能久君美良 和禮都賣杼 故爾毛美多奈布  
西奈等都麻佐禰

【語釋】伎波都久の岡、仙覺抄には「常陸國眞壁郡に在り」とあるが、この附近は山岡が起伏して、その場處をたしかめ難い○久君美良は莖を賞美する莖の意であらう○美多奈布は、満たすの方言。

【口譯】わたしはこの伎波都久の岡に来て、莖蕈をつんでをるが、なか／＼籠にもみたないから、あなたの夫の君をさそつて来て、一緒に楽しくおつみなさい。

【後記】古義には「主の女と共に伎波都久の岡の莖蕈をつめどつめども、つひに籠に満つるばかり得つまず、夫の君と探みたまへよと侍婢などのいへるなるべし」といつてをる。

三四五  
美奈刀能也 安之我奈可那流 多麻古須氣 可利己和我西古  
等許乃做太思爾

【語釋】美奈刀能也の也は助詞。多麻古須氣の玉は美稱。做太思は隔の訛。

【口譯】あの湊の葦の中にある美しい小菅を刈つてお出でなさい。わが夫の君よ、床の上敷に



するために。

【後記】へだちは、今のへだてであるが、當時は四段に活用したのではあるまいか。

三四六

伊毛奈呂我 都可布河泊豆乃 佐佐良乎疑 安志等比登其等  
加多里與良斯毛

【語釋】伊毛奈呂の奈は親しむ詞、呂は助詞。佐左良乎疑は小さい萩の意。與良斯毛はよるらしいといふのである。

【口譯】わが妻の水を汲んでつかふ河の津即ち船着場の小さい萩と葦とが如何にも親しさうに靡きあつてゐるのが、何か一言いひよるやうに見える。

【後記】河邊に生ひた萩の風に靡くのを見てよんだので、自分もあの萩のやうに何か一言女に言ひよりたいといふのであらう。

三四七

久佐可氣乃 安弩奈由可武等 波里之美知 阿弩波由加受氏  
阿良久佐太知奴

【語釋】久佐可氣乃は弩にかゝる枕詞であらう○安弩は地名、弩も奈もともに野の意と思はれる。伊勢國に安濃郡がある。安弩は同郡安濃川に沿ひ、津に至る一帯の平野を指すのであるまいか。草蔭の阿弩といふ語は、倭姫世記に草蔭の阿野國とあるのと同じである。

【口譯】こゝはもと／＼安弩野を行かうと思つて、ひらいた道であるが、この頃は一向安弩を通らないので、荒草がはえてしまつた。

【後記】心がはりした女を怨んでよんだ男の歌であらう。

三四八

波奈知良布 己能牟加都乎乃 乎那能乎能 比自爾都久麻提  
伎美我與母賀母



【語釋】乎那は地名と見える。和名抄に遠江國磐田郡小各郷がある。こゝではあるまいか。各は名の誤であらう○乎那能乎は乎那の嶺○比自は海中の洲○伎美我與は君の齡である。

【口譯】あなたの御齡は花の散るこの向ひに見える乎那の嶺が崩潰して低くなり、海中の洲につくまでは、おかはりはありませんまい。

【後記】この歌は世にあり得べからざることを擧げて、人の長命を祝したのである。彼の「わが君は千代に八千代にさゞれ石の巖となりて苔のむすまで」といひ、「君が代は天の羽衣稀に來て撫づともつきぬ巖ならまし」といふ二つの歌に比し、遙に原始的である。

三四九

思路多倍乃 許呂母能素低乎 麻久良我欲 安麻許伎久見由  
奈美多都奈由米

【語釋】上の二句は序で、袖を枕にするといふのを眞久良我にかけたのである○眞は接頭語○久良我は大日本地名辭書に「今の下野國猿島郡中田の渡なるべし」といつてをる。よは、ゆ

に同じ。

【口譯】久良我の方から海人の舟を漕いで來るのが見える。浪よ、どうぞたつてくれるな。

【後記】戀人を待つ女の歌であらう。

三四〇

乎久佐乎等 乎具佐受家乎等 斯抱布禰乃 那良倣氏美禮婆  
乎具佐可知馬利

【語釋】乎久佐乎乎具佐受家乎、眞淵は乎久佐と乎具佐とを同一の地名とし、乎久佐壯子を上丁とし、乎具佐受家乎を助丁としてをる○斯抱布禰は、潮の上を漕ぐ舟であるが、多く漕ぎ並ぶものゆゑ、並ぶの枕詞としたのであらう。

【口譯】乎久佐壯子と乎具佐助丁とを並べて見ると、乎具佐の方がまさつてゐるやうである。

【後記】これは港町などに住む女が滞在中の正丁と助丁と言ひよられて詠んだのであらう。無邪氣に思ふまゝを言つてのけたところがおもしろい。



左奈都良能 乎可爾安波麻伎 可奈之伎我 古麻波多具等毛  
和波素登毛波自

【語釋】左奈都良能乎可、安房國安房郡館山の東に眞倉村といふのがある。さなつらの轉訛ではあるまいか。安房は粟の産地である○可奈之伎はかはい、男の意○多具は皇極紀なる童謡に「こめだにもたげてとほらせ」とあるたげの原形で、食ふことである○素登毛波自はそともおはじの約りで、そは馬を追ふ聲である。

【口譯】わたしは、あの左奈都良の岡に粟を蒔いてをる。かはい人が来れば、騎つて来た駒が粟をふくかも知れないが、わたくしはそれを追ふやうなことはいたしませんまい。

【後記】その人を愛するによつて、馬までがかはゆくなるのは自然の情である。

於毛思路伎 野乎婆奈夜吉會 布流久左爾 仁比久佐麻自利

於比波於布流我爾

【語釋】於比波於布流は、生ひ生ふるといふに同じい。我爾は爲にの意。

【口譯】このおもしろい野をば焼いてくれるな。去年の古い草にまじつて新しい草が生ひ、見どころが多くなるやうに。

【後記】この歌は、春の野に對する愛を述べたまでで、別に寓意はないやうに思はれる。

可是乃等能 登抱吉和伎母賀 吉西斯伎奴 多母登乃久太利  
麻欲比伎爾家利

【語釋】可是乃等は枕詞。風の音は遠く聞えるものであるから、遠きにかけたのである○多母登乃久太利は、袂の邊○麻欲比は紙で、絲の亂れること。卷七の「肩のまよひは誰かとり見む」、卷十一の「白妙の袖はまよひぬ」とある「まよひ」と同じである。



【口譯】遠いふる里を出るときに、妻の着せてくれたこの着物もいつのまにか、袂の下の絲が亂れかゝつて來たわい。

【後記】限りない望郷の情のこもつた歌である。防人の歌であらう。「ことしゆく新島守の麻ごるも肩のまよひはたれかとり見む」といふ卷七の歌とならべ味ふべき作。

三四五

爾波爾多都 安佐提古夫須麻 許余比太爾 都麻余之許西禰  
安佐提古夫須麻

【語釋】爾波爾多都は、庭に生ふる意の枕詞、麻にかゝる○安佐提は麻のたへの意、たへは布帛の總稱である○餘之許西禰は寄り來らしめよの意。

【口譯】麻でつくつた小さい衾よ、せめて今夜だけなりとも、わが夫をより來させてくれよ。

【後記】これは衾に對する女の獨言であらう。麻布小衾とくりかへし言つたのは、切なる思を力づくよく表現せむがためである。

## 相聞

目錄には未勘國相聞往來歌とある。

三四五

古非思家婆 伎麻世和我勢古 可伎都楊疑 宇禮都美可良思  
和禮多知麻多牟

【語釋】古非思家婆、戀しからばに同じい○可伎都楊疑は垣内柳で、垣の内に植ゑある柳○宇禮都美可良思は、末摘み枯らして、人を待つほどの手すさびである。

【口譯】わたしを戀しく思はれるならば、たづねていらつしやい。わたしは垣の内の柳の末をつむやうなふりをして立つて待つてをりませう。

【後記】卷十一にある「みちのべの草を冬野にふみからし、われたちまつと妹につげこそ」とあるに似た歌で、戀人を待つ田舎をとめのさまが、躍動して來る。



宇都世美能 夜蘇許登乃倣波 思家久等母 安良蘇比可禰氏  
安乎許登奈須那

【語釋】宇都世美は現身で、世間のことをいふ。○許登乃倣は言の葉の訛であらう。○許登奈須は言成すの意で、噂にたてられることをいふ。

【口譯】われ／＼二人の關係を、世間の人々がどんなに言ひさわいでも、それにいひまかされて、噂を成り立たせてはいけません。

宇知日佐須 美夜能和我世波 夜麻登女乃 比射麻久其登爾  
安乎和須良須奈

【語釋】宇和日佐須は宮の枕詞。

【口譯】宮づかへに出られたわが夫は、大和の女の膝を枕として寝るごとに、久しくなじみを重ねたわたしのことをお忘れ下さいますな。

【後記】契沖は「こは男の宮仕に都へ上りたる其の妻が歌なり」といつてをる。大和は誘惑の多いところとあきらめつゝ、尙自分を思ひ出してくれといったのが、如何にも可憐である。

奈勢能古夜 等里乃乎加耻志 奈可太乎禮 安乎禰思奈久與  
伊久豆君麻氏爾

【語釋】奈勢能古夜は汝兄の子よといふに同じい。○等里乃乎加、和名抄に常陸國鹿島郡下ツ島中ツ島上ツ島といふのが見える。その地の岡であらう。○奈可太乎禮は半ば撓み折れること。このあたりは、一帯の沙丘で、道路がその上を通じてをる。即ち岡道であるが、處々中断するところのあるのを半折といつたのであらう。○安乎禰思奈久與は聲をあげて吾を泣かせるよの意。上に妹が名よびて吾をねし泣くよとあるに同じい。



【口譯】わが夫よ。そなたは鳥の岡道の中斷してゐるやうに、中絶して見えないので、溜息を  
ついてわたしは泣いてをりますよ。

【後記】男の夜がれを恨んだ女の歌である。

〇三四五  
伊禰都氣波 可加流安我手乎 許余比毛可 等能乃和久胡我  
等里氏奈氣可武

【語釋】伊禰都氣波は、手杵で稻をつくのである。古は米を舂くのは女のわざであつたと見え  
る。○可加流はあかぎれの切れること。○等能乃和久胡は國の守介郡領などの息子即ちおやしき  
の若旦那である。

【口譯】毎日稻をつくので、あかぎれのきれたわたしの手をとつて、今夜もみえるおやしきの  
若旦那が溜息をつかれるであらうが、耻しいことである。

【後記】純眞なる田舎娘の生活のありのまゝに現れたあはれの深い作である。古義には「吾が

手づから稻舂など甚だ荒き業をして、手の圻裂けたるをみづから打見て、かくいときたなき  
我が手を今夜も來まさむ殿の稚子の取り見たまひて、かゝる業をなせることを、あはれ〜  
となげき給はむが、さても耻しき事よとなるべし」といつてをる。

三四六  
多禮會許能 屋能戸於會夫流 爾布奈未爾 和家世乎夜里氏  
伊波布許能戸乎

【語釋】於會夫流は押し振ること、古事記八千矛神の御歌に「をよめなすや板戸をおそぶら  
ひ」とあるに同じ。○爾布奈未は新嘗である。昔は其の村の里長の家に、里民が集まり、新穀  
をもつて神を祭つたものと見える。○伊波布は齋はふで、穢に觸れないやうにいみつゝしむこ  
と。

【口譯】誰ですか、この家の戸をがたくゆすぶるのは、村の新嘗にわが夫をやつて、いはひ  
つゝしんでをるのに。



【後記】新嘗の祭に夫の出でいつた留守をねらつて、男のうかゞひ来て、戸を開かうとするのを咎めた女の歌である。

三四二  
安是登伊敝可 佐宿爾安波奈久爾 眞日久禮氏 與比奈波許  
奈爾 安家奴思太久流

【語釋】安是登伊敝可は何といふことかの意○佐宿爾は本當にといふに同じ○與比奈は夜にの訛○安家奴は明けぬるの意。明けぬるといはずして、明けぬといつたのは、古語の格である○來なには來ないでの意○思太は時である。

【口譯】何といふことか、本當にゆつくり逢ふことも出來ないのに日の暮れたばかりのよひのまにはやく來ないで、いつもく夜が明けてしまつてから來ることよ。

【後記】男の來ることの遅いのを怨んだ女の歌である。

三四三  
安志比奇乃 夜末佐波妣登乃 比登佐波爾 麻奈登伊布兒我  
安夜爾可奈思佐

【語釋】夜末佐波妣登は、山中の谷まにすむ人の意で、佐波は谷のこと○上の二句は多にといはむ爲の序である○麻奈は愛らしいこと。

【口譯】世の中の多くの人々が、彼の娘はかはいい娘だといふが、いかにも彼の娘がむしやうにかはゆい。

三四三  
麻等保久能 野爾毛安波奈牟 己許呂奈久 佐刀乃美奈可爾  
安敝流世奈可母

【語釋】己許呂奈久は無情にももの意○美奈可まん中である。

【口譯】わたくしは人目をしのび、遠く人里をはなれた野であの人に逢ひたいと思つてゐたの



に、今日は無情にも人目の多い里のまん中で逢つて、しみじみと話をすることも出来なかつた。

【後記】上に「上野の乎度の多籽里が川ぢにも兒等は逢はなもひとりのみして。」とあると同趣の歌である。

三四六

比登其等乃 之氣吉爾余里氏 麻乎其母能 於夜自麻久良波  
和波麻可自夜毛

【語釋】麻乎は接頭語、眞小の意○麻乎其母能麻久良は、薦を以て作つた枕である○於夜自は  
おなじの訛。

【口譯】このやうに契りかはした上は、世間の人の口がうるさいといつても、同じ薦枕をして  
寝ないといふことが出来ようか。

三四五

巨麻爾思吉 比毛登伎佐氣氏 奴流我倍爾 安籽世呂登可母  
安夜爾可奈之伎

【語釋】巨麻錦は高麗から來た錦で、當時多く紐として用ひたので、紐の枕詞としたのであら  
う○安籽世呂登可は何とせよといふのかの意。今の關東語の如く、動詞の命令形にるといふ  
音を添へることは、この時代から行はれてゐたものと見える。

【口譯】このやうに紐を解き放して、快く寝てゐるのにまだこの上にどうしろといふのであら  
うか。このやうにむしろやうにかはいゝのは。

【後記】契沖は「もろともにこころとけて寝るがうへにも猶あかぬ心の切なるを自らあやし  
み  
て、よめるなり」といつてをる。上に「上野安蘇のまそむらかきむだき寝れど、あかぬをあ  
どか吾がせむ」とあるのに似た情熱的の歌で、あどせろの一語に男の溜息をきくやうなこゝ  
ちがする。



三四六 麻可奈思美 奴禮婆許登爾豆 佐禰奈伎波 己許呂乃緒呂爾  
能里氏可奈思母

【語釋】麻可奈思美は、ま愛しみの意で、まは接頭語○佐禰奈伎波は、寝ざればの意○緒呂の呂は助詞。心の緒ろに乗るは、心にかゝつて忘れかねること。卷二にも、「妹がこゝろに乗りけるかも」と見えてをる。

【口譯】餘りのかはゆさに、一しよに寝れば、人の口にひきわがれる。さりとして寝なければ女の姿が心にかゝつてかはゆさに堪へられない。

【後記】戀のなやみを歌つたものである。

三四七 於久夜麻能 眞木乃伊多度乎 等杼登之氏 和我比良可武爾  
伊利伎氏奈左禰

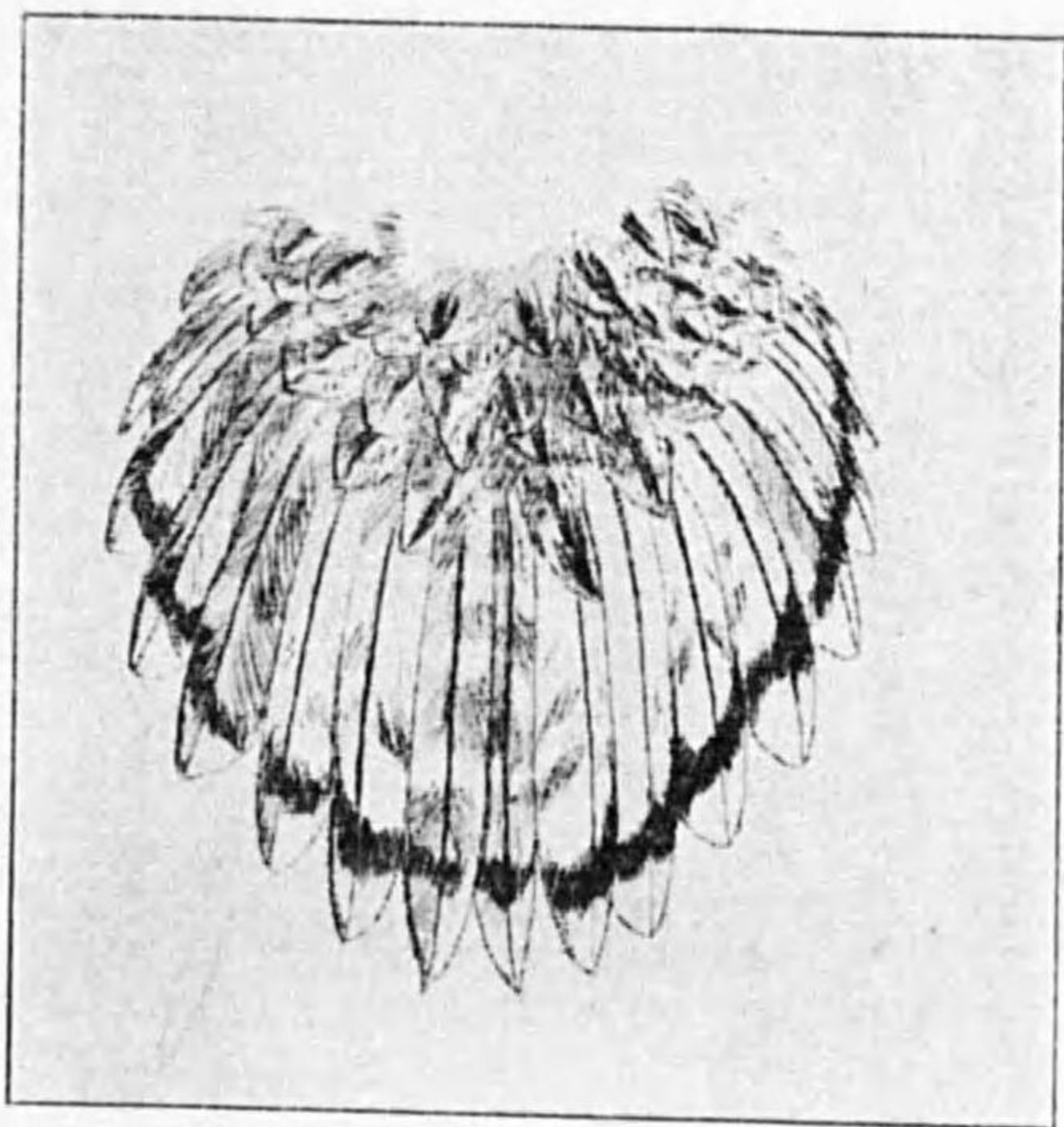
【語釋】於久夜麻能は奥山に生えてゐるの意で、眞木までにかゝる語である。等杼登之氏の等杼は板戸の鳴る音○伊利伎氏奈左禰は入り来て寐ねである。

【口譯】あなたが見えましたら、わたくしが内から、櫛の戸をがたくといはせて開きますから、その音にまぎれてはいつておやすみなさいませ。

三四八 夜麻杼里乃 乎呂能波都乎爾 可賀美可家 刀奈布倍美許會  
奈爾與會利雞米

【語釋】夜麻杼里乃乎呂能波都乎爾可賀美可家は、山鳥の尾ろの秀つ尾に鏡かけで、となふといはむ爲の序○波都乎は、契沖は「秀ツ尾にて最も長き尾なり」といつてをる○山鳥の雌の尾羽の先端には白色の斑紋があり、尾を開くと、ちやうど鏡をかけたやうに見える。これを東國の人は山鳥が尾に鏡をかけて、雄を誘ふのであると考へたのであらう○刀奈布はとらふの訛○與會利は言ひよることである。





山鳥の雌の尾

【口譯】あの女は山鳥の雌が尾に鏡をかけて、雄を誘ふやうに、おまへの心をとらへ得ようかと思つて、盛装をして、言ひよつたのであらう。

【後記】里の女の、若い男に言ひよるのを見て、他の男の戯によみかけたものであらう。

三六九  
由布氣爾毛 許余比登乃良路  
與斯呂伎麻左奴

和賀西奈波 阿是曾母許與比

【語釋】由布氣は夕占で、夕方に辻などに立つて、吉凶の占をすること○乃良路は告れるの訛

○阿是曾は何ぞぞ、與斯呂は依そりである。

【口譯】夕占を試してみたが、その夕占にも今夜は夫が来るとあつたのに、どうしてあの人は今にたづねて来ないのであらうか。

【後記】逢瀬をたのしんでゐた女の歌である。

三四七〇  
安比見氏波 千等世夜伊奴流 伊奈乎加母 安禮也思加毛布  
伎美末知我氏爾

【語釋】乎加毛は然らむやの意、東國の方言であらう。上の常陸歌にも「筑波嶺に雪かもふるいなをかも」と見えてをる○末知我氏爾は待ちあへずの意。

【口譯】この前に逢つてからは、はや千年もたつたのであらうか。いやさういふことはあるまい、それでも自分はそのやうな心ちがする、君を待ちあへず。



【後記】千年や去ぬるといひ、否をかもといひ、我やしか思ふといふ曲折ある詞の中に、ちゞに心を碎く女の心情がよく現れてゐる。この歌はやく十一の巻にも出てゐるが、四の巻に「このごろは千歳やゆきもすぎぬると吾や然念ふ見まくほりかも」とあるのに似てをる。

柿本朝臣人麻呂歌集出也

三四七  
思麻良久波 禰都追母安良牟乎 伊米能末爾 母登奈見要都  
追 安乎禰思奈久流

【語釋】母登奈はあやにくの意○安乎禰思奈久流は吾を音に泣かしむるといふに同じい。

【口譯】自分は暫くの間も安らかに寝入りたいと思ふのに、あやにく愛人の姿がたえず夢に見えて、またしても自分を泣かせることである。

三四七  
比登豆麻等 安是可會乎伊波牟 志可良婆加 刀奈里乃伎奴  
乎 可里氏伎奈波毛

【語釋】安是可會乎伊波牟、何故かそれを言はむの意○伎奈波毛は着なはむの訛。着なはは、着なふといふ語が未然形に活用したので、着ざらむといふに同じ。

【口譯】あの女は他人の妻だからといつて、あきらめることが出来ようか。それならば、寒いときにも隣の人の衣を借りて着ることも出来ないはずであるが、やはり寒いときには、人の衣をかりて着るではないか。さすれば、そのまゝにやむことは出来ない。さてもかはゆい他妻よ。

【後記】他人の妻に想をかけた男の煩悶であらう。巧に理窟をこね上げたところがおもしろい。卷四に「榊にも手は觸るとふをうつたへに人妻といへばふれぬものかも」とあるのはこの類歌である。



左努夜麻爾 宇都也乎能登乃 等抱可騰母 禰毛等可兒呂賀  
於由爾美要都留

【語釋】佐努は上野の佐野であらう○宇都は木を伐ること○乎能登は斧のおと○上の二句は、遠かどもといはむ爲の序。樵夫の木を伐る音の遠く聞えてをるのを取り出して遠いといふ語にかけたのである。遠かどもは遠かれどもの略○於由は於母即ち面の誤であらう。

【口譯】妻の家とは遠く離れてはゐるが、一しよに寝ようといふ妻の心が通ふためであらうか。面影に見えた。うれしいことである。

宇惠多氣能 毛登佐倍登與美 伊低氏伊奈婆 伊豆思牟伎氏  
可伊毛我奈藝可牟

【語釋】宇惠多氣能は殖竹ので、響みといはむための序、殖竹は地にはえてゐる竹○毛登佐倍は、末はいふに及ばず本までもの意○登與美は、見送りの人などの多く立ちさわぐことをいふのであらう。眞淵は「こは家こぞりて、ね泣きさわぐを強くいふなり」といつてをる○伊豆思牟伎氏可は何方向きかで、途方にくれることをいふ。

【口譯】自分が多くの人々に見送られて、この家を出ていつしてまつたならば、後に残つた妻は途方にくれて嘆くことであらう。

【後記】防人になつて出で立たうとする時の歌であらう。上の駿河歌に「霞ゐる富士の山びにわが來なばいづち向きてか妹が嘆かむ」とあるのに似てゐる。

古非都追母 乎良牟等須禮杼 遊布麻夜萬 可久禮之伎美乎  
於母比可禰都母

【語釋】遊布麻夜間は、所在不明。



【口譯】戀しく思ひつゝも堪へしのんでをらうとするけれども、遊布麻山にかくれて旅立たれた當時の光景が今も目の前にちらついて忍びがたい。

【後記】遠く旅立つた夫を思つてよんだ女の歌である。十二の巻に「よしゑやし戀ひじとすれど木綿間山越えにし公が念ほゆらくに」とあると同じ歌であらう。木綿間山隠れしは、木綿間山に隠れし之意。常陸歌に「妹が門いやとほぞきぬつくば山隠れぬほどに袖はふりてな」とあると同格である。

三〇七六  
宇倍兒奈波 和奴爾故布奈毛 多刀都久能 奴賀奈倣由家婆  
故布思可流奈母

【語釋】宇倍兒奈波は、諾兒汝は○故布奈毛は戀ふらむの訛○和奴は吾にも同じ、多刀都久は立つ月の訛○奴賀奈倣は流らへの訛である。

【口譯】このやうに久しくわかれてゐれば、そなたが自分に戀ひるといふのも尤である。月日

の流れゆかば戀しいことであらう。

【後記】眞淵は「こは妹が文などを見て、うべさぞあるべきといふならむ」といつてをるが、如何にも適切なる批評である。

或本歌末句曰 努我奈倣由家村 和奴賀由乃倣波

【語釋】由乃倣波は、略解にいつてをる通り、由の下に可賀などの文字をおとしたのであらう。由可乃倣は、ゆかなへといふに同じく、吾が歸りゆかざればの意であらう。

三〇七七  
安都麻道乃 手兒乃欲婢佐可 古要低伊奈婆 安禮婆古非牟  
奈 能知波安比奴登母

【語釋】手兒乃欲婢佐可は上の駿河歌の條に説明しておいた通りである○古非牟奈の奈は咏嘆の辭。



【口譯】あの東道の手兒の呼坂を越えて、わが家も見えなくなつてしまつたならば、たとひ後には逢はれるとしても、自分はそなたを戀しく思ふであらう。

【後記】卷十二に、「雲のなる海山こえていゆきなば、われはこひなむ後はあひぬとも」とあるのに似た歌である。

三六  
等保斯等布 故奈乃思良禰爾 阿抱思太毛 安波乃傲思太毛  
奈爾己曾與佐禮

【語釋】等保斯等布は、遠しといふに同じい○故奈乃思良禰、古義には「か」といつてをる。古奈といふ地は伊豆國田方郡に在るが、白峰といふ地は見當らない○阿抱思太は逢ふ時、安波乃傲思太は逢はざる時○與佐禮はよその訛で、心をよせることであらう。

【口譯】遠いといふ故奈の白峯は、お天氣の模様で見える日もあり、見えない日もあるが自分

の心はいつも／＼そなたによりそうてゐるのである。

【後記】故奈のあたりに住む男によせた女の歌であらう。

三七  
安可見夜麻 久左禰可利會氣 安波順賀徹 安良蘇布伊毛之  
安夜爾可奈之毛

下野國安蘇郡に赤見村といふのがある。新考にはこの地の山であらうかといつてをる○安波須賀倍は逢ひ給ふが上にの意○安良蘇布は、さやうのことはないといつて争ふのである○安夜爾は誠にの意。

【口譯】安可見山の草を刈りはらつて、しのび逢つてくれた上に、他人に對しては、さやうのことはないといつて争ふ女の心深さが思はれて、むしやうにかはいい。



於保伎美乃 美己等可思古美 可奈之伊毛我 多麻久良波奈  
禮 欲太知伎努可母

【語釋】欲太知は、兵役に服すること、契沖は「えだち來ぬるかもなり。徭役の字をかける其の義なり」といつてをる。よだちは役立ちの訛であらう。

【口譯】勅命を奉じて、いとしい妻の手枕をはなれ、兵役に來たのである。

【後記】愛し妹といひ、手枕離れといふ中に堪へ難い心の淋しさが見える。防人の歌であらう。

安利伎奴乃 佐惠佐惠之豆美 伊敝能伊母爾 毛乃伊波受伎  
爾氏 於毛比具流之母

【語釋】安利伎奴乃はさゝ／＼の枕詞。ありぎぬといふ語については、いろ／＼の説があるが、玉勝間六に「ありぎぬは鮮なる衣なり」とあるのがおもしろく思はれる。さゝ／＼は衣ずれの音であらう○之豆美は鎮まりの約り。

【口譯】名残を惜しむ家の人のさわぎがやう／＼しづまるのを待ち、妻とゆつくり話をすまもなく出て來たので心苦しい。

【後記】遠く別れゆく人の心情を寫して眞に迫つてゐる。これも防人の歌であらう。卷二十に「水鳥のたちのいそぎに父母に物はずけにて今ぞくやしき」とあると同じ趣である。

柿本朝臣人麻呂歌集中出見上已記也

上とは四の卷に「あり衣のさゝ／＼しづみ家の妹に物言はず來て思ひかねつも」とあるのを指す。



可良許呂毛 須蘇乃宇知可倍 安波禰杼毛 家思吉己許呂乎  
安我毛波奈久爾

【語釋】可良許呂毛は唐衣即ち唐制の衣で、禰のうち交のあふものであるから、あはまでにかけて序としたといふ新考の説がおもしろい。古來の學者があはねどもまでにかゝるやうに考へてゐたのは誤である。卷十一に「朝影に吾が身はなりぬ辛衣禰のあはずて久しくなれば」とあるのも同様である。

【口譯】この頃は障ることがあつて逢ふことが出来ないが、わたしには別の心はないのに。

【後記】なぜこのやうに疑はれるのであらうかといふ餘意を含んでをる。男の歌であらう。

成本歌曰 可良己呂母 須素能宇知加比 阿波奈敝婆 禰敝奈乃可良爾 許等多可利都母

【語釋】阿波奈敝婆は、逢はざればの意○禰奈敝乃可良爾は、寝ないのの意○許等多可利は

言痛かりで、人の口のやかましいこと。

比流等家波 等家奈敝比毛乃 和賀西奈爾 阿比與流等可毛  
欲流等家也須家

【語釋】等家奈敝は、解けぬといふに同じ。なへは、なふといふ語の連體形○等家也須家は解けやすきの訛。

【口譯】晝の間には、どうしても解けなかつた紐の、今夜このやうに解けやすいのは、わが夫に依りそふことの出来るといふ前兆であらうか。うれしいことである。

【後記】鼻ひたり、紐のとけたりするのを、相見むとする前兆とするのは、當時の俗信である。

安左乎良乎 遠家爾布須左爾 宇麻受登毛 安須伎西佐米也



伊射西乎騰許爾

【語釋】安左乎は麻の莖の纖維から採つた絲○良は助詞○遠筒は麻筒で、麻を容れる器○伎西佐米也は、來ざらむやといふに同じ。

【口譯】そんなにたくさんに麻絲を麻筒にうみ入れなくても、明日の日もあるではないか。さあ早く床にはいつて寝ることにしよう。

【後記】夜業にいそむ女の傍に來て、よみかけた男の歌であらう。農家の情景が目前に浮ぶやうな心ちがする。

三〇五  
都流伎多知 身爾素布伊母乎 等里見我禰 哭乎會奈伎都流  
手兒爾安良奈久爾

【語釋】都流伎多知は劍太刀で、身の枕詞○等里見我禰の等里は接頭語

【口譯】自分は今からいよ／＼出發することゝなつたが、出發をしまへば、これまで常に傍を離れない妻を見ることが出來なくなるので、小さい子供のやうに聲をあげて、泣きだした。

【後記】防人の歌であらう。

三〇六  
可奈思伊毛乎 由豆加奈倍麻伎 母許呂乎乃 許登等思伊波  
婆 伊夜可多麻斯爾

【語釋】由豆加奈倍麻伎は、弓束に合へまきの約まりで、弓束に合せまくこと。母許呂乎は如己男で、己と同輩なる男をいふ。この歌は三四初二五と句の順序をかへて見るべきである。

【口譯】若しこれが同輩の争であるならば、いとしい妻を弓束に合せまいて、決闘をもすべきであるが、戀といふ強敵に對しては攻め伏すべき力もつき、何ともいたし方がない。

【後記】防人の歌に「おきていかば妹はまがなし持ちてゆく梓の弓のゆづかにもがな」とある



歌が聯想される。

三〇七  
安豆左由美 須惠爾多麻末吉 可久須酒會 宿奈莫那里爾思  
於久乎可奴加奴

【語釋】可久須酒會はかくしつゝの意。三五六四の歌に「浦ふく風のあどすすか」とあるに同じい。○宿奈莫那里爾思は、宿すなりにしといふに同じい。

【口譯】梓弓の末に玉をまいて飾とし、いたづらにしまつておく如く、とかくしつゝ、餘りに將來のことを慮りすぎて、却て宿ることが出来ないやうになつた。

三〇八  
於布之毛等 許乃母登夜麻乃 麻之波爾毛 能良奴伊毛我名  
可多爾伊氏牟可母

【語釋】於布之毛等は、生ふる弱木で、弱木のもとといふ音をくりかへして、本山とつゞけたのであらうが、この一句は猶考究の餘地がある。○母登夜麻は、山の名であらう。但し所在不明。○麻之波爾毛は、しば／＼といふに同じい。下にも「ましばにもえがたきかげをおきやらさむ」とある。上の三句は類音をくりかへして眞柴にもといはむための序としたのである。

【口譯】私はめつたに口に出さない妹の名であるが、占にかけられたならば、卜兆に出るであらうか。氣づかほしいことよ。

【後記】武藏歌に「むさし野にうらへかたやき、まさでにもらぬ君が名うらにいでにけり」とあるのに似た歌である。

三〇九  
安豆左由美 欲良能夜麻邊能 之牙可久爾 伊毛呂乎多氏天  
左禰度波良布母

【語釋】安豆左由美は、よらにかゝる枕詞。○欲良能夜麻、信濃國佐久郡小諸町に興良町があ



る。この地の山であらう。之牙可久爾は、繁けくにの訛○伊毛呂の呂は助詞○左禰の左は接頭語である。

口譯

【語釋】欲良の山べは、木が繁く、人目をさけるによいから、しばらく妹を立たせておいて、塵芥などを拂ひ、寢處をつくることにしよう。

【後記】新考の説の如く、山邊に女をつれゆいて寢ようとする趣であらう。さ寢所拂ふは、卷十一に「眞袖もて來て床うち拂ひ君まつとをりし間に月傾きぬ」とあると同じである。

三四九〇

安都佐由美 須惠波余里禰牟 麻左可許會 比等目乎於保美  
奈乎波思爾於家禮

【語釋】安都佐由美は、末にかゝる枕詞○麻左可は、現在○波思爾於家は、どちらつかずにしておくこと。上にも「はしなる兒らしあやにかなしも」とある。

【口譯】人目をはゞかるゆゑに、現在はそなたを中途半ばにしてをるが、行く末は相依つて寢

よう。

【後記】前に「新田山ねにはつかなな吾に依そりはしなる兒らしあやにかなしも」とある類歌である。

柿本朝臣人麻呂歌集出也

三四九一

楊奈疑許會 伎禮婆伴要須禮 余能比等乃 古非爾思奈武乎  
伊可爾余世等會

【語釋】伴要須禮は生ゆれに同じい○餘能比等は自分のことをいふのであるといふ眞淵の説がよろしい。

【口譯】楊ならば、伐つても又あとから生えもするが、自分が戀死をしたら、取りかへしがつかないではないか。全體どうしろといふのであるか。



【後記】上の二句は、卷七に「あられ降り遠つあふみの余跡川楊刈れどまた生ふてふ余跡川楊」とあるのに似てをる。戀死をするといふことを以て相手を脅迫するのは古來の慣用手段と見える。

三九二 乎夜麻田乃 伊氣能都追美爾 左須楊奈疑 奈里毛奈良受毛  
奈等布多里波母

【語釋】上の三句は、成りといはむための序○成るとは楊のついて生ひたつのをいふ○乎夜麻田は山田といふに同じ。

【口譯】この結婚は成り立つにしても、成り立たないにしても、われ／＼二人の中はいつまでもかはることはあるまい。

【後記】古今集の東歌に「おふのうらに片枝さしおほひ成る梨の成りも成らずも宿てかたらはむ」とあるのに似た歌であるが、このなりといふ語を生業の意と見る説もある。

三九三 於曾波夜母 奈乎許曾麻多賣 牟可都乎能 四比乃故夜提能  
安比波多家波自

【語釋】牟可都乎は、向ひにある峯○故夜提は小枝の訛○四比乃故夜提能は、逢ひたげはかかる語である。椎の小枝は、多くうち茂つて、錯綜するものであるから、逢ひたげはにかけたのであらう。

【口譯】おそかれ、はやかれ、今日はまちがひなく、逢ひたいと思ふ。

【後記】物陰などで、女の來るのを待つ男の歌であらう。

或本歌曰 於曾波也母 伎美乎思麻多武 牟可都乎能 思比乃佐要太能 登吉波須具登母

三四四 兒毛知夜麻 和可加徹流氏能 毛美都麻氏 宿毛等  
和波毛布



汝波安杼可毛布

【語釋】 兒毛知夜麻は、上野國群馬郡にある舊火山で、白井の北嶺である○毛美都は、紅葉づるといふを、四段にはたらかせたのである。宿毛は、宿むに同じ。

【口譯】 あの兒毛知山の若楓が芽をふいたが、あれが紅葉するまで、いつまでもかうして御前と寝てをりたいと思ふが、お前はどう思ふか。

【後記】 夫婦の睦言で、表現が如何にも直接である。

三九五 伊波保呂乃 蘇比能可麻都 可藝里登也 伎美我伎麻左奴  
宇良毛等奈久毛

【語釋】 伊波保呂は、伊香保呂の訛であらう○蘇比は山に沿ひたる地○上の二句は序で、若松を待つことのかぎりに言ひかけたのであらう。

【口譯】 自分はいく夜も待ちこがれたのであるが、もはやこれが限りであらうか。今夜も見えない。心もとないことである。

【後記】 男を待ちわびた女の歌である。

三九六 多知婆奈乃 古婆乃波奈里我 於毛布奈牟 已許呂宇都久志  
伊氏安禮波伊可奈

【語釋】 多知婆奈乃古婆、武藏國に檜樹郡がある。古婆はこの地の小字であらう○波奈里は、童艸放で、まだ振分髪ウナマナシの少女をいふ○於毛布奈牟は、思ふらむの訛○伊可奈は、行かむに同じい。

【口譯】 あの橋の古婆のはなりが、自分をこがれてゐるであらう。その心がいとしいから、さあはやく行つて逢つてやらう。



三九七 可波加美能 禰自路多可我夜 安也爾阿夜爾 左宿左寐氏許  
會 己登爾氏爾思可

140

【語釋】可波加美は河のほとり○禰自路多可我夜は、水に洗はれて、根の白く見える、たけの  
高い萱○上の二句は、あやに／＼といはむための序。かやをあやに言ひかけたのであらう。  
安也爾阿夜爾はほんたうにの意、語勢を強める副詞である。

【口譯】ほんたうに自分は重ね／＼て寝たために、つひに人の口にかゝるやうになつた。

三九八 宇奈波良乃 根夜波良古須氣 安麻多阿禮婆 伎美波和須良  
酒 和禮和須流禮夜

【語釋】宇奈波良は、海際の意であらう○根夜波良古須氣は、根のやはらかな小菅で、女に譬

へたのである○和須良酒は、忘るの敬語。

【口譯】海邊の根のやはらかな小菅のやうななやかな美しい婦人が他にたくさんあるので、  
あなたはお忘れになるのであります。わたくしは、あなたを忘れは致しません。

【後記】女を譬に譬へたのは、卷三の大家持の歌に「奥山の石本菅を根深めて結びし心忘れ  
かねつも」とあるに同じである。舟人の妻の歌であらう。

三九九 乎可爾與世 和我可流加夜能 佐禰加夜能 麻許等奈其夜波  
禰呂等敝奈香母

【語釋】乎可爾與世は、岡にて引きよする意。佐禰加夜はなえやはらかな萱○奈其夜波は、な  
ごやかにはの意。なごやといふ語は、卷四に「むしぶすまなごやが下に臥したれども妹とし  
ねねば肌しきむしも」とあるに同じく、はやく古事記に見えた語である。禰呂は寝よの訛○  
等敝奈香母は、といはぬかもの訛○上の三句は、寝といはむための序である。

141





草 き さ ら む

【口譯】女のほんたうに落ちついて寝よといはないのはどういふわけであるか。  
【後記】新考に「女の逢ひながら憚る所ありて、おちつきて相寝よといはぬをあかず思へる趣ならむ」とあるのがおもしろく思はれる。

牟良佐伎波 根乎可母乎布流  
比等乃兒能 宇良我奈之家乎  
彌乎遠做奈久爾

【語釋】根乎可母乎布流は、根を竟ふるかもの意で、染料として根を用ひつくすことをいふ○可母の母は助辭、可母はやはの意ではない。宇良我奈之は、心にかはゆく思ふこと。

安波乎呂能 乎呂田爾於波流



る し む る ひ

【口譯】紫草は根をも用ひ竟へるといふのに、彼のかはゆい娘の自分と寝竟へないのが恨めし

多波美豆良 比可波奴流奴留  
安乎許等奈多延

【語釋】安波乎呂、和名抄に常陸國那珂郡阿波郷がある。今の峠村澤山村岩船村に當つてをる。この地の岡であらう○多波美豆良は、ひるむしろ（眼子菜）のこと○上の三句は、引かばぬる／＼といはむが爲の序である○許等奈多延は、たよりを絶たないやうにせよとの意。



【口譯】自分がそなたを引くならば、すなほにより来て、たよりを絶たないやうにありたい。  
【後記】前の「あづまぢのおほやが原のいはぬづら引かばぬる／＼わにな絶えそね」「上つけぬかほやが沼のいはぬづら引かばぬれつゝあをなたえそね」の類歌である。

三五〇二

和我目豆麻 比等波左久禮杼 安佐我保能 等思佐倍己其登  
和波佐可流我倍

【語釋】目豆麻は、めづる妻の意であらう○安佐我保能は、朝顔の花の如き意で、我が目妻にかゝる語○己其登はこゝだといふに同じく、年さへこごとは、年も久しくいつまでもの意である○佐可流我倍は、放るかはの東語。

【口譯】朝顔の花の如き、吾が愛する妻は、人が引きはなさうとしても、いつまでも、いつまでも、自分は離れることをしない。

【後記】「上野の佐野の舟橋とりはなし親はさくれどわはさかるがへ」とある類歌である。

三五〇三

安齊可我多 志保悲乃由多爾 於毛徹良婆 宇家良我波奈乃  
伊呂爾氏米也母

【語釋】安齊可我多、所在不明。新考の説に従ひ、あさかがたと訓むことにしたい。うけらが花をよみ合せてをるから、武藏國人の歌ではあるまいか。歌を七つ隔てゝ下に橘郡の歌もある○由多爾は、潮のさし來る際のさわがしいのに對して、しづかなる潮干のさまを取り出して、心しづかに氣長くの意に用ひたのであらう○宇家良我波奈乃は、色にかゝる語ではなく色に出めやもまでにかゝつてゐる。

【口譯】安齊可瀉の潮干の靜かなやうに氣長く思ふならば、うけらが花の色に出ないやうに顔色には出さなかつたであらう。

【後記】眼前の景によつてよんだものであらう。



三五〇四 波流徹左久 布治能宇良葉乃 宇良夜須爾 左奴流夜會奈伎  
兒呂乎之毛倍婆

146

【語釋】左久は末葉のさし出るのをいふ○上の二句は、うらといはむための序○宇良夜須爾は心安くての意。

【口譯】自分は彼の女を絶えず思ひこがれてゐるために、夜も心安くうちとけて寝ることが出来ない。

【後記】後撰集に「春日さす藤のうら葉のうらとけて君しおもはゞ我もたのまむ」はこの歌から取つたのであらう。

三五〇五 宇知比佐都 美夜能瀬河泊能 可保婆奈能 孤悲天香眠良武  
伎會母許余比毛

【語釋】宇知比佐都は、うち日さすの訛で、宮の枕詞○美夜能瀬河泊は、所在不明○可保婆奈は、ひるがほである。ひるがほの夜しほむのを寝にかけたのであらう○上の三句は寢といはむための序である。

【口譯】彼の娘は自分を待ちわびて、昨夜も今夜も戀ひつゝねることであらう。

三五〇六 爾比牟路能 許騰伎爾伊多禮婆 波太須酒伎 穗爾氏之伎美  
我 見延奴己能許呂

【語釋】許騰伎爾伊多禮婆、契沖は「豎時に到ればなり」といつてをる。新室のとつゞけたのは、古義に「今の山里などにて多く蠶養ふ處には新にその室を構ふるなり」といつてをるがおもしろい○穗爾氏は、心の中に含んでゐたことを色に現すをいふ○波太須酒伎は、穗にかゝる枕詞。

【口譯】新しい室を建て、養蠶をするときになつたので、忙しいと見えて、これまで、互に相

147



思ふ心を明してうちとけてゐた君がこの頃見えなないのが淋しい。

【後記】養蠶はもとくゝ女のするわざであるが、養蠶時に到れば、男も女もともくゝに手傳ふのが常である。

【附記】このこときといふ語を、ことほぎの略とし、新築落成のことほぎと見る説もある。

三五七  
多爾世婆美 禰年爾波比多流 多麻可豆良 多延武能己許呂  
和我母波奈久爾

【語釋】上の句は、絶えといはむための序〇多爾世婆美は、谷が狭いゆゑにの意〇多麻可豆良は、蔓草の總稱。玉は美稱である。

【口譯】谷の狭いために、蔓ひ餘つて、峯まで蔓ひ上つた玉蔓の絶えないやうに、たえようと  
いふ心は、更にないのに、このやうに疑はれるのは、どういふわけであらうか。

【後記】伊勢物語に「谷せばみ峯まで蔓へる玉蔓絶えむと人に吾思はなくに」とあるのは、こ

の歌を少し取りかへたのであらう。

三五八  
芝付之 御宇良佐伎奈流 根都古具佐 安比見受安良婆 安  
禮古非米夜母



おきな草

【語釋】御宇良佐伎奈流根都古具佐、中山巖水は、陸奥國鹽竈の祠官藤塚知明の語を引き、「彼の國富山の麓の海に出でたる崎を三浦崎といひ、そのあたりにて、白頭翁をねこ草といふ」といつてをる。白頭翁は、毛茛科に屬する草本で、山野に多く、莖の高さ五寸乃至一尺、四五月の頃六片より成る一花を傾下する。

花後雌蕊の先端に残る變形物は恰も老翁が銀髪を被れるに似てをる。



【口譯】彼の三浦崎にある根都古草のやうな美しい女を初から見なかつたならば、こんなに自分  
分は戀ひるといふことはなかつたであらうに。

【後記】「相見ての後の心に比ぶれば、昔は物を思はざりけり」といふに似た歌である。

三五〇九 多<sup>タ</sup>久<sup>ク</sup>夫<sup>フ</sup>須<sup>ス</sup>麻<sup>マ</sup> 之<sup>シ</sup>良<sup>ラ</sup>夜<sup>ヤ</sup>麻<sup>マ</sup>可<sup>カ</sup>是<sup>ゼ</sup>能<sup>ノ</sup> 宿<sup>ネ</sup>奈<sup>ナ</sup>倣<sup>ヘ</sup>杼<sup>ド</sup>母<sup>モ</sup> 古<sup>コ</sup>呂<sup>ロ</sup>賀<sup>ガ</sup>於<sup>オ</sup>會<sup>ソ</sup>伎<sup>キ</sup>能<sup>ノ</sup>  
安<sup>ア</sup>路<sup>ロ</sup>許<sup>コ</sup>會<sup>ソ</sup>要<sup>エ</sup>志<sup>シ</sup>母<sup>モ</sup>

【語釋】多久夫須麻は、栲衾で、白山の枕詞○之良夜麻は、加賀の白山であらう○宿奈倣杼母  
は、宿ざれどもといふに同じ。なへは、打消の助動詞なふの已然形である○於會伎は、襲着  
で表着の意○安路許會は、あるこそ訛。

【口譯】白山から吹きおろす風の寒さに夜も寝られないが、妻のもたせてくれた表着のあるの  
がうれしい。

【後記】越路に旅行した男の實感であらう。

三五一〇 美<sup>シ</sup>蘇<sup>ソ</sup>良<sup>ラ</sup>由<sup>ユ</sup>久<sup>ク</sup> 君<sup>ク</sup>母<sup>モ</sup>爾<sup>ニ</sup>毛<sup>モ</sup>我<sup>ガ</sup>母<sup>モ</sup>奈<sup>ナ</sup> 家<sup>ケ</sup>布<sup>フ</sup>由<sup>ユ</sup>伎<sup>キ</sup>氏<sup>テ</sup> 伊<sup>イ</sup>母<sup>モ</sup>爾<sup>ニ</sup>許<sup>コ</sup>等<sup>ト</sup>杼<sup>ト</sup>比<sup>ヒ</sup>  
安<sup>ア</sup>須<sup>ス</sup>可<sup>カ</sup>氏<sup>ヘ</sup>里<sup>リ</sup>許<sup>コ</sup>武<sup>ム</sup>

【語釋】我母奈は、願の詞。

【口譯】あの大空をゆく雲になりたいものである。今日ゆいて妻と話をして、明日かへつて來  
られるやうに。

【後記】平明な歌である。遠い國に旅をして戀人を思ひ、空などをうち眺めつゝよんだのであ  
らう。四の卷の安貴王の歌に、「みそらゆく雲にもがも、高飛ぶ鳥にもがも、明日ゆきて妹  
に言問ひ」云々とあるのと同じ意である。

三五一一 安<sup>ア</sup>乎<sup>ハ</sup>彌<sup>ネ</sup>呂<sup>ロ</sup>爾<sup>ニ</sup> 多<sup>タ</sup>奈<sup>ナ</sup>婢<sup>ヒ</sup>久<sup>ク</sup>君<sup>ク</sup>母<sup>モ</sup>能<sup>ノ</sup> 伊<sup>イ</sup>佐<sup>サ</sup>欲<sup>コ</sup>比<sup>ヒ</sup>爾<sup>ニ</sup> 物<sup>モ</sup>能<sup>ノ</sup>乎<sup>ハ</sup>曾<sup>ソ</sup>於<sup>オ</sup>毛<sup>モ</sup>布<sup>フ</sup>  
等<sup>ト</sup>思<sup>シ</sup>乃<sup>ノ</sup>許<sup>コ</sup>能<sup>ノ</sup>已<sup>ヨ</sup>呂<sup>ロ</sup>



【語釋】安乎禰呂は、青山の嶺で、呂は助詞である○伊佐欲比はゆかむとして、ゆきあへず、留らむとして留りあへぬをいふ○上の二句は、いさよひにといはむ爲の序○等思乃許乃已呂は、一年中のこの頃の意である。

【口譯】自分は、この頃はゆくともなく、留るともなく、心が定まらずして物を思ふことである。

三五三  
比登禰呂爾 伊波流毛能可良 安乎禰呂爾 伊佐欲布久母能  
余會里都麻波母

【語釋】比登禰呂爾は、一嶺ろにで、一つぞといふ意。嶺ろといつたのは、次の青嶺ろとあるのに對したのである○伊波流流といはずして、言はるとしたのは、連體形の代りに終止形を用ひる東語に多い一格である○余會里都麻は、依りそふ妻の意。

【口譯】妻と我とは、一つであると、人にはれながらも、青山にかゝつてゐる雲のいさよふ

如く浮きたゞようて定まらぬ妻であるわい。

【後記】噂のみ高くて心の定まらない女を物足らず思つてよんだのであらう。

三五三  
由布佐禮婆 美夜麻乎左良奴 爾努具母能 安是可多要牟等  
伊比之兒呂婆母

【語釋】爾努具母は布雲で、布のやうにたなびく雲をいふ。にぬは、ぬのの訛○安是可は、などかといふに同じ。

【口譯】夕方になると、いつもみ山を離れないあの布雲のやうに絶えることは、いたしますまいといつた女は、今はどうしてゐるであらうか。

【後記】上の二句は、眼前の景を捉へ來つて序としたもので、遠く離れてゐる女を思つてよんだ男の歌であらう。



三五四 多可伎禰爾 久毛能都久能須 和禮左倍爾 伎美爾都吉奈那  
多可禰等毛比氏

【語釋】都吉奈那は、着きなむといふに同じ。

【口譯】高い峯に雲のつくやうに、わたしもあなたを高峰と思つて、あなたにより着きませう。

【後記】女の歌であらう。

三五五 阿我於毛乃 和須禮牟之太波 久爾波布利 禰爾多都久毛乎  
見都追之努波西

【語釋】久爾波布利は、國溢りで、平地に滿ち溢れること。溢りといふ語は、卷十八に「射水

河雪消にはふり逝く水」のとある「はふり」に同じい。

【口譯】あなたは、わたしの顔をお忘れになるやうなことはありませんが、若しさういふことがありましたら、この國土に滿ち溢れて、嶺に立ち昇る雲を見て、わたしを思ひ出して下さいませ。

【後記】夫の留主を守る女の歌であらう。雲を見て面影をしのべといふのは、作者が雲の立ちのぼることの多い地方の人であるからではあるまいか。

三五六 對馬能禰波 之多具毛安良南敷 可牟能禰爾 多奈婢久君毛  
乎 見都追思怒波毛

【語釋】對馬能禰は下縣郡に在る有明山を指すのであらう。安良南敷は、あらずといふに同じく、思怒波毛は偲ばむである。

【口譯】對馬の嶺は、下の方には雲はないから、上の方にたなびく雲を見て、そなたの面影を



思ひ出させう。

【後記】對馬に駐在してゐる防人の歌で、前の三五二五の歌に答へたものと見える。下雲あ  
なふは、事實に即してよんだのであらう。

三五七  
思良久毛能 多要爾之伊毛乎 阿是西呂等 許己呂爾能里氏  
許己婆可那之家

【語釋】阿是西呂は、何としろとの意○許己婆は、許多に同じ○可那之家は、悲しきの訛。

【口譯】彼の女は白雲の中絶するやうに中絶した女であるのに、どうして、このやうに面影が  
心に浮んで、むしやうに愛しいのであらうか。

【後記】別れた女に對する未練を歌つたものと見える。

三五八  
伊波能倍爾 伊賀可流久毛能 可努麻豆久 比等曾於多波布

伊射彌之賣刀良

【後記】この歌第三句以下は、上の三四〇九の上野歌に「伊香保ろに天雲いつぎ可沼づく人と  
おたばふいざ寝しめとら」とあるのと、全く同一である。三四〇九の替歌であらう。

三五九  
奈我波伴爾 己良例安波由久 安乎久毛能 伊氏來和伎母兒  
安必見而由可武

【語釋】己良例は、嘖られで、嘖ばれの約、叱られること○安乎久毛能は、青雲ので、いでに  
かゝる枕詞。

【口譯】わたしはお前のおつかさんに叱られ、歸つてゆくのであるが、せめてはもう一目見て  
ゆきたい、こゝまで出て来てくれ。

【後記】如何にも素朴な歌である。



三五〇 於毛可多能 和須禮牟之太波 於抱野呂爾 多奈婢久君母乎  
見都追思努波牟

158

【口譯】わが思ふ女の面貌を忘れるやうなことはあるまいが、若しさやうのことがあつたら、大野にたなびいてゐる雲を見て、わが戀人を思ひ浮べて、しのびませう。

【後記】男の歌である。

三五二 可良須等布 於保乎會杼里能 麻左氏爾毛 伎麻左奴伎美乎  
許呂久等會奈久

【語釋】於保乎會杼里は、大虚言鳥である。このをそといふ語を輕佻の意と見る説もあるが、論據がたしかでない○麻左氏爾毛は、まことしやかにの意○許呂久は、兒等來である。

【口譯】鳥といふ大うそつきが、ころく／＼と鳴く。憎らしい鳥だ。わが待つてゐる人は來も  
しないのに。

【後記】男を待ちわびた女の心情の自然の發露であらう。

三五三 伎會許會波 兒呂等左宿之香 久毛能宇倍由 奈倍由久多豆  
乃 麻登保久於毛保由

【語釋】久毛能宇倍由は、雲の上をの意○麻登保久は、間遠くで、久しくの意○三四の句は序である。

【口譯】昨夜女と寝たばかりであるのに、なぜこのやうに久しく思はれるのであらうか。

【後記】眼前の景によつて戀人を思ひ浮べたのであらう。

三五三 佐可故要氏 阿倍乃田能毛爾 爲流多豆乃 等毛思吉伎美波

159



安須左倍母我毛

【語釋】佐可故要氏は、坂越えて來る意○阿部は、今の静岡市、坂は宇津ノ谷峠であらう○等毛思吉は、めづらしき意。

【口譯】坂を越えて來て、安倍の田の面に居る鶴のやうにめづらしく、うつくしい君は明日もまたお出で下さいませ。

【後記】宣長は「此の乏しきは、うらやましきなり。日毎來ぬ日なく來居る鶴を羨みて、わが男も毎日、明日も來れかといふなり」といつてをる。

三五四 麻乎其母能 布能末知可久氏 安波奈徹波 於吉都麻可母能  
奈氣伎會安我須流

【語釋】麻乎は、眞小で、接頭語○布は簡で、編薦の一節、簡のまでは、間近くてといはむ

爲の序である○安波奈徹波は、逢はねばの意○於吉都麻可母能は、沖つ眞鴨の如くの意である。これは、諸註にいつてゐるやうに、水鳥は、水から浮び上つて溜息をつくが故に、なげきに冠らせたのである。

【口譯】ま近いところに在りながら、逢ふことが出來ぬゆゑ、ため息のみをついて、戀に苦しむのである。

【後記】上の句と下の句とに近いといふ語と長い意の語との相對してをるのがおもしろい。

三五五 水久君野爾 可母能波抱能須 兒呂我字倍爾 許等於呂波徹  
而 伊麻太宿奈布母

【語釋】水久君野は、所在不明。古義には「武藏國秩父郡に水久具利といふ里あり。其の地にや」といつてをる○上の三句は延へといはむ爲の序である○於呂波徹は、不たしかに言葉を通はすことであらう。大神ノ眞潮は「おろく延へたるばかりにての意なり」といつてを



る。

【口譯】あの娘とは不たしかに言葉を通はしたのみで、まだ一緒に寝たこともないのに、なぜこのやうに戀しいのであらうか。

【後記】遂げざる戀のためになやむ男の歌であらう。

三五六 奴麻布多都 可欲波等里我栖 安我許己呂 布多由久奈母等  
奈與母波里會禰

【語釋】可欲波等里我栖は、通ふ鳥のすの訛で通ふ鳥の如くの意○上の二句は二行くにかゝる序詞○奈母は、らむの訛○奈與の與は感歎の助詞○母波里は、思ひの訛であらう。

【口譯】二つの沼をあちらこちらへと通ひゆく鳥のやうに、わが心が兩方に通ふのであらうと思つてくださるな。

【後記】沼の多い地方の民謡であらう。

三五七 於吉爾須毛 乎加母乃母己呂 也左可杼利 伊伎豆久伊毛乎  
於伎氏伎努可母

【語釋】須毛は、住むの訛○母己呂は、如くの意。二十の卷にも「松のけのなみたる見れば、家人のわれを見送ると立たりしもころ」とある○也左可杼里は、八尺鳥で、八尺もある長い息をつく鳥の意であらう。

【口譯】沖に住む小鴨のやうに長い／＼息をついて、別を惜しむ妻を家において別れて來た。さても名残惜しいことである。

【後記】防人などにゆく男の歌であらう。

三五八 水都等利乃 多多武與會比爾 伊母能良爾 毛乃伊波受伎爾  
氏 於毛比可禰都毛



【語釋】水都等利乃水鳥ので、立つの枕詞○與會比は支度○伊母能良の良は助詞。  
【口譯】出發の支度にまぎれて、妻とゆつくり話もしないで来て、戀しさに堪へかねる。  
【後記】卷四に「珠衣アツギのさわくしづみ家の妹にもいはず来ておもひかねつも」とあり、卷二十に「みづとりのたちのいそぎに父母にもいはず来ていまぞくやしき」とあるのに似た歌である。これも防人の歌であらう。

三五元  
等夜乃野爾 乎佐藝禰良波里 乎佐乎左毛 禰奈徹古由惠爾  
波伴爾許呂波要

【語釋】上の二句は、をさの音をくりかへして、をさくといはむための序としたのである○等夜乃野、和名抄に、下總國印旛郡に鳥矢（鳥は鳥の誤であらう）があり、古義には、「この處ならむか」といつてをる○乎佐藝禰良波里は、兎ねらひの延言で、獵師が兎をねらふことをいふ○禰奈徹は、寝ざること○乎佐乎左毛は、あまりといふ程の意○許呂波要是、ころ

ばゆの訛であらう。

【口譯】これまであまり一緒に寝もしない娘のために女の母に叱られるのは、口惜しいことである。

三五〇  
左乎思鹿能 布須也久草無良 見要受等母 兒呂家可奈門與  
由可久之要思毛

【語釋】上の三句は、さを鹿の伏す叢は外から見えにくいといふので、見えずともといはむ爲の序としたのである。十卷に「春されば伯勞モズの草ぐき見えずとも」とあると同例であらう○可奈門欲の欲は、をと同じ○要思は、よしの古語。

【口譯】たとひ女の姿は見えないでも、女の門を通るのがうれしい。

【後記】年若い男の眞情である。



三五三 伊母乎許曾 安比美爾許思可 麻欲婢吉能 與許夜麻倣呂能  
思之奈須於母倣流

【語釋】麻欲婢吉能は、横山の枕詞、横山は横に靡き連る山○倣呂の呂は助詞。

【口譯】わたしは、たゞ娘を見に來たに過ぎないのに、女の家では、横山のほとりの野を荒す鹿のやうに思つて、自分を逐ひ拂はうとする。

三五三 波流能野爾 久佐波牟古麻能 久知夜麻受 安乎思努布良武  
伊倣乃兒呂波母

【語釋】上の二句は、口息まずといはむ爲の序○久知夜麻受は、口を休めぬこと。

【口譯】家に在る妻は絶えず自分を戀ひこがれてゐることであらう。

【後記】旅にある男の、草を食む駒を見て、家なる妻を思ひ出してよんだのであらう。

三五三 比登乃兒乃 可奈思家之太波 波麻渚杼里 安奈由牟古麻能  
乎之家口母奈思

【語釋】波麻渚杼里は濱渚鳥。海邊の沙地を歩む水鳥は行き悩むものであるから、足悩むの枕詞としたのである。

【口譯】他人の娘が戀しく思はれると、女に逢ひたさに、馬の悩むのをも厭はず、幾度も同じ道を往復することである。

【後記】契沖が遊仙窟に若使二人心密莫惜馬蹄穿。とあるのを引いて類似の作としてゐるのもおもしろい。

三五四 安可胡麻我 可度氏乎思都都 伊氏可天爾 世之乎見多氏思  
伊倣能兒良波母